

沖縄県立博物館紀要

第 20 号

BULLETIN OF

THE OKINAWA PREFECTURAL

MUSEUM

No. 20

1994

目 次

當眞嗣一：グスクの縄張りについて（下）	1
與那嶺一子、金城武子：沖縄の産育儀礼における子どもの衣服と背守り	27
前田真之：インタープリテイションとボランティアガイド	49
嵩原建二：宜野湾市伊佐、大山、宇地泊周辺地域の鳥類と哺乳類	67
久貝勝盛：サシバの秋の渡りと集団渡来地の住民とのかかわり	97
萩尾俊章：第二代沖縄県令上杉茂憲関係資料について	111
比嘉悦子：津和野旧藩家の琉球楽器について	129
短 報	
嵩原建二：最近沖縄で目撃及び保護された興味深い鳥類	141

沖 縄 県 立 博 物 館

OKINAWA PREFECTURAL MUSEUM

沖縄県立博物館紀要

第 20 号

沖 縄 県 立 博 物 館

目 次 CONTENTS

當眞嗣一：グスクの縄張りについて（下）	1
TOMA Shiichi : On the Ground Plan of the Gusuku, the Medieval Castles, in the Ryukyu Islands (2)	
與那嶺一子、金城武子：沖縄の産育儀礼における子どもの衣服と背守り	27
YONAMINE Ichiko and KINJO Takeko : A Study on the Children's Clothes and Talisman worn on the back in the Customary Upbringing of Okinawan Children	
前田真之：インタープリテーションとボランティアガイド	49
MAEDA Masayuki : Interpretation and Volunteer Guide	
嵩原建二：宜野湾市伊佐、大山、宇地泊周辺地域の鳥類と哺乳類	67
TAKEHARA Kenji : The Birds and Mammals of Isa, Oyama and Uchidomari, Ginowan City, in the Central Part of Okinawa-jima, Southwestern Islands of Japan	
久貝勝盛：サシバの秋の渡りと集団渡来地の住民とのかかわり	97
KUGAI Katsumori : The Relationship between Autumnal Migration of the Gray-Faced Buzzard-Eagle and the Native People of the Concentration Migratory Points	
萩尾俊章：第二代沖縄県令上杉茂憲関係資料について	111
HAGIO Toshiaki : Report on the Materials of Mr. Mochinori UESUGI, the Second Okinawan Prefectural Governor	
比嘉悦子：津和野旧藩家の琉球楽器について	129
HIGA Etsuko : The Uza-gaku Instruments of Tsuwano Feudal Clan, Shimane Prefecture	
短 報 Short Report	
嵩原建二：最近沖縄で目撃及び保護された興味深い鳥類	141
TAKEHARA Kenji : The Interesting Birds that were Observed or Given Medical Care Recently in the Okinawa Islands	

グスクの縄張りについて（下）

當 真 嗣 一

(沖縄県立博物館)

On the Ground Plan of the Gusuku, the Medieval Castles, in
the Ryukyu Islands (2)

Siichi TOMA

(Okinawa Prefectural Museum)

ヒラキ山遺跡（龍郷町戸口）

この遺跡は龍郷町の東南端戸口にあるグスク跡である。戸口の集落は200~300mを越す山並みを背後に、前には良港となる小湾を擁し太平洋に面している。東に大美川、南から西に戸口川が流入し、その川沿いには広い水田が広がっていて村落立地の上で恵まれた村である。

グスクは、中戸口の背後にあり、大美川と戸口川とに挟まれた南北に長い微高地の先端部を利用してつくられている。1773年の『平家没落由来書』には、平行盛の居城であること、城の規模、行盛本城を守るためにまわりに松當城などの支城が築かれていたこと、さらに、遠見番として安木屋場や屋仁崎に今井権大夫、蒲生左衛門等を召し置いたことなどが記述されている。この文書は、17世紀に記述されたものでそのまま史実とするわけにはいかないが、戸口の旧家等に長く伝承されていたということに大きな意味があるようと思われる。

グスクは周辺の平地部との比高が23mあり、城内からは戸口の集落や農耕地が一望のもとに見わたせる。このグスクの西には戸口川を挟んで標高114mのコミグスク、西の足下にはグスクと称される標高13m程の小高い丘がある。コミグスクは、ナガネと呼ばれる山並の北端にあたる山頂のことである。隣接したオデと呼ばれるピーク部との間には幅2m、深さ3~4mの堀切があるといわれる。このコミグスクは、『平家没落由来書』にヒラキ山の支城としてみえる松當城に比定できるグスク跡である。グスクと称される丘は、

中戸口の裏側（北）にあり、平地部との比高差が10mある。この丘はターチヂと呼ばれる山並みからつづく尾根の先端部にあたる。後方の尾根との間は堀切によって区切られ独立した丘になっている。古戦場跡といい伝えられており、かつてはヒラキ山と関係の深い、⁽³⁾ グスクだった可能性がある。

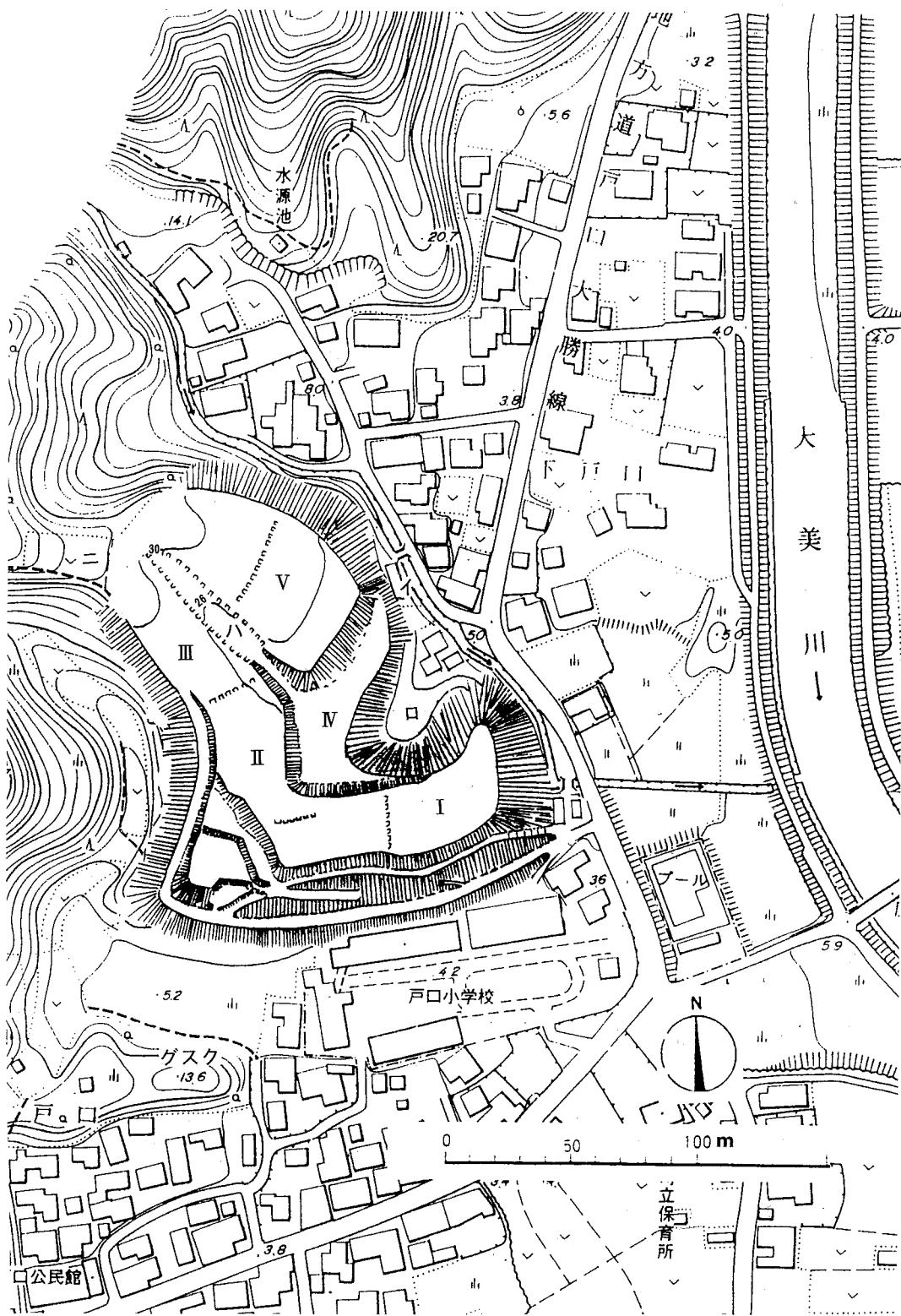
城内は北西から南東方向に一本の浅い堀切が入り曲輪群が東西に二分された形になっている。西側の曲輪群はさらに先端部が東側に屈曲して突出し、下戸口の集落から大美川の北を眼下に望むような位置にある。東側の先端部に置かれた曲輪Ⅰは、東西約40m、南北約30mの規模をもつ、グスク内でも最もきちんとした曲輪の形態を有し、かつ三方が鋭い切岸によって囲まれていることから主郭だと思われる。曲輪Ⅰの南側と西側に腰曲輪がそれぞれ二つづつ取りついている。南側の腰曲輪は、幅の細い帯状になった腰曲輪で上下二段になっている。南からの侵入に備えて築かれたものであろう。曲輪内は、現在、アスレチック用の遊具が置かれ子供たちの遊び場になっている。また、曲輪の東側には階段状になった外部からの出入り口が取りつけられている。西側の腰曲輪は、やや規模の大きいもので、やはり上下二段になっている。西側がかなり緩い斜面になっていることから、それへの備えてとして築かれたと思われるが、曲輪を矩形にもっていくなど、かなり神経をつかった内容の腰曲輪になっている。

虎口は、下戸口に向かって開いたU字状の谷部口に設けられていたと推定されるが、現在、その推定位置には雑木が生い茂り調査を困難にしている。そのため虎口の形態については明らかでない。イ付近を地元で「マエサク」と呼んでいる。「ヒラキ山に平家の城があったころ城への上り口があった所」としての伝承が残っている。⁽⁴⁾

ハは堀切状になった窪みで、この窪みによって城内が二分される形となる。この窪みの南側に口の谷部が開いており、虎口からの引き込み的な空間になっている。虎口から入ってくる者は、必ずこの窪みを通過しなければならず、その際、上部の曲輪群からは見通しがきき、迎撃が可能である。

曲輪群を西側の方から順にみていくと、まず西側にⅡとⅢの曲輪が尾根上に連なり、東側にⅣとⅤの曲輪が展開する。規模的には東側の曲輪が大きい。現在いずれも畠になっている。ⅢとⅤの曲輪の北側は、ターバチと呼ばれる山並みの尾根部にあたるところで、この方面に対しては堀切を設けて防御を固めている。現在この付近は農地整備等によって改変を受け、堀切だったことが気付きにくくなっている。しかし、地形をよく観察するとわずかに堀切の痕跡をくびれ部に確認することができる。

このヒラキ山は、切岸の斜度が急で、城内の各曲輪群も段差がついていて複雑に構成されている。さらに南には、コミグスクを支城として配置するなど、明確な防御意図をもって築城されたことが想定できる。すぐ近くに良港となる小湾を控えていることもヒラキ山



が城であることの性格を際立たしている。

昭和44年12月11日から16日までの6日間、熊本大学の松本雅明教授らによって試掘調査が行われた。それによると、13世紀の半ばすぎと、15世紀の中期ちかくの二度にわたって火災にみまわれていたことが報告されている。さらに、わずか3坪余の小面積の発掘で、南宋から明初にいたる貿易陶磁600余の破片を発掘し、この城が海外貿易によって栄えていたことを立証した。⁽⁵⁾

以上、奄美大島に分布するグスクのうち赤木名グスク、浦上グスク、伊津部勝グスク、ヒラキ山の4つのグスクについて述べてきた。奄美大島にはその他にも数多くのグスクがあり、沖縄のグスクとは違う構造や形態をとっている。しかし、ここでは個々のグスクについて網羅的に記述することを避け、各地域に分布するグスクを数ヵ所づつ取り上げてこれを資料化することによりグスクの実態に迫るべく、そのための基礎作業として縄張図を作成し、縄張りからみたグスクの機能や性格を考えていくこととする。

繰り返すようであるが、本稿の意図するところは、これまでのグスク研究で全く振り見られなかった縄張り研究を通して、その重要性を訴えつつ今後のグスク研究の方向性を見出していくこうとするところにある。

では、これまで述べてきたグスクの縄張などを検討しながらその構造や内容および性格等について考えて見ることにしよう。

前述した四箇所のグスクに共通していえることは次の7点である。

- ①沖縄のグスクに多く見られる石垣や石塁が認められない。
- ②堀切や切岸によって、それなりに独立したグスクとしてとらえられる。
- ③集落の裏山に位置し、村によって城が造られたといったイメージである。
- ④比較的広い農耕地を擁する集落に1セットで存在し、その集落や農耕地が展望のきく所にある。
- ⑤近くに小湾や川を控えている。
- ⑥グスク内から貿易陶磁器が採集される。
- ⑦神聖化された山になっているのが多い。中には神社の敷地になっているものもある。

まず、①と②であるが、たしかに奄美大島のグスクには、沖縄の石灰岩地帯で広く見られる野面積みの城壁（野面積みの石垣がわずかに認められるグスクもある。しかし、これらの石垣は城壁と呼べるようなものではなく、曲輪内を仕切るための粗雑な石積みか、あるいは、敵への投石用として準備された石積みの類である。）や切石積みの高い城壁を有するグスクはない。石垣に代わるものとして山の斜面を削ってつくった切岸、峰づづきを遮断する目的の堀切、あるいは土を盛って防御壁とする土塁等が発達している。そのことから考えると、奄美大島のグスクは、日本の中世城館が切岸や堀切、あるいは土塁などの

組合せによってできていることと一致し、石垣を主体とする沖縄のグスクとは若干様相を異にしていることがわかる。

②から⑦については、奄美大島におけるグスクの内容などを考える上で非常に重要な特徴点であり、各グスクの構造や規模を検討しながらもう少し突っ込んで考えてみることにしよう。

前述の四つのグスクは、いずれも舌状に張り出した山の先端部を利用したものである。峰つづきを堀切で遮断し、孤立した山のピーク部を主郭にする。その主郭を中心に離段状に造られたいくつかの小曲輪群によって構成されている。浦上グスクや伊津部勝グスクは、小曲輪群が最も単純に構成されたもので、規模も小さい。その点、赤木名グスクの場合には、尾根筋沿いにいくつかの小曲輪群を配置するとともに、主郭の下に腰曲輪、さらに、谷沿いから上がってくる侵入者に対して堅堀を設けるなど、2つのグスクに比べ複雑な構造をもち、技巧性に富むと同時に山のピーク部を複数取り込む形で築城されていて規模も大きい。

一方、ヒラキ山の場合は尾根筋のくびれ部に堀切を設け後方の山との独立性を保つことでは、浦上グスクや伊津部勝グスクと類似するが、城内の曲輪群は規模が大きく、平地との比高差も高く、防御上のまとまりもしっかりしている。

このように、奄美的グスクも中世城館と同じ形態をとっているものの曲輪の構造や城域の規模などの点でそれぞれ差異があり一様ではない。これらのことを見ながら考えると、グスクは城であることには違いないが、機能や性格の異なるいろいろなグスクがあったのではないかと考えられるのである。

浦上グスクは、南島落ちをした平家の平有盛が大島の北部経営のために築いたという伝承がある。グスクは、浦上川の氾濫原を見下ろす舌状台地の先端部に立地する。

グスク内には有盛神社があり、神社の鳥居をくぐって境内に入っていくと、城内で一番広い曲輪に到る。現在、この曲輪の左端にはトタン葺きの拝殿が建っている。この曲輪から、山のピーク部に向かって一段一段離段状に高くなっている最終的に6つの小曲輪が形成されている。ひとつひとつの曲輪の規模は約7m×6m程の小さな面積である。

ピーク部は標高43mを測り、面積約70m²程の防御された削平地（ここには、現在、奄美代官肥後翁助が1816年に建立した平有盛の墓碑があり、その脇には1817年藩役人が寄進した石燈籠等が建っている。したがって、これらの墓碑や石燈籠はもともとグスクとは関係がない）になっている。さて、このピーク部の後方（東側）は切岸になって一段下がり、この低くなったところに堀切が掘られている。堀切は三本切られており、三本の中では真中の堀切が一番保存良好で、現状では幅5m、深さ4mを測る。このピーク部の削平地（小曲輪）からは、城内の各曲輪の様子や、後方堀切部の様子が手にとるように見え

る。城内への虎口は、おそらく現在の神社入口と重なり、鳥居が建っている付近を想定することができる。古くは浦上の集落がこの虎口の西側前方に展開していたようである。城内の各曲輪群に取りつく虎口は、すべて曲輪下方南側縁部に取りついていて、虎口から侵入してくる敵兵に対して曲輪内から側面攻撃が加えられるようになっている。

グスクと浦上集落との位置をみると、両者は至近距離にあって、集落のすぐ裏の山がグスクといった関係である。このような立地のグスクは、イザというとき、村人が避難する場所としては好都合であり、攻撃より、防禦、避難に適した構造・規模となっている。

さらに、このグスクの構造をみると、もし、侵入者が城内に入り込んできたとき、城内に避難した人々は堀切をこえて尾根づたいにグスク後方の高い山へと逃げ、敵兵が去れば、また、山を下りてグスクに入るといった状況の想定が可能である。したがって、浦上グスクは、領内の有力者が先になって築いた城ではあったが、彼らの領域支配の拠点のためというより、有事の際、領内の有力者をはじめ、領内の人々の生命や財産を保障するための避難の城であり、「村の城」というイメージで捉えることができるのではないだろうか。伊津部勝グスクの場合も、この浦上グスク同様、細尾根をいくつか掘り切っただけの、小規模グスクで、②と③の特徴を有していることから、「村の城」のイメージで捉えられる城であるが、繩張りをもう少し詳しく見ていくことにしよう。⁽⁶⁾

伊津部勝グスクは名瀬市の東海岸に川口をもつ大川流域の沖積平野に面した台地の先端部に築かれたグスクである。集落からまっすぐのびた道の延長線上に一枚の主郭を配置し、その後方の尾根に二本の堀切を掘っただけの単純なグスクである。主郭の面積は 697 m^2 ($17 \times 41\text{ m}$)、南と北側には比高約4mの切岸、南側尾根続きのところには、幅2mの土壘と幅5mの堀切を掘って主郭の守りを固めている。虎口は、西の平野部に面し、そこから一本の道によって集落に連結されている。虎口は矩形になり、一応侵入者に対しては防禦を固めているようであるが、集落から登るとすぐ虎口にぶつかる構造を取っている。繩張りも南北一直線のものである。このように単純で小規模の内容である伊津部勝グスクは、多くの点で浦上グスクに類似性を見出すことができる。したがって、この伊津部勝グスクもまた、領内の有力者と村落民の協力によって生み出された「村の城」なのである。

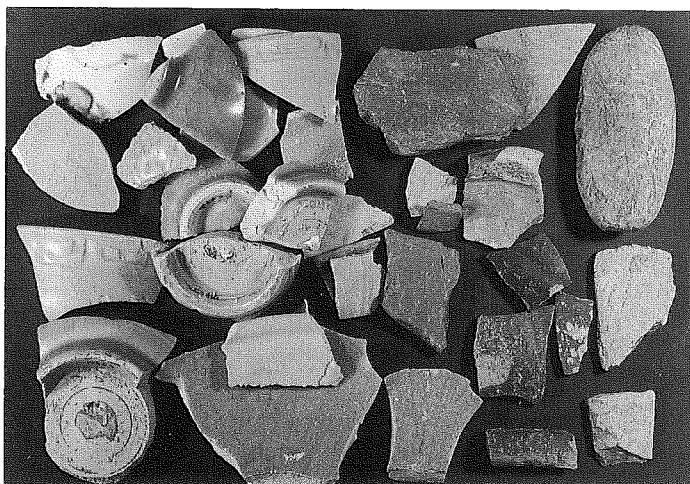
さて、次に述べる赤木名グスクやヒラキ山などはどうであろうか。先の浦上グスクや伊津部勝グスクと比べて見ると、グスクの規模が大きくやや複雑な構造をとっていることなど全体的な繩張りやグスクの規模等についていろいろと違いがある。その他グスクを生み出した村落環境についても大きな違いを認めることができる。たとえば、村落の規模が大きいこと、領内の農耕地が広いこと、また、近くに良港となる海岸入江を控えているといったこと等、地理的な立地条件も含め浦上グスクや伊津部勝グスクといろいろな相違点があることがわかるのである。

赤木名グスクは、比高100m前後の丘陵上に占地したグスクで、尾根上に削平段を連ね、その下方には腰曲輪を配置するなどしてなかなか複雑な曲輪群によって構成されている。土塁や堀切等未発達の部分もあるが、構造としては浦上グスク、伊津部勝グスクよりはるかに優れていると見なければならない。

ヒラキ山は、龍郷町戸口川の段丘面にあり、北から南にのびた台地がさらにが東に曲がっている舌状台地の先端部に占地したグスクである。曲がって細くなったところには堀切を掘り、先端部だけを独立させて築かれたグスクである。グスクの規模は、東西の最大幅約135m、最少幅約80m、南北は西側が150m、東側が100mを測る。平地部との比高は20～30mで、グスクの南に戸口川、東側に大美川が流れ、両川の沿岸には広い水田地帯が広がっている。縄張り構造の特徴をみると、先の赤木名グスクより比較的に単純な構造をとっているものの、各曲輪の面積がほぼ一定しておりかつ比較的広いスペースが確保されている。

さて、この二つのグスクとも近くの平地には比較的大きな村落を控えており、これらの村落とセットになって存在していたことがわかる。もちろんグスク時代の村落が現在と全く同じところに同じ規模で相似的に存在していたわけではないが、両村落が比較的古くからの村落であることから考えるとグスク時代にもその状況は現在とあまりかわらなかつたのであろう。

グスクの構造はその築城主体者のおかれている政治的、経済的、社会的な諸条件によって決定されるのであるから、個々のグスクの形態はその当時の歴史的状況に対応していたとみられる。そのような観点から見ると、赤木名グスクやヒラキ山の場合は、前述した浦上グスクや伊津部勝グスクと違って、より大きい村落を含む広い範囲を単位とする拠点的な領域支配のためのグスクであった可能性がある。



ヒラキ山採集の遺物

グスクを擁する赤木名や戸口の集落は、地形的にも奄美大島では珍しく広い平野部が開けたところであり、近くには風の影響も受けにくい波静かで天然の良港となる小湾や内陸部との連絡路となる川を控えている。これらの地形的条件に恵まれたためか、この二つの村落は古くから発達した地域であった。そうした村落を基礎に成長した地域的支配者がいたからこそ赤木名グスクやヒラキ山のような複雑な構造をもち規模の大きいグスクが築城されたのであろう。

このように各地のグスクに拠って地域的支配をおこなっていた有力者を沖縄では按司または世の主といい、奄美大島ではアジ、ヒャー、グラルなどとよばれていたらしい。

このように各地のグスクを拠点に地域的支配をおこなっていた按司（アジ、ヒャー、グラル等も含む）の歴史的性格について三木靖氏は、「日本列島に10世紀にみられる成長期の在地領主の一類型と位置づけられるべき」だという認識をしめしている。たしかに、三木氏がいうように、南西諸島の歴史をみると(7)場合に後進性のみが強調され、グスク時代の地域的支配者であった按司たちの歴史的性格については正当な位置づけがなされてこなったように思われる。そのために按司たちが拠ったグスクについても在地領主制に不可欠であった城郭だという認識をもたぬまま今日のグスク論争をむかえ、現在、それが一人歩きしている感さえするのである。南西諸島に広く分布するグスクの歴史的意義を考えいく時、どうしても避けて通ることのできないのが在地領主制の性格の考察であろう。その点、中世の奄美（沖縄でいうグスク時代のころ）を「在地領主制の展開として理解することができる」と考える三木氏の意見に賛同したい。

三木氏の考える奄美の中世についてもう少し立ち入って見ることにしよう。氏は、奄美の中世を在地領主制の成生、発展、展開として捉え、その過程を「按司世」と「那覇世」、琉球王家の領国化に分析し検討をおこなっている。奄美での在地領主制が成立する時期については、消極的発言ながら11世紀前後を想定する。さらに出自については、根本的に生産力の発展に依拠しつつ共同体の分解の中から登場したと述べる。その他、沖縄や本土からの渡来者の中から在地領主になる例もあったことを地域の伝承や遺跡をしめしつつ論証している。そして13世紀までの奄美は、在地領主制の成立時期であり、14世紀以後は琉球王国の領国化として進展し、中世の後半すなわち15世紀以降は領国制に編成されたと考えた。したがって、奄美の中世が全期間琉球の支配下にあったとすることに警鐘を鳴らしつつ、奄美のグスクについては、「沖縄の勢力圏、文化圏にありながらこの地の中世前期までの伝統と、独特的地理的な状況基盤に発展してきたもの」と結論するのである。

三木氏の論文は、『奄美文化誌－南島の歴史と民俗－』所収の「奄美の歴史」（中世）に掲載された論考であるが、奄美のグスクやその築城主体者の問題をはじめて歴史的に検討した論文として高く評価したい。

根謝銘グスク（大宜味村字謝名城）

根謝銘グスクは、大宜味村字謝名城の東に聳える山の上に築かれている。グスクの北には、水量豊富な屋嘉比川（田嘉里川）が国頭脊梁山系の上流から西に貫流し東支那海に注いでいる。かつてこの川の両側には、水田が展開しており、それを取り巻くように小さい村落が点在していた（かつての水田は現在キビ畑にかわっている）。また、屋嘉比川の河口にはかつてヤファインナト（屋嘉比港）と呼ばれる港があって、沖縄周辺をはじめ遠く奄美大島諸島との交易船が出入りしていたとのことである。⁽⁹⁾

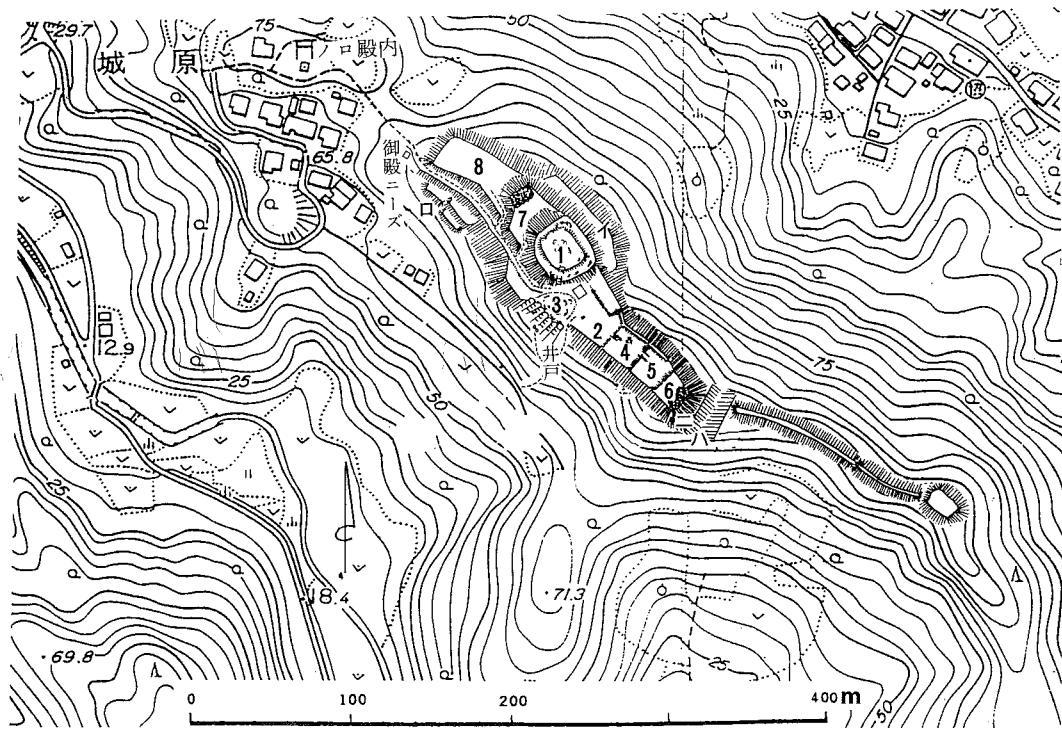
水田地帯と河川、その周辺に点在する小集落、さらに良港となる小湾を控えるといった地理的環境は、グスクが立地する上で好条件であり、根謝銘グスクはまさに地の利を得たグスクであった。

グスクが占地する山は、標高122mを測り、山麓の小字城との比高差が約50m、北側に展開する水田地帯との比高差は百十数メートルもある。

このグスクは、尾根の上に削平段を連ねその中に三つのピーク部を取り込んで築かれている。主郭の曲輪1がある北側のピークは、標高115mで、周辺に腰曲輪を配し30m×20mの規模をもつ曲輪である。曲輪内の東端に琉球石灰岩の露頭部があり、現在香炉が置かれ拝所として信仰の対象になっている。『国頭村史』では、『琉球国由来記』にてている「小城嶽、神名大ツカサナヌシ」に比定している。地元の人たちはウウグシク（大城）と呼んでいるが、曲輪全域をそういうのか、それともこの石灰岩が露頭する拝所のみをいうのかはっきりしない。この拝所は現在でも謝名城地区の大城門中によって祀られているといふ。

⁽¹¹⁾ ところで曲輪1は、周辺の各段に腰曲輪を付属させ、背後には鋭い切岸と断崖を控えるなど他の曲輪に比べ防御が厳重になり主郭としての体裁が整っている。曲輪内に琉球石灰岩の大岩が自然のままに残され外側から中の様子が見えないようになっているのも防御上の工夫からである。主郭は、グスクが攻められたときの最期の場として最も重要な曲輪であり、それなりに防御を固め、城主やその一族が自分たちの居所を構える空間として使用されたところである。

では、この曲輪1の中に御嶽があるのは何故だろうか。それは、沖縄社会がグスク時代をむかえて各地に按司と呼ばれる在地領主が出現して貿易の利権や支配領域の拡大をめぐって合い争う緊張した社会の動きの中で、按司たちの自己の勝利と村落の安寧を願う目的でもって、守護神を祀る御嶽がグスク内につくられ信仰されたからである。グスクに拠って小さな天下を支配した按司たちは、それなりの国家を夢みてグスク内に守護神を祀り崇拝していたことは、今帰仁城の城主攀安知が尚巴志軍の攻撃で破れたときに「城を守れ



根謝銘ヶ城縄張図

ない神には用がない」として一刀のもとに守護神の大岩を切り捨てたという伝承などからもうかがうことができる。

現在、各地のグスクの中に存在している御嶽は、このような経緯を経てつくり出され、廃城になってからは沖縄のグスクが「村の城」という性格を有していたこともある。後世村落民の信仰する御嶽として変質していったものと思われる。

さて、現在、この曲輪1の東南隅には後世つくられたと思われる石の階段が上下二箇所に取りついていて御嶽への出入り口として利用されている。おそらく、ここが主郭の虎口であろう。虎口を出て右に折れると城外へ抜ける城道、左を折れるとすぐ曲輪2である。

曲輪2は比較的大きい曲輪で、その中に神アシャギと呼ばれる6間四方（東西630cm×南北560cm）の壁のないセメント瓦葺きの建物が建っている。この建物の前庭部では旧盆後初亥の日に神女たちによって祭儀がとり行われているとのことである。また、この前庭部の北に隣接して腰曲輪イがあり、この下に鋭い切岸が設けられ城内への侵入を阻んでいる。南南西の隅には火の神を祀る小祠がある。この小祠の南に隣接して崖下の城外に通じる小道があり、現在はコンクリートの急な階段が取りつきグスクの麓まで下りて行けるようになっている。この階段の途中の崖下に二つの井戸跡が並んで存在するが土砂の流入によって完全に埋まり、現状ではわずかな縫みと線香が供えられていることで、かろうじて井戸跡だとわかるのである。

曲輪 3 は、全面石灰岩によって被われた 20m × 10m 規模の小さい曲輪で、南側は鋭い断崖に面し、北と東側は低い段差によって曲輪 2 に接している。曲輪 2 との比高差が現状では約 1.5m を測るが、古くはもっと高かったのであろう。地元の人はこの曲輪のことを中心城と呼んでいる。現在は御嶽として聖域になっているが、もとはグスクの防御にとって重要な曲輪だったと思われる。その理由としては、この曲輪の南縁が崖側に向かって僅かに突出していることでグスクの南斜面に視野が広がり、この方面から侵入してくるものにすばやく対処できること。曲輪の南下には前述したように井戸があり、その井戸を監視するのに都合がよいこと、さらに主郭の正面に向かいあって隣接することで主郭側の虎口を警戒するのに都合がよいこと等があげられる。曲輪内に櫓を設ければ、城下の謝名城や喜如嘉、さらに海上までも展望できるので遠くにいる敵襲にも備えることができる。このように、現在は御嶽になっていても、縄張りの構造を考えることでグスク内の一ひとつずつの曲輪が軍事上いかに重要な役割をになって造られていたかということを私たちは知ることができるのである。

さて、曲輪 2 の南東側は次第に高くなっていくが、そこには曲輪 4 が構築されている。この曲輪の北よりに琉球石灰岩で囲まれた直径約 1m の円形形状をした井戸跡といわれる窪みがあり現在拝所になっている。筆者が踏査した日には、前日までの雨のせいか 7 分ほどの水を湛えていた。グスクが立地する山の高いところでは水の確保が難しいという理由か



曲輪 4 の井戸跡といわれる遺構

らグスクは城ではないんだと考える人もいるが、実際、水量は少ないけれども地形・地質の構造によって高い所でも湧水がある場合もあり、この種の遺構について現在は枯れ井戸であったとしても、当時、溜井や井戸であった可能性は十分考えられる。⁽¹⁴⁾

この曲輪の東端には比較的しっかりした土塁が廻されている。水場を守るために警戒したことであろう。曲輪の西端にも東端同様土塁があるはずだが、そこは足を踏み入れることができないほどのブッシュに覆われているため確認することはできない。

さらに一段高くなって曲輪5がある。曲輪4との比高差は70~80cmを測る。この曲輪の東端にも土塁があるが、井戸曲輪4の土塁に比べると現状では幅が狭く、貧弱なうえに土塁の線も明瞭ではない。曲輪の正面に虎口らしい痕跡を確認することができるが、ブッシュに覆われているために精査ができず、即断はできない。

曲輪5より2m程高くなつて曲輪6が連続する。曲輪6は、自然地形の登りの瘦尾根をそのまま曲輪に活用している。この曲輪の南東側123mのピーカ部には人頭大の琉球石灰岩塊を雜然と積み上げた櫓台状の高まりが存在する。この櫓台状の高まりの背後は鋭い切岸となって北東から南側の方向に傾斜し、そこには、上端の幅が約10m、底幅が約6mを測る大きい箱形堀切が入っている。この堀切は、堀底から上の曲輪6までの高さが約9mもあり、東南東支尾根を攻め上ってきた敵が、曲輪6に取り付くのを阻止するには十分な防御施設であるといえる。

ところで、曲輪6の南東側先端部にある櫓台状の施設はどういうものであろうか。主郭の下に連なる曲輪7の先端部でも、また、次項で述べる親川グスクの中にもこの種の施設が見られるので少し検討を加えることにしよう。

まず、櫓台状を構成する石であるが、それは、前述したように拳大から人頭大の琉球石灰岩塊で、手で持つて投げたり、斜面を転ばしたりするのには手ごろである。また、積み方を見ても、石面がバラバラで隣の石と石の控えもかみあわず積石としては全くお粗末だといわざるを得ない。このように、場所を特定し、武器にも転用できる石がこういう形で存在することについて筆者は、投げるのに手ごろな石灰岩塊を、普段は曲輪の先端部に積んで置いて、一旦ことあるときには投石用の武器として用いたのではないだろうかということを考えている。

堀切を渡って下方から登つて来る敵に真上から石を投げて撃退する。当時の戦いの状況のなかでこのような戦術が取られた可能性は十分考えられることである。沖縄の古代歌謡集である『おもろさうし』の中には、刀・弓矢・槍・鎧等、武器や武具のことがよく謡われている。また、グスクの発掘調査では、鉄鏃や骨鏃あるいは鎧の金具類等が数多く出土する。グスクに拠った按司たちが、お互いに兵力を動員して争つたことは、グスクの繩張りを見ればすぐ理解できることであるが、実際の戦闘にあたつては、刀や槍、弓矢だけで

なく、投石や竹ヤリなどの武器も数多く用いられていたと思われる所以である。

堀切への南側は、尾根続きになっているが尾根の両側を削り落として幅を小さくし、2～3人の人間が同時に通れないようにしてある。この細い尾根をしばらくいくと標高113mのピーク部に達する。このピーク部の四方は切岸になり、防御された削平地として認識できる。規模は4m×3mである。これから南へは自然地形の下りの瘦尾根となっており城外と判断できるので、このピーク部をもって城域の南端と考えることが可能である。

主郭である曲輪1の北西側には一段下がった曲輪7の削平地がある。この曲輪は、15m×10mの小規模のもので、北西側の先端部には、曲輪6の先端部にあったような琉球石灰岩塊でできた櫓台状の高まりがある。この高まりの上からは、屋嘉比川と田嘉里の村落を眼下に、北西側をちょっとといったところに屋嘉比川河口部や浜の集落など、グスクの北側地域を一望のもとに展望することができる。

盛られている石灰岩塊は、曲輪6の先端部にあったものと状況が似ており、前に述べたような使われ方をした遺構であろう。

この下は急激な断崖となり次の曲輪8へと続く。この断崖面はブッシュがひどくて状況が擋めず、切岸になっているのか、自然のままであるのか判然としない。曲輪8は、40m×25m規模の細長い削平地である。この曲輪は、グスクへ上の道に向かって舌状に張り出すため、城への道を抑えるのには好都合である。

さて、曲輪2から虎口を出て北西方向に下って行くと2～3人がやっと通れるような大手ルートが曲輪7と8の中復を縫うように開いている。この狭い道をさらに下っていくと御殿ニーズやノロ殿内と呼ばれる旧村落と関係の深い広場や屋敷地に出ることになる。逆に集落から城内に入るには、曲輪8と7を左手にしながら狭い坂道を上っていく恰好となるので、この道に対して曲輪内から常に側面攻撃が加えられるようになっている。そういうことで、曲輪8もグスクの城域として捉えることができる。

城への道すなわち大手ルートは、曲輪7や曲輪8からの側面攻撃を受けるだけでなく、狭いうえに勾配がきつく、曲がりくねっている。さらにこの大手ルートの西下には、段状の小曲輪群が麓の城集落に向かって構築され、集落に通じる西側のゆるい斜面に対しても警戒を怠っていない。

このグスクは、規模の大きさと縄張りの構造からみて、かつてこのあたりに存在していた数箇所の村落を拠点に築城された城郭であることがわかる。このグスクを築いた按司は、現在の喜如嘉や謝名城の集落と屋嘉比川一帯に広がる豊かな水田をバックに勢力を拡張していった在地領主であった可能性が高い。『国頭村史』では、その城主は国頭按司だとされているが、伝承では英祖王の子孫大宜見按司の居城ともいわれていてはっきりしない。文献のない時代のことでもあり、築城主体者を特定することはなかなか難しいことである。

深度	ピット名 遺物								口
		A	B	C	D	E	F	イ	
0	土器片	11	8	6	4	2	3	5	20
	磁器片	39	38	23	26	8	14	6	14
	鉄片	1	0	1	1	0	0	0	0
	骨片	0	0	0	0	0	0	3	10
	貝殻	0	0	0	0	0	0	2	3
	その他	25	10	4	8	3	2	6	2
20	土器片	24	12	1	4	0	地盤	4	12
	磁器片	6	5	11	10	21		8	5
	鉄片	0	0	0	2	0		0	0
	骨片	13	4	0	1	2		3	3
	貝殻	1	0	0	0	0		0	0
	その他	2	3	3	2	3		0	0
40	土器片	16	31	13	岩石	岩石	岩石	岩	岩
	磁器片	1	2	10				岩	岩
	鉄片	0	0	1				石	石
	骨片	2	2	1				石	石
	貝殻	1	0	0				石	石
	その他	0	2	0				石	石

第1表 根謝銘グスク出土遺物一覧表
 (『根謝銘城調査概報』『琉大史学』第2号より)

あるが、ただいえることは、これだけのグスク普請をたった一人の人が一代でなし遂げたとは考えられないので、複数の按司が関与しながら改修を繰り返しつつ城としての変遷を辿っていったことが考えられる。では、時代的にはいつごろであろうか。考古資料によつて大まかな年代をつかむことにしよう。

1964年（昭和39）に宮城長信氏によって曲輪2を中心とする一帯で試掘調査が実施されたことがある。この時に発掘された遺物の出土状況は第1表のとおりであった。出土した貿易陶磁の年代を検討すると、13世紀から15世紀に属するものである。最下層から出土した陶磁器は13世紀に属し、上層の第I層からは、14～15世紀のものが多く出土している。そのことから、曲輪2の最下層の時期、つまりこの曲輪の最も古く遡れる時代がほぼ13世紀ごろで、最も新しい時代が15世紀ごろということになる。したがって、この根謝銘グスクは、三山分立の時代から琉球王国の形成期を経て、第1尚氏による琉球王国の統一の時期まで実際に存続し、機能していたことがわかるのである。

親川グスク（名護市親川）

親川グスクは、旧羽地間切の振慶名、田井等、親川、それに羽地内海に面する仲尾、仲尾次の各村落にかけて広がる標高40～50mの低い丘陵地帯のほぼ中心部に位置し、これらの各村落を領域支配するための拠点的なグスクであった。

伝承によるとこのグスクは羽地按司が築いたとされるが、グスク普請が途中で中止になり今帰仁城に移ってしまったため実際には城として使われることがなかったといわれている。このような伝承等を考慮に入れて、新城徳祐氏は、後に今帰仁城主になった柏尼芝によって築かれたグスクだとみている。⁽¹⁷⁾ ともあれ、文献がないのでグスクの来歴等については今のところ不明というほかはない。⁽¹⁸⁾

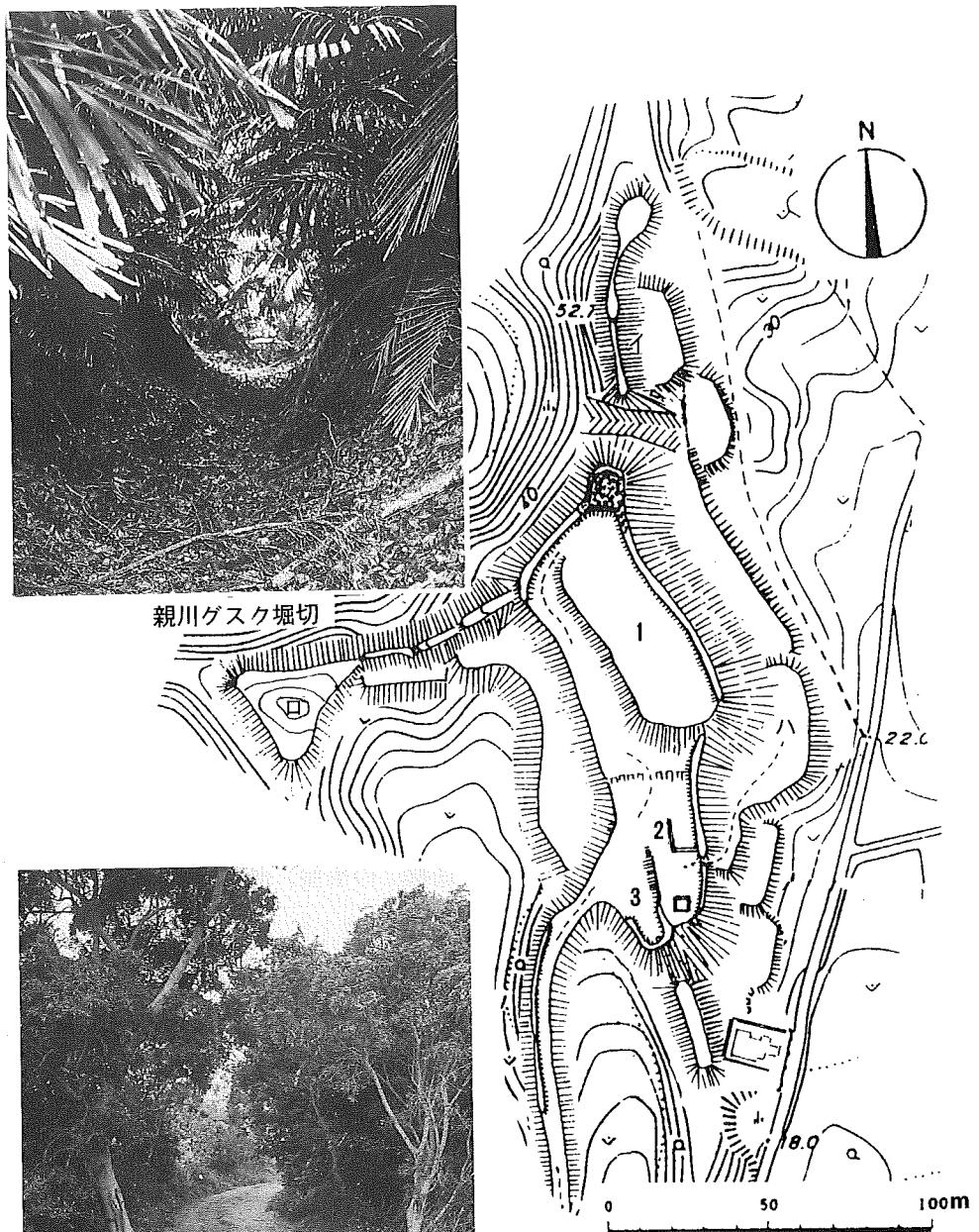
このグスクは、曲輪1を主郭部としている。曲輪1は、50m×18mの規模をもつ長方形状の曲輪で、標高52mの山頂を取り込む形で構築されている。北東側から北北西側にかけては土塁をめぐらし、一段下がって南と西に腰曲輪を設け、さらに尾根つづきの北側には堀切を掘って防御を固めている。この堀切は、主郭である曲輪1から堀底までの高低差が8～9mにも達する堀切である。堀切の平面形状は、砂時計のような形をして中央部が細く、両端の幅が広くなっている。

主郭と腰曲輪との間は切岸になっていて、石垣は全く使われてない。曲輪1の土塁には、直径30cm程の石が多量に混入して一見野面石垣のようにみえるが、基本的には土塁である。このグスクの中には、土塁が曲輪1と、曲輪2の東側、曲輪3の南端部でそれぞれ三箇所確認される。

曲輪1の南下には曲輪2がある。この曲輪は40m×15m規模の南北に細長い曲輪である。曲輪の南端に赤瓦葺きの神アシャギ、北側にはコンクリートでできた祠がある。東側の土塁が途切れるところがあり、そこに虎口が開口し腰曲輪ハに下りていけるようになっているが、この道は、神道と呼ばれていて、昔ノロたちが神アシャギを拝んだ後、ここを下りて大堀切の堀底道を通りグスクの西側の丘にある仲尾の殿まで歩いて行ったという。

曲輪2を一段下がったところに隣接して曲輪3がある。31m×20mの不定形の曲輪であり、現在キビ畑になっている。この曲輪の南には発達した土塁がみられるが、曲輪の全周まわるのでなく、南の突端部から西側にわずかにまわり込んだところまでで終わっている。曲輪の西は鋭い切岸になって下に落ち、城外となる。曲輪3と城外との比高差は20mもある。

虎口は、この曲輪3の南南西の隅に開口しているが単純な平虎口である。大手ルートはそのまま南に蛇行しながら伸びているが、ルートの両側は鋭い切岸になっている。この大手ルートは、曲輪3からU字状に南に曲がってのびているために、大手道を通って入っ



大手ルート

親川グスク縄張図

てくる敵に対しては横矢が掛かるようになっている。

曲輪 1 の北側の突端部は細くなっているが、ここに琉球石灰岩塊を盛って構築された櫓台状の遺構がある。その中央に直径 120cm 程の円形状になった井戸跡だといわれる窪みがある。外観上の所見では井戸跡か疑わしく、立地や形状からすると烽火をあげる遺構の可能性もある。

この突出部は、主郭の平坦面より 2m 程高くなっているが、敵襲があったら何時でも石組みをはずして投石用の武器として使えるような積み方になっている。このような遺構は前述したように根謝銘グスク曲輪 6 の南東端と曲輪 7 の北西端でも確認された。

堀切の北には、仲尾の村落に向かう支尾根が派出しているので、この尾根のピーク部にも見張所跡と見られる小平場が構築されている。この平場にいくまでの尾根筋の両側は鋭角に削りおとされていて一人が通れるぐらいの道幅しか確保されてない。小曲輪からは、グスクの東側から北、さらに西側にかけて点在する小集落や耕作地のほか、羽地内海までも手に取るように展望できる。

堀切と小曲輪の中間、やや堀切寄りの尾根筋にはコンクリート製の小さな祠がおかれており。村の人たちは、この一帯の支尾根をヒチグシク（イ）と称している。

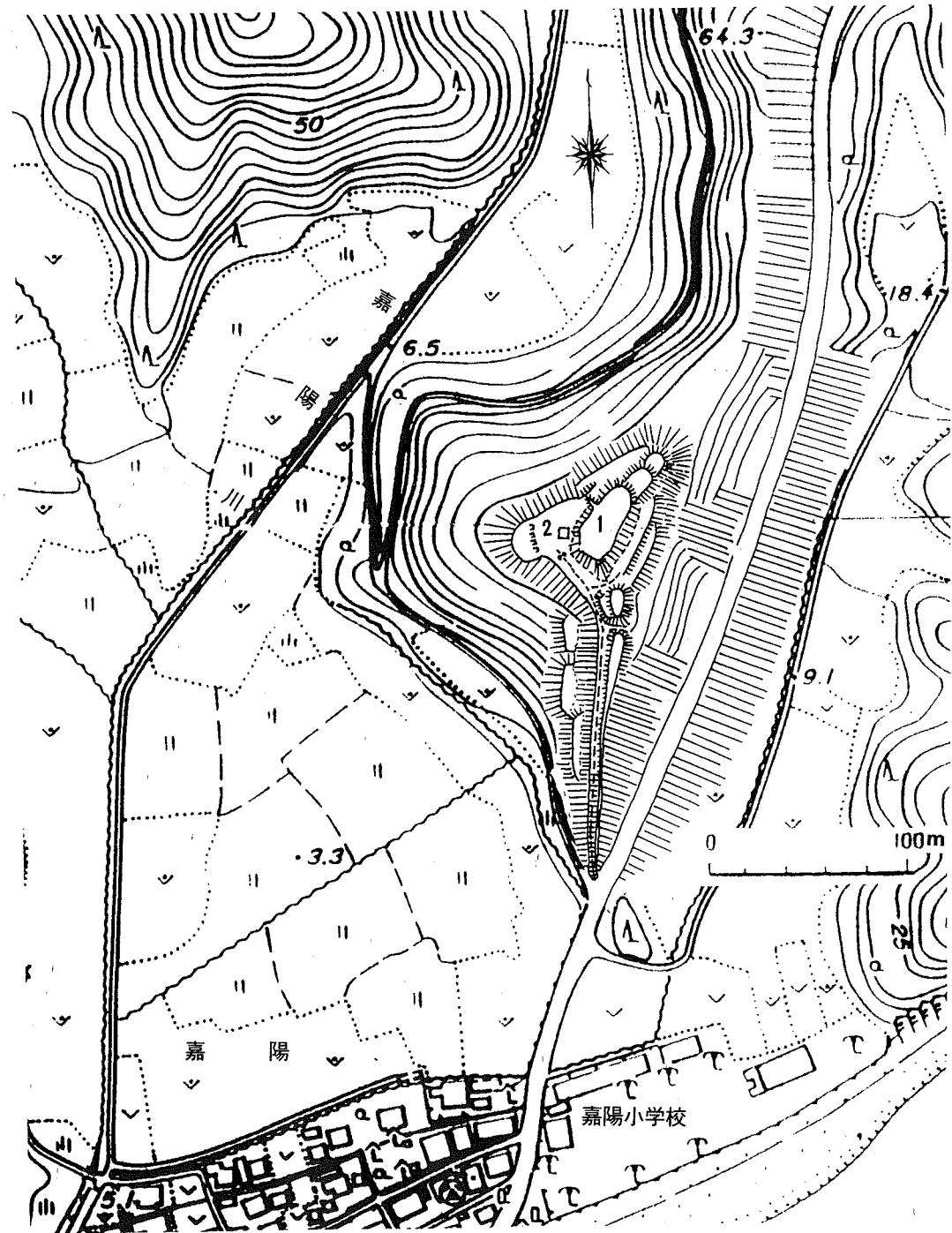
曲輪 1 の西側に派出する支尾根にも腰曲輪や堀切状の防御機能をもつ遺構がいくつか構築されており、標高 47m のピーク部に見張所らしい小平場口が認められる。国土基本図を見るとこのピーク部はさらに二方向に支尾根を派出させているけれども、近年、二方向とも土地改良事業によって削られ現状では、このピーク部から先は平坦な畠地になっている。

近年、圃場整備事業等によって小高い丘や支尾根などが削られたり、マタと呼ばれる小さい谷が埋められるなど地形の改変が急速に進み、旧状がつかみにくくなっている。このグスク周辺も大きく改変を受けた例で、数年前と比べると大変な変貌ぶりである。事実、曲輪 3 の南側にも尾根先がもう少し伸びていたが、そこも削り取られ現在キビ畑になってしまっている。おそらく、こ尾根先にも主郭部を防御する意図で造られた削平地が広がっていたことであろう。

さて、親川グスクは伝承によると未完成のグスクとされている。しかしこれまで見てきたように、いろいろな防御施設を備えたりっぱな城郭であり、この地域では比較的規模の大きいグスクだという認識を我々はもつことができた。城内からは 14~15 世紀に属する貿易陶磁器等も採集されるし、また、グスクの規模や縄張りの構造等からみても周辺の村落を領域支配するための按司の居城だったことが考えられるのである。

嘉陽グスク（名護市嘉陽）

嘉陽グスクは上グスクともいい、嘉陽集落の背後に聳える円錐形の山の上に位置し、国



嘉陽グスク縄張図

頭方東海道の道筋にある。琉球国絵図（元禄国絵図）を見ると、大浦村あたりの一里塚から天仁屋村の一里塚までの間に二つの一里塚がドットで示されており、ここを通る道が首里王府時代に、古道として認識されていたことがわかる。だとすると、嘉陽は東側の南北ルートとしての交通の要衝だったことが考えられる。⁽²⁰⁾ グスクの真下を旧道が南北に通っているので、嘉陽グスクはこの海道筋を睨んで築かれたグスクでもあったわけである。⁽²¹⁾

伝承によると、嘉陽大主（かよううふしゅ）という人が、勝連から移住して築いたグスクだといわれている。その年代は不詳である。

⁽²²⁾ 曲輪1と曲輪2の主郭部と背後の尾根に離段状に続く小曲輪、および大手ルートを抑えるための腰曲輪からなる小規模のグスクである。曲輪1は標高67mのピーク部を取り込んで構築された曲輪で、30m×15m規模である。土壘は確認できない。この曲輪より約3～4m程下がって曲輪2がある。30m×20mの規模を有し、西に向かって舌状に張り出している。曲輪の東側には「紀元二千六百年祭」を記念して建立された本殿・鳥居があり、その前庭部で集落あげての祭祀行事が実施される。本殿の中には、自然石数個が安置されているが、それに混じって丸く調整された直径20cm程の石の球が見られる。この石球は石弾の可能性もある。

主郭部への虎口は単純な平虎口であり、現在そこに鳥居（昭和15年建立）がある。大手ルードの東側には、自然地形がこのルートに沿って残されており、きちんとした曲輪にはなっていないが、そこから側面攻撃が加えられるようになっている。

曲輪1の背後は、削平段が二段になって連なっているために堀切はなくても、この方向の尾根からの進入を防ぐことができる。また、東側には約4m程下がって腰曲輪を設けてある。

この嘉陽グスクは、独立した高い山に築かれたためか、堀切をもたず切岸だけを巧みに使ったグスクである。規模が小さく、単純な曲輪配置になっているが、防御施設などを巧みに配して一応城郭としての体裁を整えているグスクである。

さて、このグスクの特徴とするところを列挙すると次のとおりとなる。

- ①切岸を使って防御されているが、小規模で単純な曲輪配置である。
- ②集落の裏山に位置し、村によってグスクが造られたというイメージが強い。そのことは、築城主体者として伝承されている勝連大主が嘉陽村落の創始者として深い関わりをもっていることとも符号する。
- ③近くには嘉陽村落の耕作地が展開しており、グスクからは耕作地が一望のもとにみわたせる。
- ④グスク全域が御嶽となり、村落民の信仰の対象になっている。
- ⑤旧道をおさえる位置に立地している。



嘉陽グスク曲輪2の虎口には鳥居が建立されている

以上、列挙した特徴点から類推すると、このグスクの築城主体者は、支配者としてはまだ小さい勢力を有する人物、つまり当時の1~2村落を領有するぐらいの長（例えば勝連大主といった伝説上の人物がそれに該当する）が考えられる。嘉陽グスクは、こういう人物が先に立って築いた、いうなれば「村の城」であったのであろう。

幸地グスク（西原町字幸地）

幸地グスクは、熱田子という人物が居城するグスクであったといわれている。⁽²³⁾ グスクの来歴については不明である。

風化の進んだ島尻泥岩の台地を堀切で遮断して独立させたグスクで、標高115mを最高地に、曲輪5の標高100mを最低地とする。1から北に続く尾根筋を堀切によって遮断し、この土をイに盛って土壘を設けることによって堀切の効果を一層高めている。このグスクは、土壘と堀切がある以外、単純な削平地だけで、石垣の城壁は全く見られない。

曲輪1は、26m×20mの規模の不定型の曲輪で、グスクの中で一番広い曲輪である。西端には井戸を標示した拝所がある。曲輪の西側には切岸、その下に曲輪4が構築されている。北側は、堀切によって区画されており、その堀切に面して土壘が認められる。東側は高い切岸があって、その下には、首里と中城をつなぐ旧道口が通っている。旧道は、この曲輪1の真下を通ることになるので、曲輪からは、遠くの通行人まで見通すことが可能

となる。さらに道を通る敵に側面攻撃も加えることができる。

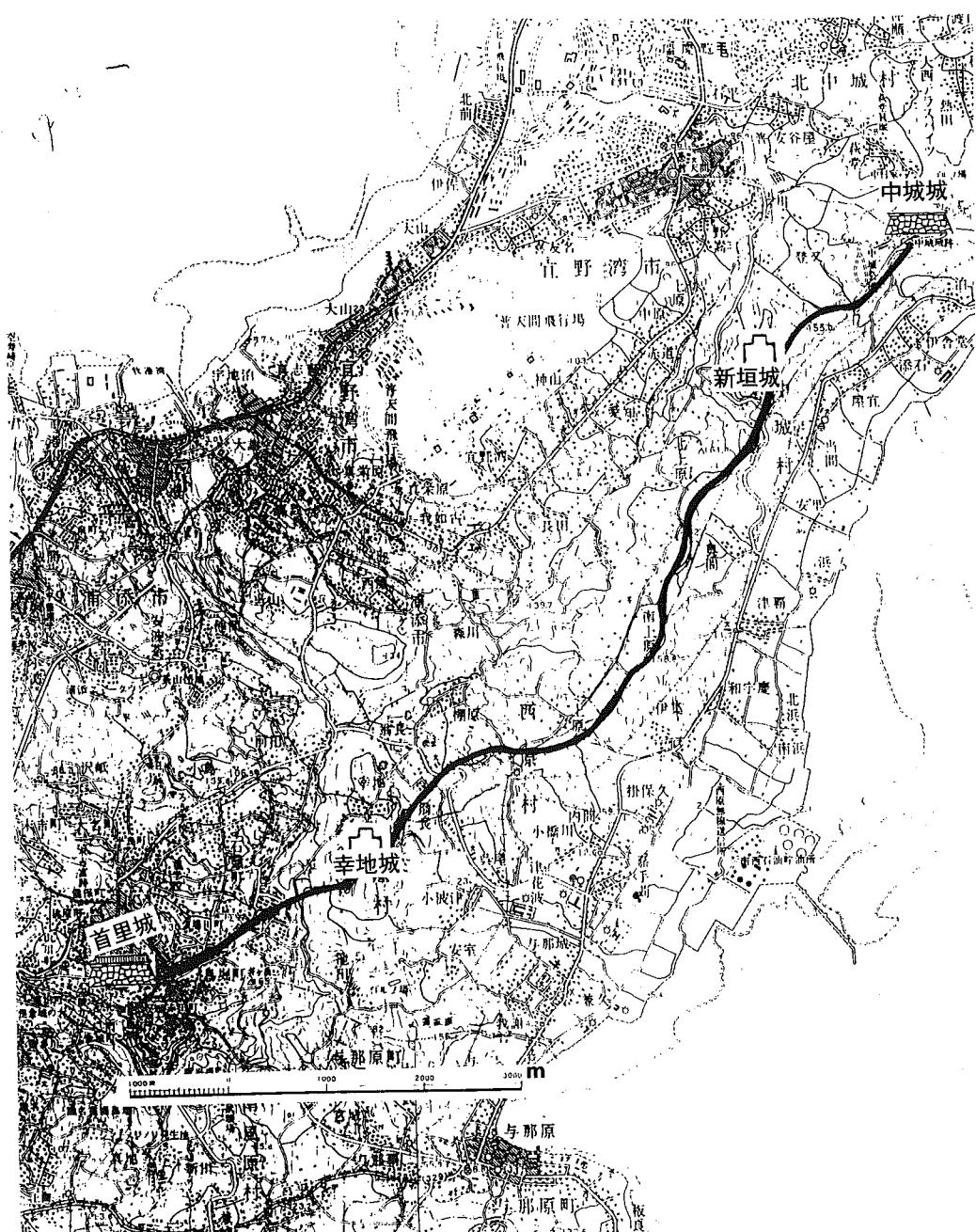


幸地グスク縛張図

曲輪2は、丘のピーク部を取り込み約1坪ほどの平場で、ほとんどが自然地形を残したものである。物見跡か烽火台のように思われる。現在、ここには石灰岩の粗末な祠が置いてあり、線香などが供えられている。ここからの眺望は絶景で、東に中城湾、東西南北四方に西原の各集落が一望のもとに見わたせる。また、足下には、幸地グスクの熱田子と争って滅亡したといわれる津記武太グスクを望むことができる。

主郭の虎口は南に開口しているが、単純な平虎口である。虎口をすすむと大手ルートであるが、このルートには、曲輪2内や曲輪3の腰曲輪から側面攻撃が加えられるようになっている。

ハのところには、旧道の北側から侵入してくる敵が東側に迂回して道路突破ができない



首里城と中城城を結ぶ旧道

よう山尾根を残しながら障壁となる土手を築いている。この土手の先端部には、小さい平場が設けられている。ここに櫓をすれば、敵が道路を迂回することも阻止できるし、下の低地部に開いている道路を封鎖することも可能である。敵襲を警戒するための防御施設としては完璧である。

ホは近世の馬場があったところであるから地形的改変を大きく受けていることが予想される。『球陽』によると、馬場がはじめてひらかれたのは、1695年（尚貞王27）のことだとされている。⁽²⁵⁾ グスク時代よりかなり後代のことである。それ以前、すなわちグスク時代にはここがどういう状況にあったかまったく検討がつかない。現在、100m×30m規模の長方形の平場になっている。この馬場の東南東下方のキビ畑の中に、琉球王府時代の幸地古番所跡がある。⁽²⁶⁾

さて、この幸地グスクは、首里城と中城城を結ぶ交通の要衝に築かれているということで重要な意義がある。⁽²⁷⁾ 1458年中山尚泰久は中部の東側一円で勢力を伸長していた護佐丸や阿摩和利らを滅ぼすことによって琉球の完全支配を握るぎないものにした。護佐丸の娘婿にあたる尚泰久、尚泰久の娘百十踏揚を妻として迎えた阿摩和利、この政略結婚の構図を見ると当時の琉球の国情が浮かび上がってくるのである。通史では語られていないが尚泰久、護佐丸、阿摩和利の間の緊張関係はきっと極度の域に達していたことであろう。三人の覇者たちの力は拮抗し、水面下では鎬をけずる戦いが演じられていたことと思われる。そのため、尚泰久は首里城を固め、護佐丸は中城、阿摩和利は勝連城をそれぞれ固めていたのである。虎口を石造拱門に改修したり、侵入する敵兵を迎撃するために城壁に狭間を設けたり、あるいは城壁を高くしたり、⁽²⁸⁾ 当時の三つの城の緊張の様子はすべてグスクの縄張りに投影されている。⁽²⁹⁾ 幸地グスクは、まさにこの緊迫した時代に、交通の要衝をおさえる目的で首里城の出城として築城された可能性があるのである。

ま　と　め

以上、奄美大島から沖縄本島中部の、とくに石垣のないグスクを中心に述べてきた。これまでわが南西諸島のグスクは、石垣で築かれていることをもってその特徴と考えていたが、グスクの縄張り研究の進展によって、石垣のない土の城も確認できるようになり、けして石垣のグスクだけではないということがわかってきた。とはいえ、やはり土の城の多くは、奄美大島や沖縄本島北部に多く見出され、この地域における築城のあり方の特徴として見ることができるであろう。

さて、これまで、この土の城を中心に縄張り調査の成果を示しつつ防御遺構の把握と整理・分析を試みた。ブッシュをかきわけて実際グスクの中にはいって見ると、いろいろな

ことがわかってくるものである。グスクとはいわれているものの、めぼしい遺構もなく今までただの山だと思われていたものが、防御された削平地を備えていることがわかつたたり、あるいは、近年の工事で開いた掘割だとおもっていたものが、実はりっぱな堀切であり、本稿では、個々のグスクの縄張り調査を通して、グスクがもっている軍事的な要素についてもその重要性を指摘しつつ、そのつど考察を試み記述してきたつもりである。しかし、築城主体者がどういう意図でグスクをつくったのか。また、グスクがどういう役割と機能をもっていたのかについて等々、今後解決していかなければならない課題も数多く存在する。

グスクの縄張り調査を実施してその成果を縄張り図としてまとめることによってグスクを資料化し、築城主体者と地域社会の構造を分析する、このような大きな目標をかかげて筆者がグスク調査の再出発をしたのが8年前のことであった。その間、沖縄の厳しい自然条件下で悪戦苦闘しながらグスクの縄張り調査を実施しているが、作業の方は遅々として進まず、縄張り図として仕上げたグスクもまだ僅かな数である。300近く、グスクを踏査して、その縄張り図を作成していくためには、多くの動力と長い時間を必要とするが、今後も継続していきたいと考えている。

ところで現状では、グスクの縄張り調査に取り組んでいる人は少ない、おそらく皆無に等しいのではないかだろうか。今後多くの人々がグスクに興味もち、縄張り調査を推進していくことができれば、グスク研究も飛躍的に進展するはずである。本稿がそのきっかけにでもなれば幸いである。

なお、石垣のあるグスクについては、今回述べることが出来なかった。別の機会に稿を改めたいと思っている。

註

- (1) 『龍郷町誌－歴史編－』 龍郷町誌歴史編編纂委員会 昭和63年11月。
- (2) 『龍郷町誌－民俗編－』 龍郷町誌民俗編編纂委員会 昭和63年11月。
- (3) 前掲 註(2)
- (4) 前掲 註(2)
- (5) 松本雅明『沖縄の歴史と文化』 近藤出版社 1971年8月。
- (6) 藤木久志「村の城・村の合戦」『朝日百科日本歴史別冊』通巻1号 1993年10月。
- (7) 三木靖 「奄美の歴史 中世－在地領主制の展開として－」『奄美文化誌－南島の歴史と文化』 西日本新聞社 昭和49年10月。
- (8) 前掲 註(7)

- (9) 『国頭村史』国頭村役所 1967年3月。
- (10) 前掲 註(9)
- (11) 宮城長信 「根謝銘城調査概報」『琉大史学』第2号 昭和46年6月。
- (12) 『中山世鑑』 羽地朝秀
- (13) 前掲 註(11)
- (14) 伊是名グスクには標高95mの高い岩山の頂上部にイシカ一という井泉があり、勝連城跡三の曲輪では鍋底状の溜井の遺構が検出されている。
- (15) 前掲 註(11)
- (16) 前掲 註(11)
- (17) 『名護市の遺跡(2)』 名護市教育委員会 1982年3月。
- (18) 新城徳祐 『沖縄の城跡』(株)新報出版 昭和57年8月。
- (19) 1994年1月地元での聞き取りによる。
- (20) 『琉球国絵図史料集第二集－元禄国絵図及び関連史料－』 沖縄県教育委員会 1993年3月。
- (21) こういう交通の要衝に築かれたグスクも数多い。拙稿「歴史の道とグスク」『文化課紀要』第4号沖縄県教育庁文化課 1987年2月を参照。
- (22) 前掲 註(17)
- (23) 嘉手納宗徳編訳『球陽外巻遺老説傳』(角川書店刊、昭和53年)。
- (24) 拙稿 「交通－首里城と中城城をつなぐ道－」『西原町史』第4巻 西原町史編纂委員会 平成元年3月。
- (25) 『球陽』
- (26) 前掲 註(24)
- (27) 前掲 註(24)
- (28) 虎口を石造拱門にした城には中城城や首里城、座喜味城等があるが、勝連城の城門も石造拱門だったといわれている。
- (29) 中城城には、大手の門に1ヵ所、南の曲輪に3ヵ所の狭間が開いている。

「グスクの縄張りについて(上)」64頁13行目の「護衛兵が右手でかかえ先から火を吹いている光景が描写されている。」を次のように訂正する。

「護衛兵が左手で火矢をかかえ右手は耳をふさぎ、火矢の先からは火を吹いている光景が描写されている。」

沖縄の産育儀礼における子どもの衣服と背守り

與那嶺一子、金城 武子

(沖縄県立博物館)

A Study on the Children's Clothes and Talisman worn on the back in the Customary Upbringing of Okinawan Children

Ichiko YONAMINE and Takeko KINJYO

(Okinawa prefectural Museum)

Abstract : The main purpose of this paper is to clarify the significance, roles, forms and changes of the children's clothes, especially Semamori (a Talisman worn on the back), as part of the custom of Okinawan child raising.

Semamori (Talisman worn on the back) in Okinawa and Amami districts are called "munnuki", "mabuu ushii", "mabuyaa uu", and divided into five types of forms.

The form of some of the Semamori were influenced by mainland Japan, but other semamori were original, found in only Okinawa and Amami districts.

Semamori is differentiated from Semon crests worn on the back in mainland Japan. Contrary to mainland, only the name of Semamori was used in Okinawa and Amami districts, and the Semon were considered to be a type of Semamori.

The custom of putting on ragged clothes (Boromatoi) and Semamori during childhood was continued until the Meiji Era.

In our opinion, the educational system and new trend toward, "clean is best", both influenced by the Meiji Government, made these customs decline.

はじめに

沖縄県立博物館には、次のような子どもの衣服が3種ある。着物の後衿下の背中心部分に糸でなんらかの文様を施したものである。(写真1, 2, 3)

写真1は、染分地に山波や鶴、松竹梅を染めた紅型の木綿の衿の子ども着である。衿は赤い裏を見せる返し衿で、衿下が短く、古い琉球の衣装形態をとどめている。背中には、背縫いを中心にして、縦に三筋の糸目が見られる。糸は撚りの強い赤紫の13本どりの絹糸で、それぞれ7針縫われており、上下から房が垂れている。

写真2は、昭和35年に着用された一つ身の女児の着物で、和装の衿の形をしている。背中には、2本取りの赤い糸で、縦に7針縫い、右に折れて4針縫う形の文様が施されている。

写真3も、写真2と同年代に着用された男児の一つ身の着物である。着物の形態は写真2と同様に和装の一重であり、背中には2本取りの青い糸で菱型の文様が縫いつけられている。また、紐の付け根にも同じ糸で同様の文様が縫われている。(写真4)

このような、糸で施された文様は「背守り」と呼ばれ、既にいくつかの報告がなされている。(文献1～6) 写真1の背守りは沖縄独特の形であること、写真2の形は、日本本土で「背守り」として伝えられてきたものであること、写真3は日本本土で「背紋」と呼ばれていていることなどが分かっている。しかし、このような形の違いは単なる時代的な変遷なのか、また沖縄の各地域によって背守りのとらえ方や形に違いはないかどうか等、まだ細かな部分で分析されていない点がいくつかあり、沖縄の産育における子どもの衣服との関わりを考えながら、いくつか背守りの事例を取り上げながら考察してみたい。

なお、分析にあたっては、実物資料の調査とともに、聞き取り調査も数例行ったが、これまでに報告された『沖縄民俗』(全5冊・昭和63年2月29日発行／第一書房) や各市町村史などの民俗調査結果を中心に参照した。(文献6～62)



写真1

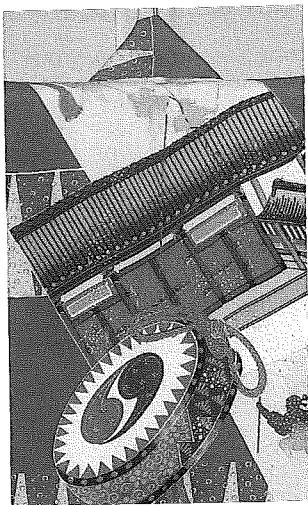


写真2



写真3

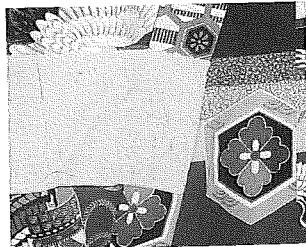


写真4

産育儀礼における子どもの衣服

沖縄や日本に限らず、世界各地に見られる子どもの衣服には、無病息災の祈りを込められた例が多く見られる。

中国の漢族では、刺繡などにより「五毒」(蛇、ひきがえる、むかで、さそり、やもり)の文様を子どもの衣服に施し縁起をかつぐ。また同サラ族は、様々な色の三角形の小裂を継ぎ合わせて百家衣と呼ばれる子どもの衣服を作ることで子どもの長寿を祈る。(文献51)

韓国の産育儀礼では、子どもが生まれてからの百日目の祝いには、百家からもらった百枚の小裂で作った衣服を着せる。小裂を接ぎ合わせることに子どもの長寿祈願と衣服に対する欲を減少させる意味がある。また、初誕生日に着せる衣服には黄青赤白黒の五色が使われ、五方帝王の保護が得られるという。この衣服に刺繡または金箔で施された文様が見られるが、五徳と五倫を守り五福をもたらすという由来がある。さらに、巾着の紐に下げられる斧・蝶等の銀細工には鬼神の接近を避ける意味が込められている。(文献22)

ラオスのメオ族でも、子どもや女性の背には四角の飾り布が見られるが、これには長寿や幸福を祈る意味がある。^(*1)

では、わが国では、わが沖縄では、子どもの無病息災をどの様な形で衣服に込めたのだろうか。

無事に生育するための十分な靈力が備わらず、その身体から遊離しやすいと考えられていた子どもの魂を守り、あるいはその身代わりとなるものとして衣服は、重要な役割を担っていた。たとえば、新しい着物の衿を柱におしつけて「自分は強く、着物は弱く」といった意味合いの言葉を唱えてから子に着けさせるという習俗が沖縄各地に残っているのはその表れであろう。また、子どもの魂を守るものとして、沖縄では「マブヤーウー」、日本本土においては「背守り」「背紋」と呼ばれるものがあるが、これは、子どもの着物の後ろ衿下の位置によくみられたもので、糸や様々な形、色の裂を縫いつけることで、子どもを守ろうとする一種のお守りのようなものである。(詳細は次章以下) その他に、産着などの材質に母親の下着類を利用したり、嬰児にボロを纏わせることによって魔除けとするといったことも行われている。

ここでは、そういった沖縄の産育儀礼における子どもの衣服と衣服にまつわる禁忌習俗を各市町村史等の報告から産着を中心に簡単にまとめてみた。

まず、最初に生児が身につけるものだが、表1からも分かるように、圧倒的に多いのが「ボロ纏い」である。嬰児をくるむボロには、古着や母親の下着、ありあわせの布や古いバサー(芭蕉)などが使われる。この状態は、不浄であるとされる出産の忌みがあけるまで、あるいは子と母親の体調が安定してくるまでの期間、このままの状態が続く。その期

間は短いもので渡名喜の3日、座間味の4日、長いもので栗国の2ヶ月～3ヶ月の報告があるが、おおむねは1週間程度で、「マンサン」、「ナージキ」などの日には、袖を通して着る産着に変わる。南風原では「ボロ纏い」の理由を「チュラスガイシーネーンダンシン・ンジュンドー=綺麗な格好をさせると普通は見ないものをみるようになるよ」と言われるからだとしている。奄美諸島などでも「悪神に子どもの誕生を知らせないためだ」と「ボロ纏い」を理由づけしている。このような事例からも、この「ボロ纏い」には新生児死亡率が高く、超自然的なものが人の生死に関わると信じられていた頃の魔除けとしての意味をまず一つにはみてとることができる。ボロ纏いではないが、誕生に際して、男女反対の性にまげて伝えたりする習俗も多く見られる。

産着は「ウフジン」「ハラスヴィジン」(勝連町南風原)「ウブジン」(読谷村、他)「ナーチキジン」(大宜味村、他)「イーギングワー」(東風平町、他)「ナージキジン」(玉城村、他)「ウマリグンマー」(栗国村、他)等と呼ばれ、形としては、だいたい一つ身で縫われているようである。大宜味村喜如嘉では「衽なし筒袖、衿下をのこして衿をつけ、腰紐は背中に着けて前で結べるようにする」といったものが使われていた。また、名護市久志、読谷村喜名、楚辺、糸満市などでは、子どもの衣服には、身ごろと衿、袖が異なった布や柄、色を用いるといった報告が見られる。こういった違う布や柄色を使って産着(あるいは子ども着)を作る例としては、前述の中国サラ族の「百家衣」や韓国の百日目の子ども服、また、日本でも長寿を迎えた人や健康な人の布裂をもらって着物を縫い、ご利益を得る「百徳」、「百徳テダマ」と呼ばれる子どもの衣服がある。(石川県／文献3) また、徳之島でも健康で長寿の女性の着物の切れ端を繋ぎ合わせて着物を縫う例がみられる。

(文献5)

このように布を違えて衣服を仕立てる意味について、那覇市史(文献59)では「一反布から産着を作ると生まれた子の運勢が弱くなる」(真栄平オト談・明治25年生・首里汀良町)という報告がされていて、名護他の場合にも確認を行っていないが、同様の意味があり、先述の百家衣、百徳と関連があるのでないかと思われる。

産着を誕生前に用意するのを嫌う習俗は、全国的に見られるようだが、沖縄でもそれは同様で「産前に産着を縫うものではない」といって準備をしなかったとの報告が多数みられる。この習俗は、今帰仁村の報告によると昭和の初め頃に見られなくなったとある。他の地域の報告をみても、明治から昭和にかけて、この習俗の伝承は曖昧になってきている。また、「ボロ纏い」に使われる布も古着や母親の下着、ありあわせの布や古いバサー(芭蕉)などが使われていたが、次第に新しい布を使うようになる。

「ボロ纏い」や「産着」に関する習俗の変化は、この時期普及する学校教育などによる新しい考え方や社会的風潮によって、魔除の意味合いや子どもの無病息災を願うものか

(*2)

ら、新しいもの、より清潔なものへとへと変化したことの表れではないだろうか。

表1) 沖縄における子どもの産着

地域	産着以前	産着名称	産着の形／色／材質	産着用意	産着着衣時期	出典№
国頭村	フクター（ボロ）			親兄弟がマンサンに用意	マンサン	文献8
大宜味村 (喜如嘉)	カホーギン（着古した着物・ボロ布）	ナーチキジン	晒の一つ身。衽はなく、筒袖、衿下を残して衿を付ける。腰紐を背中に付けて、前で結ぶ。	産後に用意	マンサン（6日目）	文献9
東村		イーギングワー				文献10
今帰仁村	ありあわせの布	ウブジン		産後に親戚の女が用意		文献12
名護市	柔らかい布（ボロ）	ナージキジン・マンサンジン	衿、袖が身衣と柄あるいは色を異なる		ナージキ	文献14
伊是名村	古着・ボロ	ウイジン	白晒木綿で袖つき	産後に用意	マンサン（7日目）	文献15
石川市	フクター（おむつ）			産後に用意	初庚の日（豚見せの日）	文献17
与那城村 (宮城)	フクター（ボロ布）	クヌジヌ（子どもの着物の総称 ウブジン	那覇から買ってきた白晒	産後に用意		文献19
勝連町 (南風原)	木綿のフクター（古着）	ウブジン・ハラスブィジン ウブジン	新しい木綿の着物・母親の着物	産後に用意	1週間目	文献18
読谷村 (座喜味)		ウブジン				文献21
(儀間)	木綿のフクター（冬） バサー（夏）					文献22
(喜名)	古着物・バサージン		一つ身のチングゥー。衿や袖は身頃と違う布を使った。(3~5種類)		1~2ヶ月後？	文献23
(楚辺)	木綿やフクター（冬） バサー（夏）		晒・古着。衿、袖身ごとに異なった布を使用	出産前	ハチガニ（初庚の日）	文献24 文献25
(長浜)	ミーカカン	ウブジン			男子は初庚、女子は2回目の庚の日	文献26
嘉手納町	芭蕉の古い着物、古い着物を寄せ集めて縫った物（クリナシフクター）、さらし木綿を肌着風に縫った物を着せてクリナシフクターでくるむ。ネルの様な柔らかい古着を縫いなおす			出産後	マンサン（6、7日目）	文献27
北谷町	バサー、フクター	ウブジン	二つ身、三つ身の着物で後の腹の部分に紐がついていて前で結ぶようになっている物で、母親のカカンを解いて白い着物を縫う。古着で作る		ボージナディー（男児：最初の庚 女児：2回目の庚、または初辛）	文献61

地 域	産着以前	産着名称	産着の形／色／材質	産着用意	産着着衣時期	出典№
中城村	古着、おしめ、バサー	ウブジン	新しいバサー、木綿ヂン	産後に用意	10日目	文献28
西原町	白い着物・ウブジン・下着（カカン）を解いて作る。 その辺りにある布。	ウブジン			ナージキー (7日目)	文献29 文献30
浦添市		ウブジン	晒の産着	出産後		文献31
那覇市	母親の着物		一つ身で脇下に結び紐をつけ色は自由	出産後に親戚や隣人が手伝って单を異にする布裂を集めて仕立てる	命名式	文献59
仲里村	フクター	ウブジン	柔らかい布		マンサン(9日目)	文献36
玉城村		ナージキジン	衿なし	産後に用意	ナージキ	文献35
知念村	親の古い着物		バサージングワー		ナージキー	文献36
南風原町	袖なしの白い着物を着せて、その上から古着、ボロをまく。 ただボロをまく		袖、衿、身ごろを付けた着物		マンサンがすんで ウーミシの日 (男子は庚、女子は辛)	文献38
佐敷町		ウブジン				文献60
渡名喜村	メーチャーギン、ボロ布	クンニャーギン		出産後	産後3日目	文献62
座間味村	布・古着	ススマグイジン	裾を曲げた着物。女子は男の襟、男子は女子のズロースを使い着物を作る		4日目	文献39
粟国村	衿・袖のない一つ身	ウマリグンマー	木綿で衿なし、一つ身	産後に用意	2~3ヶ月	文献40
平良市	ボロ布					文献41
城辺町	母親の古着・ボロ布	ナーフィギン	一つ身、背の上方に二寸ほどの縫い込み		ナーフィ（命名）	文献42
上野村			スグンガマ（白い着物）		ソーズバリ：初外出（4日目）	文献43
石垣市		シラキン	白木綿で作られた母親のウフカカンを解いて作る			文献44
竹富町 (祖 納)	フクター（ボロ布）	シラキヌ		産後に用意	命名の日	文献45
与那国町	大人の着物を解いたもの	ウムンナニ	親の古着・白い産着		ドゥガヤガアギが 終わるまで(4日)	*11

表2) 通過儀礼における子どもの衣服

地 域	ハチアッチー(初外出)	タンカー(初誕生)	そ の 他	
国頭村			3才:一つ身→3~7才:三つ身→7才以上:四つ身	文献7
大宜味村	ハチアッチーの着物	タンカーボージギ(紐を両衿の表に付けた)	5~6才:三つ身→13才までには四つ身、 ビゲーギン:上から歯が生え始めた子供の厄払いの着物	文献9
本部町			4才まで:一つ身→8才頃まで:三つ身	文献13
伊是名村			5~7才:自家で織った芭蕉布で7人の手で縫った着物 (ウナザレージン)を8月12日の踊りを見る時につけた→ 7才:ナナフィザイジン(大人用の着物) 普段着:フクターの薄い物のチージン(単衣)、バサージン、アーシンジン(袷)、木綿。	文献15
伊平屋村			7才:7人で布の材料を作り織った着物(ナナヒザイ布)	文献16
読谷村(喜名)			3才まで:三つ身→7才:四つ身	文献23
(楚辺)			5才:三つ身→7才頃:四つ身	文献24 文献25
嘉手納町	夏はサワイジン(モスリン)の単衣冬はその上からチャンチャンコ	タンカージン(バサー・新):赤、黄、青の色染を黒く染めた地に綾を織なして入れた		文献27
勝連町			成長の遅い子にはミーハルチンを着せる	文献18
具志川市			正月:赤い大きな縦アヤー・イーチリー	文献20
西原町			両袖は共布を使い、身ごろの丈を繼ぐ場合には継ぎ目は裾の近い方に入れる	文献29
浦添市			明治、大正:木綿や芭蕉布で織った大柄	文献31
那霸市	上流:紅型、庶民:絣で新調		7才(男子):チュイジン(一人衣)	文献59
知念村			3才頃まで:一つ身→3~7才:三つ身→以後四つ身	文献36
佐敷町			5~6才まで:ユカタグワー(チングワー)という木綿に大柄の綾を入れた筒袖→5~6才:バサー。晴着:絣を買ってハウリグワーを作った。	文献60
南風原町			7才位になるとマブヤーウーはつけなくなった。	文献38
城辺町			3才:袷の着物に羽織のサラタティギン	文献42
石垣市			大人用の着物の残り布を二種類以上継足して縫う	文献44

背守りの役割りと形

子どもの衣服の背に、糸や布で文様を施した「背守り」には、どのような意味と役割が込められているのだろうか。

わが国では、幼児の魂は不安定で遊離しやすいと考えられている。特に背中は無防備で、「背の縫い目のない着物を着ると魔がさす」(文献53)と言われ、背縫いのない、いわゆる一つ身の着物の背中心部分に文様を施し、お守りの代わりとする習俗が残っている。背守りの長い糸には、長寿を祈願する意味と、魔物が糸ばかり引きぬいて子どもが助かるという魔除の意味がある。また、糸が房状になっているものや布裂を縫いつけた背守りには、子どもが井戸や囲炉裏に落ちた時に、それを神様が引っ張って助けるなどの伝承がある。(文献1, 2, 3, 4, 53, 54, 55)

日本本土における背守りの実例をよく見ると、

- ①糸で直線に糸目を見せるもの(図1)
- ②糸で房のみを作ったり、菱型等の文様を縫いつけたりしたもの(図2)
- ③糸で鶴・蝶等の具象的な吉祥文様を刺繍したもの(図3)
- ④布で具象的な吉祥文様を伏せ縫いしたもの・押絵(図4)
- ⑤方形の布裂を縫いつけたりしたもの(図5)

の5種類にわけられる。これまでに報告された背守りに関する文献によると、①は「背守り」、その他は「背紋」と分けて考えられている。(文献1)しかし、いずれにも長寿の祈願と魔除の意味が込められている。

背守りは、一般に背縫いのない産着や一つ身の着物の背に12針縫いあらわすものを示し、雄針(---)で、左に折れたものが男児で、此針(···)で右に折れたものが女児用であると言われている。また、端は、女児は輪状に、男児は房状に結ぶとされている。しかし、既に報告された文献などから、必ずしもその通りではないことが分かっている。(文献1, 2 / 図1)おそらく、「背守り」あるいは「背紋」は子どもの健康長寿祈願を目的に、各家庭で受け継がれてきた習俗であるために、多様な形がみられるのだと思われる。

②の背紋には、菱型、麻の葉型、井桁型、星型などの幾何学的なバリエーションが多く見られる。これらの文様は単独で使われる場合と、背守り縫いの上部あるいは、下部に併用された場合とがある。(図1, 2)

③には、鶴、亀、蝶、蜻蛉、兎、海老などの動物文、撫子、菊といった植物文、花籠、扇といった調度文が見られる。花に蝶などの組み合わせもある。(図3・文献1)

④には、茄子、ザクロ、瓢箪、松などの植物文の他に、福助、お多福、雛などの吉祥を

意味する人物を伏せ縫したものも見られる。(図4) この技法による背紋は、明治40年頃小学校の手芸教育の中で盛んに取り上げられている。(文献1)

⑤の例として、四角の布の中央を絞って縫いつけ蝶の形を模したものもある。また、お守りの上部を縫いつけ背守りとする例もある。(図5) この技法は明治30年代頃にかなり流行していた。(文献1)

背守りあるいは背紋に使われた糸の色は、白、赤、赤と白、緑、黄、水色、青などあり、赤又は白の例が多いが、特に決まったものではなく、着物の色によって糸が使い分けられていることが分かる。(文献2)

沖縄における背守りの意味と役割

沖縄における服飾調査では実物資料が少なく、背守りの場合も例外ではない。そのために、これまでに報告された民俗調査や各市町村史から背守りに関する記述を抜き出し、それと新たな調査と実物資料を加え表2にまとめてみた。また、奄美諸島は琉球文化圏であり、沖縄の範疇ととらえ、表の中に加えてみた。

それによると、背守りは「ムンヌキ」「マブイウシー」「マブヤーウー」との名で呼ばれている。「ムンヌキ」は魔除け、またはお守りのことである。(文献26)「マブイ」または「マブヤー」は魂のことである。「ウー」は糸を意味する。しかし、特に呼び名のない地域も多く見られる。背に施された文様には、「魔物によって子どもの体に危険が及ばないように」というような魔除けの意味を持つ地域と「着物を通して体に魂を招き入れる」「魂(マブイ)を落とさないように」というように魂(マブイ)を守るという意味を持つ地域があることが分かる。

また、背守りを施す着物は、一般には、背縫いのない一つ身と言われている。民俗調査の報告を見てみると、背守りを縫いつけるのは、最初に身につける着物であることが分かる。表1で分かるように、子どもが誕生するとまず、ボロ布か古着で包み、地域によって若干異なるが名付の儀式(ナージキ)の頃に初めて、産着を身に付ける。おそらく、その産着は一つ身の着物であろう。しかし、実際に残ってる資料には、背縫いのある着物に施されている例もいくつかある。また、3~4歳頃までの着物に背守りがあったという報告も確認される。(文献46)これから考えると、特に一つ身の着物に背守りが施されていたとは限らない。

表3に示されるとおり、日本本土のように「背守り」と「背紋」といった分け方は、沖縄の場合にはみられない。むしろ、日本本土で「背紋」とされるものも、「背守り」として考えられているように思われる。

表3) 沖縄・奄美における背守りの意味と形

地域	背守りの名称	背守りの意味	背守りの形	背守りをつける時期	背守りをつける所	出典No.
大宜味村 (喜如嘉)	ムンスキ	ムンによって赤子の身体に危険を及ぼすことがないように	*糸で×の印をつける *小さな布切れを縫い付ける	ナーチキ(6日)～1歳まで	ナーチキジンの背の衿首の下	文献9
東村(平良)			*背縫いの所に一寸ほどの縫い込みを入れる		新しい着物の背縫いの所	文献11
名護市 (久志)	魂込め	着物を通して体内に魂を招き入れる	*糸でX印をつける *房をつける	ナージキ(命名日)	ナージキシンの背縫いの上部	文献14
与那城村 (宮城)		ナブヤ(魂)を落とさないように	*三角の布を縫いつける		クヌジヌ(子どもに着せる着物)の背縫いの表	文献19
読谷村 (座喜味)	マブーアウサー	魔除けとして	*赤布で印をつける *赤糸で印をつける		ウブジン(乳幼児服)	文献21
			*赤糸で*の印をつける			*3
嘉手納町	マブヤーウー	魔除け	*七色の糸で縫ぬう	ハチアッチャー(初外出/一ヶ月)	ハチアッチャーの晴れ着の背のところ	文献27
西原町	マブヤーウー	背守り	*一辺2～3cmの正三角形の赤布の周囲を縫いつけ、真ん中を糸で止める			文献29
浦添市		魂(マブイ)を守る。 赤い色は魔除け	*赤糸でへ型や井型を縫いつける *赤布紐		産着や幼児の着物	文献31
那覇市	マブヤーウー	悪霊から守る。 魂をつなぎ、体から遊離するのを防ぐ	*色糸を合わせて束ね その先端は房のように垂らす *矩形の赤布片をつける			文献59
			*赤い糸で絆て三筋縫い上下から房を垂らす *赤い糸で絆て二筋縫い上下から房を垂らす		着物の背縫いの上方	文献57
			*細いリボンや矢結びを縫いつける *桃の形を縫いつける			文献6

地域	背守りの名称	背守りの意味	背守りの形	背守りをつける時期	背守りをつける所	出典№
那覇市 (首里)	マブヤーフゥー	魔除けをつける	*二寸四分の赤い三角の布を二つ折りにして、頂点を下に向けて縫いつける *赤糸や黄色で井型、ヘ型を縫う	3~4歳まで	着物の後衿下、背縫いの上方	文献46
			*背縫いの部分に縫い込みを入れる。経に三筋糸目の跡あり		一つ身の着物の衿下、背中心部分(縫の着物)	*3
			*赤紫の糸で経に三筋縫い、上下から房を垂らす		四つ身の着物の衿の付け根、背縫いの上方(紅型)	写真1
			*赤い糸で経に三筋縫い、上下から房を垂らす。上下の房三束をそれぞれ一つにまとめる。		着物の背縫いの上方(紅型)	*5
			*白い糸で経に三筋縫い、上下から房を垂らす		着物の背縫いの上方(紅型)	*6
			*白糸で菱に縫う		着物の背縫いの上方(紅型一つ身)	写真5
仲里村 (比屋定)			*ハベル(蝶)の形をかたどった布を縫いつける	マンサン(9日目)	ウブジン	文献32
糸満市	マブヤーフゥー	背守り	*布きれをつける *糸を垂らす		幼児の着物の背縫いの上の所	文献33
(喜屋武)		魔除けのため	*別布を花形や蝶の形に切り縫いつける	ナージキ(命名日)	ナージキジンの後衿中心の表	文献14
知念村 (久高)		魂が抜けないように	*×印を糸で入れる	破れた着物や新しい着物をつける時	破れた着物や新しい着物の背中の方に	文献37
平良市 (狩俣)		縁起が悪いので	*背の上方に二寸程縫い込む		一つ身の場合	文献41
城辺町 (砂川)			*背の上方に二寸程縫い込む	ナーフィ(命名日)	一つ身のナーフィギンの背の上方	文献42
石垣市 (石垣)		魔除けの意味	*紐の付け根に菱型の文様を糸で縫った		紐の付け根	*9

地 域	背守りの名称	背守りの意味	背守りの形	背守りをつける時期	背守りをつける所	出典No.
石垣市 (白 保)			*田や菱の文様を赤い糸で縫った		背中や紐の付け根	*8
(大 川)			*紐の付け根に赤と白の菱型の文様を縫う		紐の付け根(昭和25年頃)	*7
与那国町			*男は白、女は赤で菱の形を縫った 男女で形が違っていた	2~3歳	背縫いのある子ども着の背中	*10
	蝶の形をしているのでハビルと呼ぶ		*四角の赤布裂を真中で絞って縫いつける	2歳まで	着物の背中	*11
			*赤い糸で下の方に房を垂らす *糸で菱型の文様を縫う	満1歳	一つ身の背中(房)と紐の付け根(菱)	写真2
			*糸で菱型の文様を縫う	満1歳	一つ身の背中と紐の付け根	写真3 写真4
奄美 (宇検村)			*衿の下に白い糸で縫い取りしてある	イダシハジメ(7日目)	イダシギン(赤い着物)	文献47
		白髪になるまで長寿をして米飯を食べる人になれますように	*径1寸5~6分縁1寸位の長方形の守袋を背紋にあたる所につける。 この中に白髪と米粒を入れる	生まれてから33日目(女子)、30日目(男子)の氏神に参詣する時		文献50
(中之島)	マブイ		*赤布を付ける。その上に赤い糸で形を続けて四つくりそれらの四隅に色布でチンボイを9個つける。 マブイには七粒の米を縫い込む。 マブイの中央から下へL字型に糸を縫つて行く。右は女子。左は男子		下着にもウブギンにも縫いつける	文献48 文献49

沖縄における背守りの形

沖縄における背に施された文様は、つぎのように分類される。

- (1)は背縫いの部分に1寸～2寸ほど縫い込みを入れたものである。(図6)
- (2)は糸で直線の糸目を見せるもの。これは、a 7針程縫い上下から房を垂らし、それが三筋あるもの(写真1、図7、図8、図9)と、b此針で12針縫い上部が右に折れ上下の先から糸が垂れているもの(写真2)の2通りある。
- (3)は、糸で菱型・×型・へ型・井型などを縫いつけたものである。(写真3、写真4、図10、図11、図12、図13、図14、図15、図16、図17)
- (4)は布片を縫いつけたものである。a三角の形を縫いつけたり(図18)、b四角の布の真ん中を絞って縫いつけたり(図19)、c米粒や白髪を入れた四角の布を縫込んだり(図20)、d細い布でリボンを作ったり矢結びをしたりして、それを縫いつけたりしたもの(図21)、e花型などを縫いつけたもの(図22)の例がある。
- (5)は、米粒を入れた三角の布を縫いつけ、糸で方形を縫いその中にチンボイと呼ばれる布片を9個縫いつける。さらに中央部から下に向かって何針か縫い男子なら左へ、女子なら右へ折れるといったものである。(図23)

日本本土の背守りの実例と比較して見ると、今回調べた子どもの衣服の資料の中からは、(1)、(2)のa、(4)のa、d、(5)の例は日本本土には見当たらない。反対に(2)のbの形や(3)、(4)のb、c、eは、日本本土でも見られるものである。

形の上では、日本本土にみられる背守り、背紋に照らし合わせてみると、2の形は「背守り」に当たり、1、3、4、5は「背紋」と分類することができる。しかし、先に述べたように沖縄・奄美には「背守り」「背紋」と分ける考え方を見られず、両方を「マブヤーウー=背守り」としてとらえており、形の上では「背守り」「背紋」と分類されるものも、意味の点では同じである。ここでは、意味に重点を置き、「背守り」「背紋」とともに「背守り」として考えたい。

糸で文様が施されたものを背守りと限定するのなら、(1)は、背守りとはみなされないが、魔除けまたは魂(マブイ)を守るという意味からすると、背守りの範疇として考えることが可能となる。このような例もここでは背守りとして加えたい。

(2)のaの形は、既に日本本土の他の地域には見られない沖縄独特の形であることが論証されている。(文献6)表3を見ると、この形の背守りは、首里・那覇地域にしか見られない。絵画(文献57/図9)に描かれた同形の背守りは、経縞あるいは格子縞の着物に縫いつけられているが、実物資料にみられる同形の背守りはほとんど紅型衣裳に施されたものである。子どもの着物に紅型を使う地域は、首里・那覇あたりに限られていた。この形が沖縄全域にみられないことから、次の二つのことが考察できる。

*首里、那覇の士族階級以上にのみ伝承された形である。

*広く沖縄全域にみられた形だが、伝統と格式を重んじる首里・那覇のみに、この形が

残った。

しかし、このあと詳細について、ここで論じるには調査不足で、この件については次の課題としたい。

(3)の形は、日本本土でもよく見られるもので、たくさんのバリエーションがあるが、沖縄も同様で、背だけでなく、紐の付け根の部分にも見られ（写真4）、それも魔除けの意味があったと言われている。

(4)のaの三角の布を縫い付けるのは、沖縄・奄美以外の地域では探すことができなかった。三角の布はハベル（蝶）と呼ばれる。蝶は魂（マヅイ）の化身であり、聖なるものと考えられている。また、三角の布を集めて衣服にした例もある。三角の布の中には米粒を入れて縫い込む場合がある。（文献58）

(4)のbは例としては少ないが、布の真ん中を絞って縫いつけ、沖縄では「ハベル（蝶）」と呼ばれている。

(4)のcは奄美地方に見られる背守りで、袋の中には牛の角、大豆、ヒエ、モミなど7種類のものを入れたり、また長寿者の白髪や米粒を入れたりする。方形の布の下、着物の背中心部分には糸で（↑）文が施されている。（文献58）

eの例としては少なく、桃の型（那覇）、花型や蝶型（糸満）を縫いつけたものがある。

(5)は奄美地方のみに見られる形である。産着の下着（ナヅケキモノ）や上着（ウズギン・オズギン）の両方に縫いつけられている。（文献57）

背守りの変遷について

明治以降、裁縫技術が広く展開するには、学校教育と大きな関わりがある。

明治5年に学校教育が始まり、小学校から「裁縫」の時間が設けられ、裁縫の技術指導が行われるようになる。それとともに背守りの形と意味も大きく変わってきたと言える。

夫馬佳代子「産着に見られる背守りの変遷」（文献1）によると、明治10年から大正15年までの学校教育で用いられた裁縫の教科書をランダムに選び出した38冊の内、「背守り」、「背紋」の形と意味について記載されているものは12冊である。検定の行われた教科書11冊の内8冊には「背守り」「背紋」について記載されていない。

また、学校教育で使われたものではないが、明治42年の裁縫書『裁縫おさいくもの』には「背紋」を「背守り縫い」と表現するものもみられる。（文献1）

時代を追って裁縫教育における教科書をみると、「背守り」「背紋」が装飾化され、裁縫の技術修練のために使われるようになり、「背守り」「背紋」の習俗としての意味付けが曖昧になっていくことが分かる。（文献1）沖縄奄美において、背守りと背紋の意味が曖昧に

とらえられた背景にはこのように学校も含めた手芸教育によるところが大きい。

さらに、裁縫書は、日本各地に伝わる背紋の形を集め装飾化することで、逆に各地に伝わる背守り・背紋の形に大きな影響を与えていた。(文献1)

このように、学校における裁縫教育は、日本の背守り・背紋の意味と形を大きく変える要因の一つと考えられる。

沖縄においても例外ではなく、今回の聞き取り調査でも、学校の授業で裁縫を指導されたとの回答を得ている。

おそらく、沖縄・奄美でも日本各地でも見られる背守りの(2)のb、(3)、(4)の形は、昔から伝承されてきた形ではなく、学校または手芸教育の影響によるものと思われる。

沖縄における廃藩置県は明治12年、学校教育は明治13年から開始される。このようにして、上述の形は、沖縄各地に広まっていったのではないかと思われる。

反対に、(1)、(2)のa、c、(5)の形の背守りは、沖縄・奄美のみに見られる独特のもので、伝承されてきた形だと考えることができる。

(2)のaの背守りは、背守りの形の中で(2)のb(写真2)または日本本土の①(図1)の背守りに最も類似性がある。(2)のbまたは図1は、日本本土で「背守り」と称されるものである。その形はかなり多様なバリエーションがある。『若草頌』(文献2)中には、左右に折れの無いものもあり、背守り(2)のaとどのような関わりがあるか興味深いものがあり、次の3つの可能性が考えられる。

*背守り(2)のbの形から影響を受けて、背守り(2)のaの形が生まれた。

*背守り(2)のaの形が日本本土でbの形へ変わり、沖縄で(2)のaの形で残った。

*両方に近い形が元となり、日本、沖縄それぞれで、(2)のbあるいは(2)のaに変わった。

しかし、沖縄における背守りの事例が少なく、それを裏付ける文献資料などもほとんどないため、背守り(2)の形とどのような関わりがあるのか実証することは今の段階ではむずかしく、今後の調査の課題としたい。

おわりに

本稿は、沖縄の産育における子どもの衣との関わりを、各市町村史などの報告から考えるとともに、「背守り」について、これまで報告された民俗調査、文献に新たな調査と实物資料を加えて、日本本土と比較しつつ、その意味と役割、形とその変遷について考察してきた。

沖縄において「ムンヌキ」「マブイウシー」「マブヤーウー」と呼ぶ背に施された文様は、日本本土においては「背守り」「背紋」に分類され、いずれも長寿や魔除けを祈願し

て施されるものである。沖縄においては形の上で、このように分類することは可能であるが、両方とも魔除けや魂を守る意味を持つため、特に分けられず一括して「背守り」と考えることができる。

その形は、様々なバリエーションを持っているが、本稿では、日本本土との共通形や、沖縄独自の形の資料を報告、考察を加えた。本土同形の背守りは、学校教育などの影響を受けて沖縄に入ったと考えられる。(2)のa形は、日本本土に見られない沖縄独自の形であるが、首里・那覇地域にしか見られない形であり、これがどの様な経緯によってこの地域に存在したのか、その辺りを考察するのは今後の課題である。また、この(2)のa形の「背守り」は(2)のb形の日本本土で「背守り」と称されるものに最も類似性が高く、このことからaとbとの間には何らかの関係があるのではないかと考えられる。これもまた今後の調査、研究の課題としたい。

今回の「背守り」についての聞き取り調査においては、明確な答えをほとんど得られず表に報告したものは、回答を得られた数少ない例であった。

明治・大正・昭和と医療事情が改善されるにしたがって、乳幼児の死亡率が低下したこと、また学校教育（特に裁縫教育）の普及などによって、「背守り」はその意味と形を変化させ、また衰退させていったのではないかと思われた。

最後となつたが、色々ご教授、ご協力いただいた皆様に謝意を表して終わりとしたい。

脚注

(*1) 柳悦州・片岡淳／ラオスの染織調査／1993年12月

(*2) 北谷では大正5、6年頃には小学校4年生から裁縫の教科で赤子から幼児10歳前後の子ども用の衣類の縫い方を教わる

(*3) 実物資料。尚裕氏所蔵（『尚家所蔵琉球王朝文化遺産展』1993年より）

(*4) 実物資料。読谷村歴史民俗資料館蔵

(*5) 実物資料。個人蔵（『琉球文化遺宝展図録』）

(*6) 実物資料。個人蔵

(*7) 実物資料。南嶋民俗資料館蔵

(*8) 多宇時氏（明治40年生／85歳）より聞き取り

(*9) 大浜真鶴氏（明治36年生／90歳）より聞き取り

(*10) 徳吉マサ氏（大正9年生／72歳）より聞き取り

(*11) 池間苗氏（大正8年生／73歳）より聞き取り

図1 (文献1、2、3より作図)

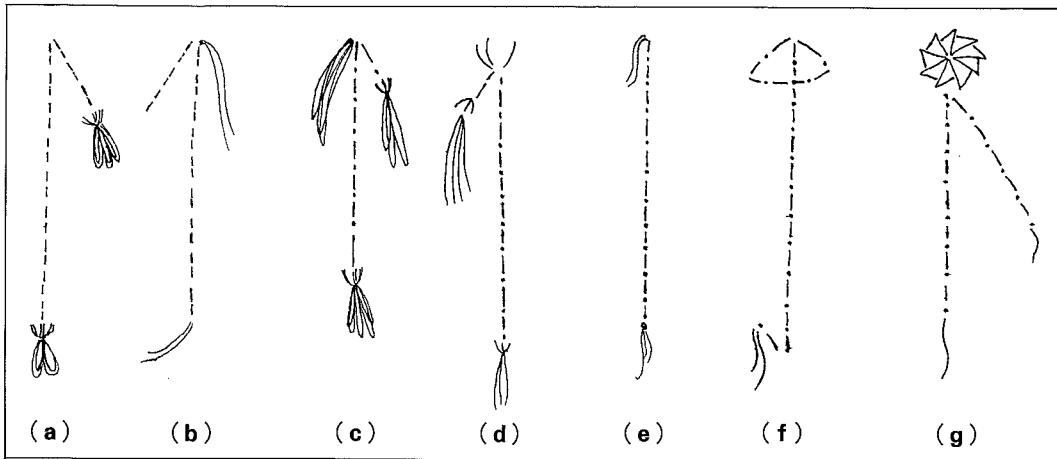


図2 (文献1、3より作図)

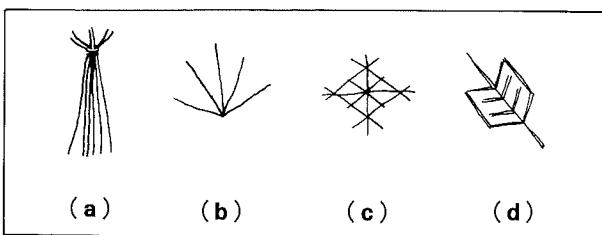


図3 (文献1、3より作図)

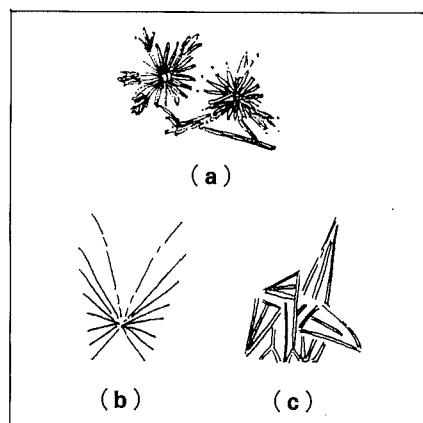


図4 (文献3より作図)

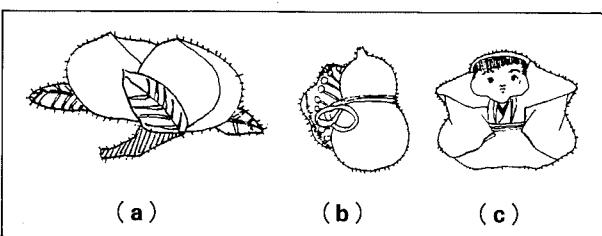
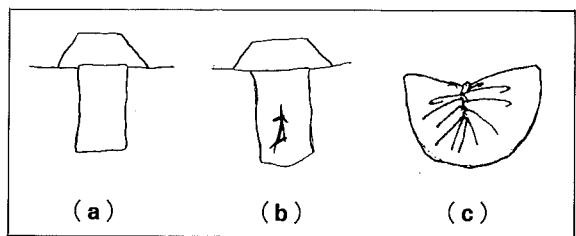


図5 (文献2、3より作図)



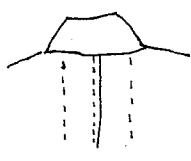


図6
(*4より作図)



図7
(*6より作図)



図8
(*5より作図)



図9
(文献27より作図)

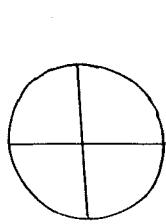


図10
(*3より作図)

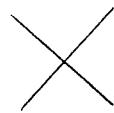


図11
(文献9より作図)

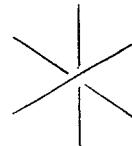


図12

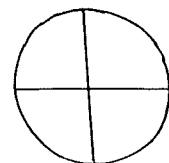


図13
(*8より作図)

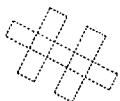


図14
(*10より作図)



図15
(*10より作図)



図16

(文献6より作図)



図17

(文献6より作図)

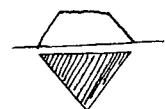


図18
(文献46より作図)

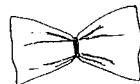


図19
(*11より作図)

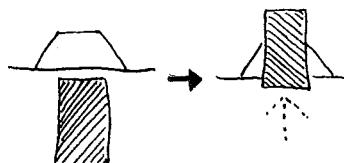


図20
(文献58より作図)



図21
(文献6より作図)



図22
(文献6より作図)

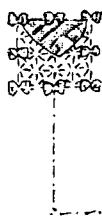


図23 (文献58より作図)

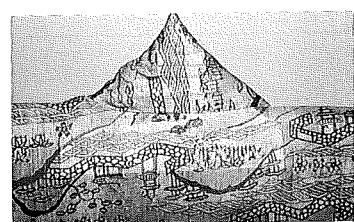


写真5 (日本民藝館蔵)

参考文献一覧

- 1 夫馬佳代子「産着にみられる背守りの変遷～裁縫教科書を基礎資料として～」『研究紀要 創刊号』1991年 衣の民俗館
- 2 切畠健「『若草頌』によせて」『田村コレクション 若草頌 子どもの衣裳』1993年 田村資料館
- 3 『祈り・忌み・祝い～加賀・能登の人生儀礼～』1993年 石川県立博物館
- 4 『近江商人の妻たち』1993年 滋賀県立琵琶湖文化館
- 5 辻合喜代太郎／橋本千榮子『琉球服装の研究』1991年 関西衣生活研究会
- 6 嘉陽妙子「マブヤーウーについての一考察」『沖縄民俗研究 第6号』1986年 沖縄民俗研究会
- 7 「奥部落調査報告書」『沖縄民俗 第9号』1965年 琉球大学民俗研究クラブ
- 8 「与那部落調査報告書」『沖縄民俗 第17号』1969年 琉球大学民俗研究クラブ
- 9 平良次子「通過儀礼における衣服～大宜味村喜如嘉の場合」『沖縄民俗研究 第8号』1988年 沖縄民俗学会
- 10 「川田部落調査報告書（東村）」『沖縄民俗 第7号』1963年 琉球大学民俗研究クラブ
- 11 「東村平良区採訪報告」『沖縄民俗 第6号』1963年 琉球大学民俗研究クラブ
- 12 『今帰仁村史』昭和50年 今帰仁村役場
- 13 「上本部村具志堅部落調査報告」『沖縄民俗 第15号』1968年 琉球大学民俗研究クラブ
- 14 「久志村汀間部落調査」『沖縄民俗 第13号』1967年 琉球大学民俗研究クラブ
- 15 「伊是名部落調査報告」『沖縄民俗 第8号』1963年 琉球大学民俗研究クラブ
- 16 「田名部落調査報告」『沖縄民俗 第4号』1961年 琉球大学民俗研究クラブ
- 17 『石川市史』昭和51年 石川市役所
- 18 「勝連村南風原調査報告」『沖縄民俗 第18号』1970年 琉球大学民俗研究クラブ
- 19 「宮城部落調査報告」『沖縄民俗 第17号』1969年 琉球大学民俗研究クラブ
- 20 『具志川市史 第1巻 新聞集成（明治編）』平成3年 具志川市役所
- 21 「座喜味部落調査報告」『沖縄民俗 第11号』1966年 琉球大学民俗研究クラブ
- 22 村山友江「読谷村儀間部落の産育について」『読谷村立歴史民俗資料館紀要 第8号』1984年 読谷村教育委員会歴史民俗資料館
- 23 村山友江「読谷村喜名部落の産育について」『読谷村立歴史民俗資料館紀要 第11号』1987年 読谷村教育委員会歴史民俗資料館
- 24 村山友江「読谷村楚辺部落の産育について」『読谷村立歴史民俗資料館紀要 第12号』1988年 読谷村教育委員会歴史民俗資料館
- 25 知花春美「読谷村字楚辺部落の衣」『読谷村立歴史民俗資料館紀要 第13号』1989年 読谷村教育委員会歴史民俗資料館
- 26 村山友江「読谷村字長浜部落の産育」『読谷村立歴史民俗資料館紀要 第16号』1992年 読谷村教育委員会

歴史民俗資料館

- 27 『嘉手納町史 資料編2 民俗資料』平成2年 嘉手納町役場
- 28 「中城村伊集」『沖縄民俗 第23号』1977年 琉球大学民俗研究クラブ
- 29 『西原町史 第四巻 資料編三 西原の民俗』平成元年 西原町役場
- 30 「西原町棚原報告」『沖縄民俗 第22号』1976年 琉球大学民俗研究クラブ
- 31 『浦添市史 浦添の民俗 第四巻 資料編3』1983年 浦添市
- 32 「比屋定部落調査報告」『沖縄民俗 第14号』1967年 琉球大学民俗研究クラブ
- 33 平敷令治「衣・食・住」『沖縄県文化財調査報告書 糸満の民俗 糸満漁業民俗資料緊急調査』昭和49年 沖縄県教育委員会
- 34 『東風平村史』昭和51年 東風平村役場
- 35 「糸数部落調査報告」『沖縄民俗 第14号』1967年 琉球大学民俗研究クラブ
- 36 「久手堅部落調査報告」『沖縄民俗 第七号』1963年 琉球大学民俗研究クラブ
- 37 「久高島」『民俗 創刊号』1960年 琉球大学民俗研究クラブ
- 38 「(三) 信仰と民俗」『南風原村史』1971年 南風原村役場
- 39 比嘉伝福「座間味の民俗調査から」『民俗 第2号』1960年 琉球大学民俗研究クラブ
- 40 「栗国村西部落調査報告」『沖縄民俗 第15号』1968年 琉球大学民俗研究クラブ
- 41 「狩俣部落調査報告」『沖縄民俗 第12号』1966年 琉球大学民俗研究クラブ
- 42 「城辺町砂川部落調査報告」『沖縄民俗 第18号』1970年 琉球大学民俗研究クラブ
- 43 「女性の生活とその変化なー既婚女性を中心にー」『文化人類学実習報告書 第8輯』1990年 国際基督教大学社会学科人類学研究室
- 44 宮城文『八重山生活誌』昭和47年
- 45 「租納部落調査報告」『沖縄民俗 第16号』1969年 琉球大学民俗研究クラブ
- 46 平敷令治『沖縄・奄美の衣と食』昭和49年 御明玄書房
- 47 有馬英子「女の一生聞書ー奄美大島宇検村生勝ー」『南島研究~女性特集~ 第13号』1972年 南島研究会
- 48 栄喜久元「衣食住」『トカラ列島有形民俗資料調査報告書』昭和46年 鹿児島県明治百年記念館建設調査室
- 49 村田 照「信仰・行事」『トカラ列島有形民俗資料調査報告書』昭和46年 鹿児島県明治百年記念館建設調査室
- 50 長田須磨「奄美の女性の生活と習俗」『奄美郷土研究会報 第12号』昭和46年 奄美郷土研究会
- 51 『中国諸民族服飾図鑑』1991年 柏書房(株)
- 52 朴京子／尹良老／趙鮮姫／金容文／朴順姫「韓国の通過儀礼服～出生から臨終まで～」『国際服飾学会誌No.10』1993年 国際服飾学会
- 53 『原色染織大辞典』昭52年 御淡紅社
- 54 『民間信仰辞典』昭55年 東京堂出版

- 55 『民俗の事典』1972年 岩崎美術社
- 56 『沖縄語辞典』昭38年 大蔵省印刷局
- 57 宝玲叢刊 第五集「琉球風俗絵図」昭57年 本邦書籍(株)
- 58 黎明館企画特別展「子どもの世界」図録1990年 鹿児島県歴史資料センター黎明館
- 59 『那覇市史 那覇の民俗』昭54年 那覇市
- 60 『佐敷町史 二 民俗』昭59年 佐敷町役場
- 61 『北谷町史』平成4年 北谷町役場
- 62 『渡名喜村史 下巻』昭58年 渡名喜村

インタープリテイションとボランティアガイド

前田 真之

(沖縄県立博物館)

Interpretation and Volunteer Guide

Masayuki MAEDA

(Okinawa Prefectural Museum)

Abstract : How to inform the visitors of the significance of the museum exhibits was seriously discussed at the 40th General Conference of Museums Symposium, held by the Japan Association of Museums.

We regret that we have little experience of the interpretation in Japan. So it is necessary for the Japanese Museums to learn from America.

I introduced the practices of interpretation used in America.

The first is the historical background of why interpretation is so highly valued in America.

The Second is interpretive techniques, otherwise known as Guided Discovery in America.

Finally I showed the interpretive techniques that were introduced into the Okinawa Prefectural Museum to explain the museum exhibits, a Folding Screen related to the bird's eye view of Shuri and the Naha area.

[はじめに]

近年、博物館のありかたをめぐって、様々な論議が成されている。^(注1)

第40回全国博物館大会におけるシンポジウム「新しい世紀をめざす博物館」において提起された問題点を整理してみると、これから解決すべき方向が明らかになると同時に全国の博物館では一体これらの問題に対して、どのように取り組んできたのかという問い

掛けにもなると思われる所以、紹介しておくことにする。

- 1 展示内容と展示見学者とのギャップをどのように解決するのか：展示の対象は高校生以上であるが、実際の入館者は、小中高生が80%以上を占めるという現実。
- 2 博物館へのリピーターを如何にふやしていくか。
- 3 見る展示から社会のニーズにあった参加型の博物館活動への転換をどう図るか。
- 4 知的アミューズメントセンターとして博物館が活動するためには、教育活動をどのように組織化していけばよいのか。
- 5 大会の4テーマ（①人々は博物館に何を求めているのか、②人々に好まれる博物館環境は、③博物館にどのような人が来るのか、どのような人が来ないのか、④博物館が社会の理解を得るために何をすれば良いのか）を前提にして考えたとき博物館の調査・研究はどうあるべきか。
- 6 ボランティアの組織づくりをどうすすめていくのか。

本稿では、上述した1、2、3、4、6の課題と関連して、“展示内容を来館者に分かりやすくしていくためにどのような方法があるのか、またそのためにボランティアの解説指導をどのように進めていけば良いのか”という観点から、アメリカで学んだこと、沖縄県立博物館で実践してきたことについて述べていきたい。

インタープリテイションとは何か

インターパリテイション（Interpretation）という言葉の意味を、ランダムハウス英和大辞典で調べてみると「1 説明、解明 2（他人の芸術作品・創作などの意味の）解説、解釈 3（他人の言動に対する）考え方、解釈、理解 4 解釈の方法、解釈のしかた 5（劇、音楽などで、その意味を表わすための、または自己の解釈を示すための）役作り、演出、演奏 6 通訳」

とある。

しかし博物館学でいうインターパリテイションが、上のどちらの内容に該当するのか、また上に出てきた訳語で十分対応できるものなのか確認するためにも、エドワード P. アレクサンダーの「ミュージアムズ イン モーションズ」で触れているインターパリテイションについて述べておきたい。

彼は、はじめに「インターパリティング アウト ヘリティジ」の著者フリーマン ティルデンのインターパリテイションに関する定義を紹介している。

フリーマンは、「インターパリテイションは、事実に基づく情報と単に対話することよ

りも、むしろ直接体験や説明に役立つメディアにより、オリジナルの博物館資料の使用に関し、その意味とつながりを明らかにしようとする教育活動である」と定義する。^(注2)

そしてアレクサンダーは、この定義に、良いインターパリテイションの場合は、次の5つの要素が付け加えられると述べている。

良いインターパリテイションとは「1 真実を教え、意味を明らかにし、理解をもたらすもの……2 オリジナルの資料に基づくもの……3 科学的、歴史的調査に基づくもの……4 五感を活用するもの……5 クラスのような形をとらず、自発的でかつ来館者の関心にのみ基づき、しばしば楽しんだり対応ができるようなインフォーマルの教育である。」^(注3)

ティルデンやアレクサンダーが定義したものをもとに整理してみると「インターパリテイションとは、科学的歴史的調査に基づきながら、博物館資料に関して、五感を活用してその意味やつながりを明らかにし、理解させる教育普及活動」ということになる。

この定義をもとにランダムハウスに述べられた意味を、もう一度確かめてみると、2の解説、解釈という言葉が最も近い意味になるのだが、しかしこれは上にのべた教育普及活動の一部ではあっても、インターパリテイションの意味全体を十分に反映したものにはなっていない。そのためあえて訳語をつけずインターパリテイションという言葉をそのまま使うことにする。

インターパリテイションの活動にはどんなものがあるのか

アレクサンダーによれば、インターパリテイションの活動として、①オリエンテイション、②ツアーや③体験活動、④講演、フォーラム、セミナー、⑤出版、⑥映画およびテレビジョン、⑦広報活動およびミュージアムショップのための博物館資料の商品化、⑧若者向けの活動（クラブ、ボランティア活動）が具体的なものとして挙げられている。^(注4)

ここに列挙された活動例を見ていくと、アレクサンダーが述べているものは日本でいう教育普及活動とほぼ変わらないことが分かってくる。沖縄県立博物館の場合、「1、博物館文化講座の開催、2、移動博物館の開催、3、ワークシートの作成事業、4、観覧者への展示解説、5、児童生徒団体見学、6、展示室学習の事前打ち合わせ、7、夏休み「歩く・見る・作る」教室の開催、8、団体見学者へのビデオサービス、9、ポスター・博物館案内リーフレット・博物館だより等の編集・発行、10、博物館事業のマスコミ等への広報活動、11、友の会への指導や援助」が教育普及活動の事例として挙げられるが、これらの活動は多少の差はある、ほとんどの博物館で取り組んできていることである。^(注5)

こうなると敢えてインターパリテイションという訳語を使わず、教育普及活動という言

葉で説明した方が良いのではとの疑問が生じてくるのだが、アメリカで、この活動が博物館のありかたをめぐる歴史的変遷の中でクローズアップされてきたことを考慮するならば、日本での活動と区別する意味でもインテリテイションという訳語で説明していくほうが良いと思われる。

そこでアメリカではなぜインテリテイションが重要視されるようになってきたのか、その歴史的背景について述べておきたい。

アレクサンダーによれば、「アメリカの19世紀の典型的な博物館は、博物館資料や標本のみを強調する、来館者にとって静的、閉鎖的な場所であった。そこは死んだように静まり、徽臭く、来館者は小さく話すことさえ控えなければならないように感じていた。^(注6)」しかし这样的な状況に対して、教育やインテリテイションの多彩なプログラムによる挑戦が始まり、20世紀の後半世紀からは貧困層や障害者、エスニックあるいはマイノリティーグループなどの新しい来館者にも手をさしのべる動きが生じてきたと述べている。^(注7)マイノリティーによる博物館活動批判を紹介しておく。

1. ギルマン対ダナの美術館論争：この論争は、当時ニューアーク博物館の創設者でかつ館長をしていたジョン・コットン・ダナとボストン博物館のセクレタリのベンジャミン・アイブス・ギルマンとの間で行われた。

論争の焦点は、美術館の活動の中心が、美の鑑賞にあるのかそれとも社会的な役割にあるのかということであった。

ギルマンが「ミュージアムの目的は、人々のモラルを高め、審美眼をみがくことではなければならない。ミュージアムは、本来 文化的機関であり、ただ二次的に学習の場があるにすぎない。」と述べ、展示のみで十分であるとしているのに対して、ダナは「美術活動の本来の重要性は、思想と情報の伝達者たることである。その活動は、審美的な対象に関するよりも社会的なドキュメントに関するものとみなされってきた。ミュージアムの使命は、教育することすなわち情報や思想を人々に伝達することにある。ミュージアムは、文明の財産であり、したがって資料を保存するだけではなく、資料の持つ意味を人々に伝えていくべきである。」^(注8)と述べ、実習プログラム（Apprenticeship Program）という形でインテリテイションの活動を実践していった。

この論争が契機となり、アメリカの多くの博物館指導者がダナが主張した教育重視の方向すなわちインテリテイションの活動を実践する方向に進んでいくことになるが、さらにこれに拍車をかけたのが、戦闘果敢なマイノリティーたちにより

1960年代後半に行われた“地域と博物館との在り方”をめぐる博物館活動批判であった。

2. マイノリティーによる博物館活動批判：アメリカのマイノリティグループが博物館活動の在り方をめぐって行動をおこし始めたのは、1960年代の後半であった。この時期は、アメリカがベトナム戦争と関わりを持つようになった政治の季節であり、その影響が博物館の方にも影を落としていく。やがてアメリカの博物館では、これまでの反省をふまえ、教育を重視し地域との連携を深めていくが、博物館資料そのものの存在は否定しないという形で収束されていく。

革命的美術労働者連合による博物館批判：1969年にブルックリンのMUSEで行われた地域博物館(Neighborhood Museum)のためのセミナーは、マイノリティグループの行動に影響をあたえた。このセミナーでは、これまでの博物館の在り方が批判され、白人のつくった博物館への挑戦が明らかにされた。美術ゲリラ行動グループのジョン・ヘンドリックスは「問題は、白人の文化を貧者へ強制することではなく、白人のエリートによる干渉を受けず、自らの直接的な利益につながるような貧者の文化承認の道を見つけることである。」^(註9)と述べ、さらに博物館資料やスタッフの市内施設への分散化を要求している。

同じく1969年には、反対グループから構成される革命的美術労働者連合が、博物館資料を売却して、その費用をすべての人種に分け与え、ヴィエトナム戦争が終わるまでは博物館を閉鎖せよとの戦術を取っている。メトロポリタンでは、黒人グループがピケを張り、常設展の10の絵画に傷をつけたりする事件が起きている。そしてこのような事件は、1970年代にアメリカの幾つかの場所で起きている。

このような動きが博物館をカルチャーセンター化、すなわち博物館資料を処分し、イベントを中心にする方向をもたらすが、やがてはインターパリティションの活動を取り入れ、マイノリティーの意向をも十分反映するが、博物館資料の存在そのものは博物館にとって欠かせぬものであるとの形で収束していく。

アメリカでおきた博物館活動批判は、博物館がマイノリティーに対してどんなことをしてきたのかという問い合わせから始まるが、やがてはその改善の方向としてインターパリティションの活動を取りいれ、地域に開かれた博物館をめざすようになっていく。

アメリカのインターパリティションの活動に何を学ぶか：発見に向かわせる解説

アメリカのインターパリティションの活動は、沖縄県立博物館を含め日本の博物館での

活動と比べると大差がないように思える。しかしその内容をこまかに見ていくと、まだまだ参考になる事例が多く見られる。ここでは、解説に関連するアメリカの資料を紹介し、そこに何を学ぶのかを明らかにしていく。

1. マクドナルドの箱の 50 の見方－柔軟思考の実践－：アメリカでは、“どうすれば来館者に博物館資料を理解させることができるのか”という見地から、研究や活動が盛んに行われている。その代表的な事例として、ブルックリンの MUSE の活動を取り上げてみると、そこでは、プラネタリウムショー、生きた動物の用意、見て触れる展示、科学や工芸の実験や実演、人形ショー、音楽、ダンス、映画、コレクションの借用制度、子供と大人のためのワークショップ（扱うのは、人類学、天文学、解剖学、ダンス、写真、美術、詩、消費者教育、性教育、薬物乱用、航空、創作活動、映画、スピーチ、音楽その他）などの多彩なインターパリテイションの活動が行われている。一つの博物館のなかでの活動（注10）は、MUSE に代表されるが、これを時間の軸でアメリカ全土を通して見ていくと、1970 年代の子供博物館の増加、1980 年代に増加する既存の博物館でのディスカバリー・ルーム（再発見ルーム）の設置という大きな流れがあることがわかる。子供博物館やディスカバリー・ルームのねらいとするところは、五感を利用した活動や体験で、それはインターパリテイションの活動の重要性を物語っている。

しかしここでは、インターパリテイションの活動のうちアメリカの多くの博物館で行われているドゥストン（ボランティア）の解説について述べていきたい。

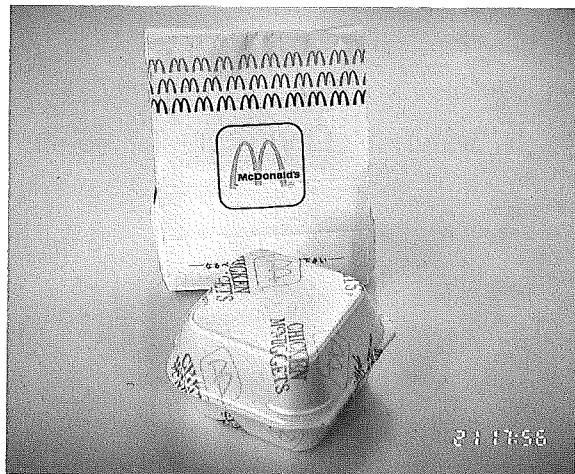
アメリカでの解説に対する考え方は、来館者が多様であれば、解説もそれに応じて多様でなければならないということである。グリンダーとマコイの共著「The Good Guide」では、解説を大きく①講義型、②質問型、③発見型の三つに分けていて、日本の多くの博物館で解説のために準備されている解説シナリオは、この分類でいけば①の講義型になる。（注11）

この講義型は、限られた時間内で博物館資料のことについて知りたいときには有効である。しかしこの解説は、相手が高等学校の生徒や大人のように、博物館資料に関しある程度知識を有するものの場合には有効であるが、対象が小学生であったり、既存の知識がないものにとっては不十分なものとなる。

そこで①で対応できない来館者には、②の対話型や③の発見型で対応することになるが、②や③の対応を考えるときに参考になるのが、「マクドナルドの箱の 50 の見方－柔軟思考の実践－」である。（注12）

ここではマクドナルドの箱が博物館資料として設定され、この箱についてどれだけの質問づくりができるのか 50 の質問づくりが紹介されている。この質問づくりの意義は、一

つの資料に関してこれだけの多くの質問を考えることができ、それを通して来館者の頭の中に博物館資料に関する具体的なイメージを定着させていくことができるということである。



マクドナルドの箱を使っての質問づくり
(50 Ways to look at a Big Mac Box)

- 1) 句いをかいでみよう。
- 2) マクドナルドの味見をしてみよう。
- 3) 全体のようすは?
- 4) 人気は?
- 5) 箱の大きさ、高さ、重さ、長さは?
- 6) 形、色は?
- 7) マクドナルドと分かるように相手に説明してみよう。
- 8) なぜこのサイズになったの?
- 9) マクドナルドの箱は、みな同じサイズ?
- 10) マクドナルドの箱のサイズは変わってきたの?
- 11) 箱の形は、どのような形に決まったの、作る方法は、箱の機能は?
- 12) なぜ箱の色は白ではないの?
- 13) 箱の飾りには、どんな役目が?
- 14) 書かれていることは、何を伝えているの
- 15) シンボル、ロゴマーク、トレードマークは、社会的にみて大切?
- 16) ビッグマックという名前は、今の時代をどれだけ反映?
- 17) 丸く囲まれたRは、何を表わしているの?
- 18) この箱造りのために、どんな材料を使っている?

- 19) この材料のために、どんな原料が使われたの？
- 20) これは再利用された資源？
- 21) 再利用は、現代社会における資源保護について何を物語っているの？
- 22) なぜこの材料がえらばれたの？
- 23) この材料の長所と短所は？
- 24) もし木や陶器のような材料が使わっていたらどうなった？
- 25) あなたは箱を見て、それから箱がどのように作られたのかの文をみて何を学びますか？
- 26) 製造のどの段階で文字が印刷されたと思いますか？
- 27) あなたは、製造過程を見たことがありますか？
- 28) 箱は良くデザインされていると思いますか？
- 29) デザインされた目的にかなうよう使われているとおもいますか？
- 30) デザインは、どれだけ改善できると思いますか？
- 31) 20年、50年、100年前にハンバーガーの包装紙をデザインしたとすれば、どのように違ったものを作れたかな？
- 32) 20年、50年、100年前、人はハンバーガーを食べていたかな？
- 33) 将来ハンバーガーの箱はどうなるの？
- 34) 箱のそこにある数字は何？
- 35) 箱のそこにある数字は、どこでつくられたのかの手掛かりになりうるか？
- 36) 箱はどこで作られた？
- 37) 箱に変わるものに何がある？
- 38) なぜハンバーガーは、平たいプレートに置かないの？
- 39) マックの箱は、それを使う人に何を物語るの？
- 40) 10分以内でマックについて、皆に説明してみよう。どれだけの人が、マックだと理解できなかったのかな？
- 41) マクドナルドへのこのような反応をカリフォルニアやオーストラリアのペースなどで得られますか？
- 42) マクドナルドの本部はどこにありますか？
- 43) あなたは、休みを必要としていますか？
- 44) 北アメリカでは、毎日どれだけの箱が使われていますか？
- 45) ひとつひとつの箱は、実際に何日使えるの？
- 46) 使われた後どうなるの？
- 47) ビッグマックの箱が、なぜ歩道や芝生、ビーチで見られるの？

48) この箱をリサイクルして活用できるものがあるの？

49) このマックの箱にかわるものがあるの？

50) ビッグマックの箱の一番の意義は何だと思いますか？

そして今、あなたがビッグマックの箱になったとして、箱になったあなたのストーリーを書いてみよう。

上で紹介した質問の内容を見ていくと50問のうち観察して答えられるものが7問で、残りの43問は自分で推測しさらに実際に調べてみないと分からぬるものである。質問は観察を出発点とするが、博物館資料を見る視点を与えながら自分でさらに調べ発見させる方向につなぐ形になっている。

2. 国立アメリカ歴史博物館歴史伝承室パンフレットの解説：国立アメリカ歴史博物館には、パブリック プログラムという教育普及活動を担当する部署がある。国立アメリカ歴史博物館の発行する内部資料「スタッフ オリエンテイション ブック」^(注13)によると、パブリック プログラム課の仕事は「一般の方のみならず特別の来館者のために、博物館展示を補ったり解釈したりする多彩なプログラムや実演を支援、調整すること」と説明している。

この部署にはさらに教育課が置かれ、ここではボランティアによるガイドがスムーズにいくようガイド教育を施したり、ボランティア活動の調整をしたり、さらに歴史伝承室（体験室）の管理運営を行っている。

この歴史伝承室には、主に次のような学芸資料が置かれている。

モールス信号機／ラバの馬具の取り付け／アメリカの初期のミシン／ユダヤの旅商人の商品／汽車内の郵便振り分け所／綿選別機／黒人奴隸の使ったうすと労働歌／アメリカ18世紀のベストとドレス／自転車／アメリカインディアンの桶／メキシカンの作った椅子／拡大切手／土の家（ソドハウス）／バッファローの皮に描いた絵／ナバホインディアンの織り／

この歴史伝承室の学芸資料は、一人で試すことができるよう作られている。しかし一人で試していて分からぬことがあったりするときのために、それぞれの資料にはパンフレットの解説が置かれている。

ここでは歴史伝承室に張り付けられた大きな写真パネル、“土の家（ソドハウス）”に関するパンフレットを紹介し、その内容の検討を通して解説のありかたを見ていくことにす

る。表紙のタイトルは、"クラムさんに会おう：再発見！ クラムさんのソドハウスづくり"となっていて、見出しの疑問文とそのあとに説明が続く形になっている。



国立アメリカ歴史博物館 歴史伝承室（ハンズ オン ヒストリールーム）
(photographs on "Sod House", National Museum of American History)

- 1) クラムさんは、どのようにして家を作ったのかな？
(ヒント：あなたの右側にあるケースの土を見てごらん)
- 2) 土のかたまりは、どのように並べたのかな？ どちらの面が上に向いているの？
(ケースの中の土を見てごらん！)
- 3) 土のかたまりを何が支えているの？
- 4) クラムさんの家の体重は？
(ヒント：土のひとかたまりは、およそ50パウンド)
- 5) 壁の厚さは、どうなっているの？
(ヒント：土ひとかたまりの幅は、12~18インチで二つ並べる)
- 6) 壁の形どこか違うところ気付いたかな？
- 7) 窓を見てごらん！ 二つの窓はどうして隣あっているの？
- 8) 窓のうえのとこ、どうして隙間があるの？
- 9) ケースの中の土、どこか変わっていない？
- 10) クラムさんは、家にどんな飾り付けをしたの？

11) クラムさんの飼っているペットは?

ここに紹介した見出しが、すべて疑問文の形になっている。このねらいは、写真を何となく漠然とした気持ちで見がちな来館者に、疑問文による投げかけを通して“厳しい中西部の開拓者のくらしを具体的にイメージ化させよう”ということにある。

この1~11までの見出しのうち、パネルの具体的な観察をとおして理解できるものは、1、2、3、6、9、10、11の7つで、残りの4、5、7、8の4つは観察したものをもとに推測が必要なものあるいは自分で調べてみないと分からぬものである。

これらの質問は、具体的な観察を出発点とするが、推測を要するものも取り入れ、推測を要するものについては自分で調べていく余地を残しながら全体像の具体的なイメージ化に迫る発見型の形を取っている。

3. 発見に向かわせる解説: 上で述べてきた「マクドナルドの箱の見方」や「土の家」のパンフレットから、我々が何を学ぶことができるのかが重要な課題となってくる。

我々が学ぶ必要のあるものを結論として述べるならば、“博物館資料そのものに目をむけさせ、自分から進んで博物館資料に迫っていかせるような解説の手法”を学ぶことが、いかに大切であるかということである。

このような解説の手法を学ぶことができれば、解説シナリオを暗記して活動にあたってきたこれまでのボランティアに対し、来館者への対応の多様さと解説の創意工夫の楽しさを教えてくれるであろう。

沖縄県立博物館での実践：発見に向かわせる解説の導入

1. 博物館ボランティアへの解説指導の経緯: 沖縄県立博物館では、平成5年7月に「沖縄県立博物館ボランティア活動実施要項」を施行し、さらに県の生涯学習振興課と協力しながら7月から9月までのボランティア養成講座と毎月第2水曜日の解説勉強会を進めてきた。

ボランティア養成講座では、「学び続けるということ」、「歴史展示の見方」、「いまなぜ博物館か」、「アメリカの博物館ボランティア」、「コレクションの収集と管理」、「わたしのつくる解説コース」、「解説体験学習」の講座を用意し、その中から14名のボランティア登録者（教育ボランティア11名、資料収集ボランティア3名）が誕生した。

この14名が、現在 解説を中心としたボランティア活動を実施中だが、そのかたわら次年度に登録希望するものも含めて月に1回の解説勉強会を行っている。

解説ボランティアの中には、解説の仕事はシナリオを暗唱して来館者に対応するものとの印象があったため、解説へのためらいが強かった。そのため来館者への対応の多様さと解説の創意工夫の楽しさを会得させていくことが、解説勉強会では必要になってきた。勉強会では、観察をとおしてコレクションに目を向けさせ発見に向かわせる方法を習得されること、さらに操作や体験、調べ学習などをとおして学習スタイルを身に付けさせ、分からぬことが生じた場合でも自分で十分対応できるようにすることをねらいとしてきた。

平成5年度の予定は、①マクドナルドの箱の質問作り、②マクドナルドの質問づくりの応用編：歴史展示室にある「首里那霸港図」の屏風を使っての質問づくり－観察に目をむけさせる方法の習得、③「首里那霸港図」の屏風の調べ学習：皆でつくった質問をもとに、今度は自分たちで調べてみる、④竿ばかりの質問づくり、⑤竿ばかりの操作をとおしての調べ学習、⑥南風原文化センターの観察（活動理念／ユニークな展示企画が生まれるプロセス／展示のストーリー構成／教育普及活動／これからの課題）、⑦機織り機の操作をとおしての質問づくり、⑧展示室の織物を調べる、⑨漂着物をとおして学ぶ社会の変遷である。

2. 導入としてのマクドナルドの箱の質問づくり：登録ボランティアの方には、1993年10月5日の解説勉強会で、マクドナルドの箱を使っての質問づくりを試みてもらった。下に挙げる質問は、ボランティアが試みたものだが、さきに紹介したアメリカでのマクドナルドの箱に関する50の質問と比べてみるとおもしろい。

- 1) どんな材料で箱は作られているの？
- 2) なぜそんな形になったの？
- 3) そのまま温めても使えるかな？
- 4) この模様は、何を表わしているのかな？
- 5) 何回でも使えるのかな？
- 6) どうして丸型ではないの？
- 7) 地球にやさしい材料かな？
- 8) なぜこんな材料を選んだの？
- 9) 実際の大きさは、どうなっているの？
- 10) ほかに転用できるかな？
- 11) 前から同じ形だったのか、それとも変わってきたのだろうか？
- 12) 重さは？

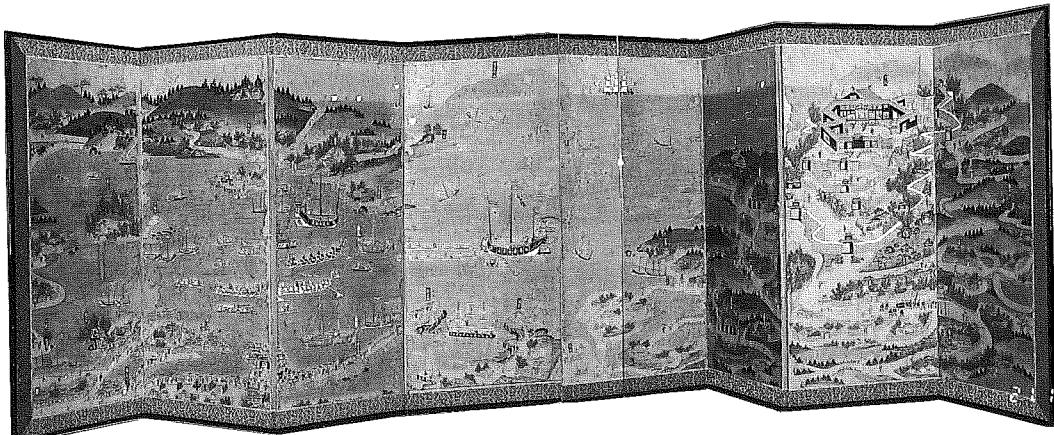
- 13) 容量を計るものとして使えるか？
- 14) マクドナルドの箱は、モスバーガーとどこが違うか？
- 15) 紙と比べてどんな利点があるのか？
- 16)マイナス何度まで持ちこたえられるか？
- 17) レンジでは、何度まで持ちこたえられるか？
- 18) この箱にいれた時、おいしそうに見えるか？
- 19) ふたを閉める穴は便利かどうか？
- 20) 箱の色は、なぜ白にしないのか？
- 21) 箱1個あたりの単価は？
- 22) 店で食べる人にとって便利か？
- 23) なぜ箱には、ラージサイズがないのか？
- 24) いっぺんにたくさんマックを買ったときでも、ひとつずつ箱詰めがよいのか？
- 25) 箱はしっかり閉まるかな？
- 26) 箱の模様は、何を表わしているの？
- 27) この箱は、どこで作っているの？
- 28) この箱は、ハンバーガーの種類に関係なく、どれでも入るのか？
- 29) 組み立て式で、一つの紙で出来ているのか？
- 30) 一箱つくるのに何分かかるか？
- 31) 世界中どこでも同じ箱を使っているのか？
- 32) ハンバーガーの値段は、国によって違うのか？
- 33) ハンバーガーの値段は、国によって違うのか？
- 34) 一年で一番売れる時期は？
- 35) 売り上げの変動は、季節によってあるのか？
- 36) 中身の材料は、どうなっているのか？
- 37) この箱を将来変えるつもりがあるのか？
- 38) 箱に入れて、味の変化はないのか？
- 39) 保温の機能もあるのか？
- 40) ポイ捨てで困ることはないのか？
- 41) この箱にして売れるようになったということはあるのか？
- 42) どういう年齢が、ハンバーガーを好むか？
- 43) 一日で売れる時間帯は？

この質問をアメリカのものと比べて見ると、その内容が具体的でわかりやすく、さらに質問を作っていくなかで、関心が箱のみならず箱の中身の方や経営戦略的な方向にまで広

がり、発見へと向かっていることが分かってくる。自分たちで作った質問を出し合うなかで、自分の見落としていたところに気付き、広い観点から新たに調べてみようという発見意欲が出てきている。

3. 「首里那霸港図」の屏風の質問づくり：マクドナルドの箱の質問づくりの応用編

マクドナルドの箱の質問づくりをとおして、一つの博物館資料をとおしてその背後にあら多くのことを学ぶ方法が分かってきたので、11月10日の解説勉強会では歴史展示室にある首里那霸港図の屏風を使って質問づくりに挑戦してもらった。いわばマクドナルドの応用編ということになる。ここでのもう一つのねらいは、こまかく観察する力を持つことである。なぜなら子供たちが見学にきたとき、こまかく観察する力があれば、解説の手法とあいまって、単なる知識注入的な解説に終わらせらず発見させる方向に子供たちを向かわせることができるようになるからである。



沖縄県立博物館所蔵「首里、那霸港図」
(Folding Screen, related to bird's view of Shuri and Naha area)

1. なぜ琉球で大名列らしきものが出てくるのか？
2. 首里城ではなく中山城と書いてあるが、なぜだろう？
3. 首里城の歓会門の前に獅子らしきものが向かいあっているが、ほんとにあったのだろうか、また向きは正しいのだろうか？
4. 社蘭という名前は、今のどこにあたるのか？
5. 海は、現在の松川あたりまで入り込んでいたのだろうか？
6. 首里城内の広さや標高は、どうなっているのだろう？
7. 外国の船らしきものに白、青、赤の三色旗があるが、どこの船だろう？
8. 描かれている船は、何種類あるのかな？
9. 船に乗っている人の服装は、どんなかっこうをしているの？

10. 那覇の海のむこうに描かれている垣花は、島だったのかな？
11. ハーリーの服の色が、白、黒、水色だが、正しいか？
12. Oの中に十とかいた旗があるが、何を表しているのかな？
13. 屋根つきの船は、何に使われていたのかな？
14. 地にいる人達の服装には、違いがあるのかな？
15. 沖の寺とかいてあるのは、今もあるのかな？
16. 三重城とかかないで新重城と書いているが、どちらが正しいか？
17. 白っぽい斜めの線が海の近くまでできているが、何だろう？
18. 港で傘をさしている人が多いが、その当時傘の使用は広まっていたのだろうか？
19. 和船が、なぜ沖縄にあったのだろう？
20. 動物で描かれているのは牛だけだが、馬などのほかの動物が描かれていないのには何か理由があったのだろうか？
21. 山に描かれている樹木から、屏風を描いたときの季節が分かるだろうか？

ボランティアの方が次々と質問を出し合っていくなかで、さらに新しい疑問も生じてきた。“那覇の港にはハーリーの船や黒船、進貢船、薩摩の船、山原船などが同時に描かれているが、こんなことが現実に起こり得たのだろうか？”という疑問であり、その疑問から派生してさらに“もしこういうことが現実に起こり得なかつたら、この屏風を描いた人は、この屏風で何を表したかったのかなあ”という疑問が出てきている。

いったん疑問が明らかになってくると、ボランティアの調べる意欲は高まり、発見へとむかっていく。このときに調べ方の方法を学芸員から指導していったので、ボランティアは学習スタイルが次第に分かり、解説学習の見通しが立てられるようになってきている。^(註14)

単なる知識注入に終わらせらず、一つのコレクションを対象にした質問づくりの方法を学ばせ、さらに調べ学習のスタイルを身につけさせれば、ボランティアが自分自身も磨きながら、子供たちを発見に導く喜びを体得できるようになると確信している。

4. これからの課題：インタープリテイションといわれる活動の中で、ボランティアの解説にのみ絞って述べてきたが、これからもっと検討しなければいけない課題もある。

一つのコレクションについて多くの質問づくりを試みたが、来館者に投げかける質問は、この中から精選し、さらにその順序や構成だけを工夫していかなければならないであろう。それができるようになったとき、ボランティアは、ほんとの意味で博物館活動の共働者として独り立ちできることになると思われる。



ボランティアによる首里、那覇港図の解説
(Volunteer Guide on bird's view of Shuri and Naha area)

[脚注]

注（1）シンポジウム「新しい世紀を目指す博物館」『博物館研究』No.294号

注（2）FREEMAN TILDEN, INTERPRETING OUR HERITAGE, NATIONAL PARK SERVICE, at 8P (1957)

注（3）EDWARD P. ALEXANDER, MUSEUMS IN MOTION, AASLH PRESS, at 195~196p (1979)

注（4）EDWARD P. ALEXANDER, Supra note 3 at 196~210P

注（5）「沖縄県立博物館年報」No.26、1993年、41P

注（6）EDWARD P. ALEXANDER, Supra note 3, at 215P

注（7）EDWARD P. ALEXANDER, Supra note 3, at 215P

注（8）ALISON L. GRINDER and E. SUE McCOY, The GOOD GUIDE, IRONWOOD PUBLISHING, at 12p (1985)

注（9）EDWARD P. ALEXANDER, Supra note 3, 227P

注（10）BARBARA FLEISHER ZUCKER, CHILDREN'S MUSEUMS, ZOOS AND DISCOVERY ROOMS, GREENWOOD PRESS (1987) に出てくる子供博物館、ディスカバリー・ルームの設置の数を1990年代、1980年代、1970年代、1960年代、1950年代、1940年代、1930年代、1920年代、1900年代、1800年代ごとに集計していくと、子供博物館は1970年代に、ディスカバリー・ルームは1980年代に急増してくるのが分かる。

注 (11) ALISON L. GRINDER AND E. SUE McCOY, Supra note 8 , at 57P

注 (12) JOURNAL OF EDUCATION, Number 4 , Volume 7

注 (13) STAFF ORIENTATION BOOK, at 21P

この資料は、国立アメリカ歴史博物館で採用された新しい職員や研修生のため
に準備されている内部資料だが、発行年度の記載はない。

注 (14) 質問づくり、調べ学習というパターンは、その後の“竿ばかり”の解説勉強会
でも継続して進めている。

宜野湾市伊佐・大山 宇地泊周辺地域の鳥類と哺乳類

嵩 原 建 二

(沖縄県立博物館)

The Birds and Mammals of the Isa, Oyama and Uchidomari, Ginowan city, in the Central Part of Okinawa-jima, Southwestern Islands of Japan.

Kenji TAKEHARA

(Okinawa Prefectural Museum)

Abstract : The birds and mammals were surveyed from 1991 to 1994 in Isa, Oyama and Uchidomari of Ginowan city in the central part of Okinawa-jima. 95 species of birds and 4 species of mammals were recorded in these areas.

The above-mentioned birds were classified into 4 types by their life styles and their distribution. They are resident, 22 species; summer visitor, 4 species; winter visitor and transient 67 species; and accidental, 2 species.

Especially, the Japanese house bat, *pipistrellus abramus*, was rediscovered in Okinawa-jima after some ten years.

はじめに

沖縄本島中部に位置する宜野湾市の西海岸に面した大山から宇地泊にかけての地域は、豊富なわき水を利用した田イモ（ミズイモ）栽培が盛んで、県内でも有数の一大産地となっている。このためこの地域一帯は湿地帯が広がり、放置された農耕地や未利用地にはヒメガマ、セイコノヨシなどの湿地性の植物も多く見られ、その周辺には水辺を利用する野鳥の生息も数多い。

本地域における鳥類記録としては、沖縄野鳥研究会（1986, 1993）によってマガン、ヘラシギ、アカツクシガモ、オカヨシガモ、ウミアイサ、シマアジなど15種の鳥類が写真

撮影されている。しかしながら、鳥類の記録としては断片的で、まとまった形での鳥類報告はみあたらない。また、本地域に生息する哺乳類についても、その調査報告は乏しいようと思える。

筆者はこの田イモ畑やその周辺地域の鳥類相を明らかにし、環境保全を検討する基礎資料や自然観察に必要な資料を得るために、本地域の鳥類を中心に調査を実施した。また、鳥類調査と並行して本地域に生息する哺乳類についても資料収集につとめ、若干の知見を得たので報告する。

本報告が本地域の鳥相や哺乳類相を知る手がかりになり、また隣接する小中学校等における野外観察や環境教育の資料として、あるいは本地域の環境保全を検討する基礎的な資料として活用されることになれば幸いである。

なお、本報告をまとめることに際し、沖縄国際大学の宮城邦治氏、美里高校の丸山勝彦氏に有益な助言をいただいた。また、貴重な資料を提供していただいた沖縄野鳥研究会の比嘉邦昭氏、大城亀信氏の両氏、宜野湾市役所農林課に対し、厚く感謝申し上げる。

調査地及び調査方法

調査地の範囲は、Fig.1に示したように宜野湾市側の国道58号線から西側の海岸線に広がる伊佐・大山・真志喜・宇地泊地域及びその周辺地域である。

調査地形は普天間飛行場の西側に広がる琉球石灰岩がけずられてできた海岸段丘から、海岸に向かって緩やかに傾斜した地形をなしている。この地域に住宅地や農耕地が形成されている。

地質は概ね琉球石灰岩やこれが風化した島尻マージであるが、海岸近くでは砂質及び粘土質の湿地土壤が見られる。伊佐からコンベンションホールに至る宜野湾バイパス道路から西側にあたる地域は埋め立て地であり、海底から採取した砂質コーラルが敷き詰められている。段丘斜面には18カ所の湧水が認められ、集落の重要な水資源となったことが考えられる。

本地域では戦前は主としてサトウキビや稻が栽培作物の中心であったと言われるが、戦後は豊富な湧き水を利用した田イモ栽培が中心となってきて、現在では県内でも有数の特産地のひとつとなっている（Photo. 1, 2）。

調査地の環境としては、大山及び宇地泊地域は農耕地としての田イモ畑やヒメガマ、ツルヨシ、セイコノヨシ、フトイ、パラグラスなどの生い茂る草原化した休耕地がある。大山の田イモ畑に隣接する宜野湾バイパス道路沿いにはヨシの生える水路がある。この水路沿いにはアダン、イボタクサギなどかつての海岸林が残存的に残り、市内唯一のメヒルギ

が10数本認められる。

宇地泊地域には一部に自然の海岸線が残り、干潮時にはリーフが出現する遠浅の海岸となっているが、後背地は住宅地が主体で、一部の空き地にススキ、パラグラス等の草原や墓地がある。

伊佐及び真志喜地域はほとんどが住宅地であるが、海岸線近くの大部分は埋立後に建設された工場群、体育館と海浜公園、野球場、人工ビーチ、コンベンションホールなどの建造物で占められている。しかし、住宅地の一部には空き地があり、そこにはススキ、ツルヨシ、ヒメアブラススキ、パラグラス、タチアワユキセンダングサ、ギンネムなどが密生する環境もみられる。

調査の重点地域として、特に総面積 20.09ha（農家申告面積）におよぶ田イモ畑を中心 に鳥類の観察を行った。その場合大山地域のミズイモ畑は車道がないため、県道沿いの水路や田イモ畑の中央を南北に縦断する距離約 1km のあぜ道を歩きながら、片側 100m（両側 200m）で目撃される野鳥を記録するラインセンサス法で調査は実施した。

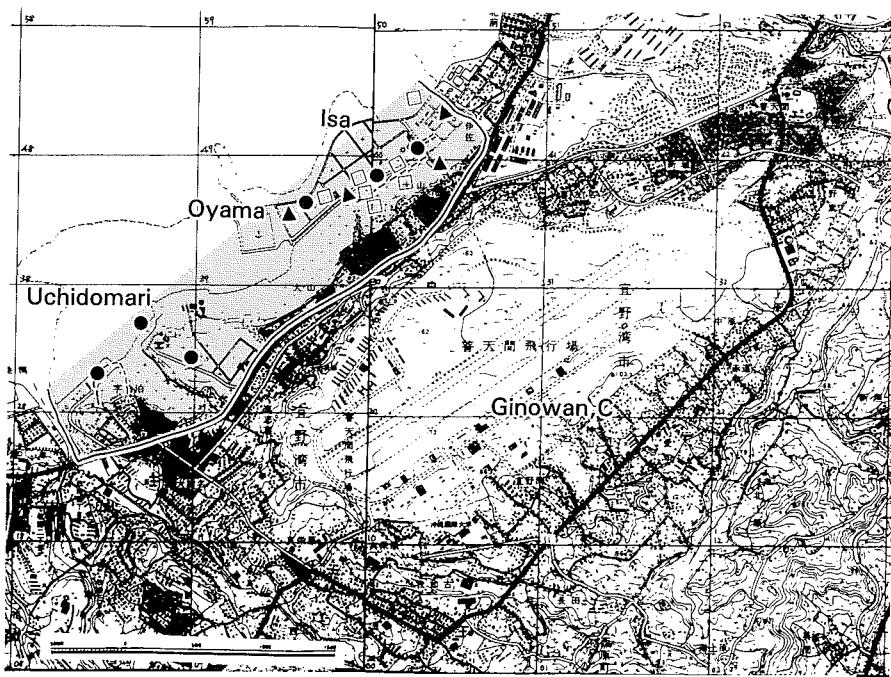


Fig.1. Study Area in Isa, Oyama and Uchidomari, Ginowan city.

〔Okinawa Prefectural Board of Education (1986) modified〕

Legend:

- Study area
- Study route of birds
- (●) Observing point of birds
- (△) Observing point of the flying fox (fruit bats)
- (□) Observing point of the Japanese house bats

一方、宇地泊地域には一部車道（距離0.5km）があるため、車上からのラインセンサスを中心に行った。この場合は車をブラインドかわりにすることができる、野鳥に警戒されることはなく鳥類調査をすすめることができるという利点がある。

鳥類調査は別に天然記念物調査用メッシュ図（沖縄県教育委員会作成）による定点調査も実施した。調査メッシュは調査地北部から392736-40（伊佐）、392736-30（大山）、392735-39（海浜公園）、392735-29（真志喜）、392735-28（宇地泊）の5メッシュである。

調査方法は、同一メッシュ内（1.25km×0.875km）での30分間以上の定点調査で目撃される鳥類を記録する方法で行った。

なお、鳥類調査資料の一部には、筆者自身が過去に本地域で観察記録した未発表の鳥類資料も活用した。

Phot.1, 2. The surroundings of study area in Taro-root fields (Oyama and Uchidomari.)



Photo.1 大山 (Oyama area)



Photo.2 宇地泊 (Uchidomari area)

哺乳類調査は鳥類調査と並行して実施し、同様な調査範囲及び方法によって、目撃される哺乳類を記録した。哺乳類については夜行性の種が主体であったため、大山地域では夜間調査も合わせて実施した。なお小型コウモリ類を同定するため、超音波を可聴音域に変換するサミット社製のバット・ディテクター（MINI-2 BAT DETECTOR）を使用した。

調査期間は、鳥類及び哺乳類のラインセンサス及び鳥類定点メッシュ調査とも1991年12月から1994年の2月までの延べ4年間で、調査期日は不定期に50回実施した（Table 1）。夜間調査は1991年9月、1992年9月、10月、12月と1993年9月に延べ9回実施した。

なお、鳥類目録作成にあたっては、その学名や順序について日本鳥学会（1974）に準じた。

Table 1. The outline of examination

Date	Time	weather	study area	Remarks
91/ 9/22	12:53-13:55	晴	大山	
91/ 9/23	18:45-21:00	晴	大山	夜間調査
91/11/ 9	12:05-12:50	晴	大山・伊佐	
91/12/ 1	- - - - -	晴	"	
91/12/ 3	13:00-13:30	晴	大山	
91/12/ 3	11:00-12:30	晴	"	
92/ 5/10	- - - - -	曇	"	
92/ 9/ 4	6:30- 6:50	曇	宇地泊	
92/ 9/ 8	- - - - -	晴	大山	
92/ 9/20	22:30-23:00	曇	大山	夜間調査
92/ 9/21	19:30-20:30	曇	大山	夜間調査
92/ 9/22	12:00-13:00	晴	大山	
92/ 9/23	18:45-20:45	晴	大山	夜間調査
92/ 9/24	5:35- 6:00	晴	大山	
92/ 9/27	18:49-19:00	晴	大山	夜間調査
92/10/ 1	18:00-19:00	晴	大山	"
92/10/ 4	9:00-10:00	晴	"	
92/10/ 7	9:30- 9:50	晴	"	
92/10/ 8	20:30-21:15	曇	大山	夜間調査
92/10/23	- - - - -	晴	"	
92/10/26	- - - - -	晴	"	
92/11/16	17:00-17:30	曇	大山	
92/11/19	10:00-12:05	晴	大山	
92/12/ 2	22:00-23:30	晴	"	夜間調査
93/ 1/ 6	- - - - -	晴	市民体育館	
93/ 4/ 7	7:50- 8:00	曇	伊佐	
93/ 4/12	7:50- 8:00	曇	伊佐・大山	
93/ 6/ 1	- - - - -	雨	宇地泊	
93/ 9/ 4	20:30-21:00	晴	大山	夜間調査
93/10/31	12:30-12:45	晴	宇地泊	

Date	Time	weather	study area	Remarks
93/10/31	7:30- 8:30	晴	大山	
93/11/14	6:30-12:00	晴	宇地泊	
93/11/29	- - - - -	晴	伊佐	
93/12/ 2	15:00-15:15	曇	"	
93/12/11	6:50- 7:43	曇	伊佐・大山	
93/12/12	9:44-10:00	晴	宇地泊	
93/12/12	11:00-12:00	晴	海浜公園	
93/12/18	8:17- 8:28	曇	伊佐	
93/12/18	8:28- 8:55	曇	大山	
93/12/19	13:00-13:20	小雨	宇地泊	
93/12/19	14:00-14:30	小雨	宇地泊	
93/12/25	10:55-11:57	晴	伊佐・大山	
93/12/28	15:57-16:07	曇	宇地泊	
94/ 1/ 7	17:45-18:15	曇	宇地泊	
94/ 1/10	14:00-14:30	晴	宇地泊	
94/ 1/15	16:35-17:00	晴	大山	
94/ 1/16	17:30-18:10	曇	宇地泊	
94/ 1/22	14:45-15:15	曇	真志喜	

延べ計50回 延べ大山30回、伊佐6回、宇地泊11回、その他3回

調査の結果と考察

(1) 鳥類調査の結果と考察

本調査で目撃された鳥類は85種であった。これに本地域から沖縄野鳥研究会（1986, 1993）によってすでに報告されている記録や未発表の資料などを加えてまとめてみると、「鳥類目録」に示したように10目28科（3亜科を含む）95種の鳥類（野生化した飼い鳥も含む）が記録されたことになる。その内訳は留鳥21種、夏鳥4種、旅鳥及び冬鳥68種、迷鳥2種であった。したがって、確認された鳥類の大部分が渡り鳥であることがわかる。また、出現した目についてみてみるとチドリ目が31種、スズメ目が24種、コウノトリ目10種、ガンカモ目が11種などとなり、出現した野鳥の大半がチドリ目やスズメ目で占められている。沖縄で確認されるチドリ目はチドリ科、シギ科、セイタカシギ科、タマシギ科、ヒレアシシギ科、レンカク科などを含み、その大部分が水辺を利用する旅鳥や冬鳥などの渡り鳥である。また、コウノトリ目のサギ科7種やガンカモ目のガンカモ科11種な

ども同様な渡り鳥が主体である。したがって、本地域はこうした渡り鳥の重要な渡来地（一部越冬地）となっており、さらに南に渡る体力を回復する中継地の役目を負っていると考えられる。

また、本地域で確認された留鳥は前述したように22種あったが、その中で繁殖が確認された種は、亜成鳥が目撃されたセッカ、ヒクイナ、アミハラ、バンの4種であった。これら以外では、ふつうに生息するスズメ、リュウキュウツバメ、キジバト、ヒヨドリ、シロガシラ、メジロ、リュウキュウヨシゴイ、シロハラクイナなど8種については、個体数や観察機会が多いことから本地域で繁殖している可能性が高い。

次に調査地別に出現した鳥類をみてみると、伊佐地域ではヒメアマツバメ、オオヨシキリ、サンコウチョウ、リュウキュウヨシゴイなど22種、大山の田イモ畑（16.87ha）周辺ではカワセミ、エリマキシギ、ムラサキサギ、ヒシクイなど49種、宇地泊の田イモ畑（3.22ha）周辺ではオグロシギ、マガン、オオハシシギ、セイタカシギなど64種であった。3地域の中では大山や宇地泊におけるが確認数が多い。特に宇地泊地域は調査環境として他の地域にはない自然の砂浜海岸が残り、干潮時にはリーフで餌をとることができるために、野鳥が集まることにより、その確認数が多くなっているものと思われる。しかも調査範囲を田イモ地域で比べれば、大山地域の約19%と小面積であり、また車の乗り入れができることによって、鳥類調査が容易にできることにも大きな要因があろう。

さらにメッシュ・コード別に5地域を調査した結果についてみてみると、その鳥類の出現についてはTable 2に示したように、大山における出現種数が18種と多く、宇地泊では10種、海浜公園と伊佐地域で9種、真志喜地域で4種の出現が見られた。したがって、大山地域における出現種数が多い傾向がある。これは環境として田イモ畑、アシの生えた水路、ヒメガマの茂る休耕地など多様な自然環境があることによるものであろう。

伊佐や真志喜などの住宅地周辺で出現した種は、スズメ、リュウキュウツバメ、アミハラ、ウグイス、イソヒヨドリ、セッカなどの留鳥が主体で種類数も少ない。やはり、環境として、緑地面積の乏しい住宅地が主体であることが、このことの大きな要因になっていると考えられる。しかしながら、これらの地域でも草原性のセッカが確認されている。ことは、一部に空き地があり、パラグラスやチガヤなどの草原化した環境があることによるものであると考えられる。

ラインセンサスや定点メッシュ調査結果により（Table 2）、大山や宇地泊の田イモ畑においては、市街地近くにありながら野鳥の生息する場所として貴重な地域となっていることが考えられる。もちろん、ここには野鳥以外の生物も数多く生息している。したがって、本地域の土地利用形態を維持していくことは、こうした野生生物の生息地の確保につながると同時に、自然観察や環境教育の場として活用できる場所にもなる。本地域では今後そ

Table 2, Study result by using a mesh map

メッシュコード	調査地名 環境	期日 調査時間	天気	出現種数	出 現 種 (数字は個体数)
392736-39	海浜公園 公園 運動場	1993/12/12 11:00-12:00	晴	9	スズメ3、キセキレイ1、シロガシラ3、メジロ4、ムナグロ1、リュウキュウツバメ1、ウグイス1、キジバト1、イソヒヨドリ1
392736-28	宇地泊 海岸 草原 住宅地	1993/12/19 14:00-14:30	小雨	10	キジバト1、スズメ10、リュウキュウツバメ3、キョウウジョンギ9、ハクセキレイ2、ムナグロ3、シロチドリ4、イソシギ1、キセキレイ2、シロガシラ1
392736-40	伊佐 住宅地 小河川 公園	1993/12/25 10:55-11:25	晴	9	シロガシラ1、ヒヨドリ3、リュウキュウツバメ2、スズメ7、セッカ1、ウグイス1、キセキレイ1、メジロ1、イソヒヨドリ1
392736-30	大山 田イモ畑 水路 道路	1993/12/25 11:27-11:57	晴	18	リュウキュウツバメ1、シロガシラ4、スズメ6、メジロ1、チドリ4、ムナグロ7、ヒヨドリ2、カワセミ1、セッカ2、サシバ1、キセキレイ1、タカブシギ1、ウグイス1、キジバト1、チュウサギ1、ハクセキレイ1、アミハラ1、イソヒヨドリ1
392736-29	真志喜 住宅地 公園	1993/1/22 14:45-15:15	曇	4	スズメ2、リュウキュウツバメ1、ヒヨドリ2、セッカ2

のことに留意し、環境保全に十分注意を払いながら活用を図ることが望まれる。

本地域で確認された鳥類の中で、記録的に興味深いと思われるいくつかの種類について、以下に述べる。

1, カワセミ *Alcedo atthis bengalensis* (Photo. 3)

カワセミ類では、カワセミの1種だけが確認された。本種は1991年12月3日と1993年12月25日、1994年1月15日の3回大山タイモ畑沿いの水路で採餌している各1個体が目撃された。1羽だけの確認であるので、番を形成して本地域で繁殖・定着しているかどうかについては不明である。河川の汚濁が進行する市街地では、すでに姿を消してしまったこの鳥が生息していることは、餌となる小魚がすめる水のきれいな河川があることの証明であり、本地域は意外に自然が保たれていることがわかる。しかしながら、近年川の汚れに強いグッピーやテラピアなどの移入された魚類の繁殖・分布にともない市街地へ再定着が各地で報告されている。したがって、本地域でこうしたことが生じている可能性もあるが、資料が乏しく詳細に検討することはできなかった。

2, ムラサキサギ *Ardea purpurea manilensis* (Photo. 4)

サギ類はダイサギやゴイサギなど10種確認されたが、ここでは記録的に興味あるムラ

サキサギについて述べる。

本種は1992年11月9日に大山田イモ畑の中にある休耕地で採餌している1個体を目撃した。県内では八重山諸島においてはふつうに生息する留鳥であるが、それ以外ではまれに冬場に渡来してくる漂鳥とされているので、本地域でもそうした個体が目撃されたのであろう。

3, ガンカモ類

本地域で確認されたガンカモ類は、過去にアカツクシガモ、オカヨシガモ、シマアジ、ウミアイサ、マガソ、ヒシクイなど5種が渡来している。しかし、調査期間に確認したガンカモ類はヒドリガモとハシビロガモ、シマアジ、カルガモ、オナガガモ、コガモの6種であり、前述したようにガンカモ類は合計11種あった。この中でオカヨシガモ、ウミアイサなどの最近の記録はない。このことは本地域は以前には自然海岸があり、干潮時にリーフが出現して、ここで休息及び餌を探るガンカモ類が見られたが、現在海岸線の大部分が埋め立てられ、また護岸やマリーナ等の建設によって、こうした場所が喪失していることと関連があろう。

ここでは記録的に興味深いと思われる3種について述べる。

(1) アカツクシガモ *Tadorna ferruginea*

1986年1月に宇地泊の田イモ畑の中にある休耕地で採餌している1個体を目撃した。本種は日本版レッドデータブック（環境庁、1991）に希少種として上げられている貴重種で、沖縄にはまれに冬鳥として渡来する。最近の観察記録は金武町水田で1羽の例（沖縄野鳥研究会、1993）や名護市の我部祖河で3羽の例がある（嵩原、1992）。

(2) マガソ *Anser albifrons frontalis*

1992年2月に宇地泊の田イモ畑の中にある休耕地で、採餌している1個体が目撃され、写真撮影されている（沖縄野鳥研究会、1986）。県内ではまれに渡来する迷鳥で、八重山諸島の石垣島（八重山野鳥の会、1983）や宮古島（1981年1月14日）、糸満市（沖縄野鳥研究会、1993）などで記録がある。国指定の天然記念物である。

(3) ヒシクイ *Anser fabalis serrirostris*

1992年11月24日に大山田イモ畑の中にある休耕地で採餌している1個体を目撃した。同個体は、3日ほど滞在したが、農地の枯れ草を燃やす煙に驚き飛去した。

大型のガンカモ類で、沖縄にはまれな冬鳥として渡来し、県内各地で記録がある。

4, シギ類

本地域ではオグロシギ、オオハシシギ、ヘラシギなど13種のシギ類が確認された。ここでは記録的に興味深いと思われる以下の4種について述べる。

(1) セイタカシギ *Himantopus himantopus himantopus* (Photo. 5)

1992年11月に宇地泊の田イモ畑の中にある休耕地で、採餌している4個体を目撃した。県内ではまれな旅鳥及び冬鳥として渡来し、県内各地で記録がある。これまで沖縄本島では毎年小数が観察され、個体数も多くなかったが、1993年10月から1994年1月にかけては東風平町の報得川で30羽以上の群れが観察された。

(2) エリマキシギ *Philomachus pugnax* (Photo. 6)

1992年11月16日に宇地泊で、1991年11月16日に大山で1羽目撃した。県内にはまれな旅鳥として渡来するが、宇地泊ではしばしば渡りの時に立ち寄るので、観察される機会が多い。

(3) オグロシギ *Limosa limosa melanurooides* (Photo. 7)

1986年1月に宇地泊の田イモ畑や休耕田で採餌している1個体（夏羽）を目撃した。本種はまれな旅鳥として県内各地に渡来する。記録的には1981年6月に宮古島空港（久貝勝盛氏私信）や漫湖干潟と糸満市西崎（沖縄野鳥研究会、1993）、名護市屋我地内海干潟（1993年9月）などで観察されている。

(4) オオハシシギ *Limnodromus scolopaceus* (Photo. 8)

1986年1月に宇地泊の田イモ畑の中にある休耕地で採餌している1個体を目撃した。県内ではまれな冬鳥として渡来するが数は少なく、この記録以降県内での最近の観察はみられない。

5, ヒタキ類

森林地域を欠くので、ヒタキ類の確認は少なかったが、ここでは2種について述べる。

(1) オオヨシキリ *Acrocephalus arundinaceus orientalis* (Photo. 9)

1992年10月26日に伊佐の住宅地に囲まれたパラグラスが生い茂る空き地で1羽が目撃された。県内ではまれな冬鳥で、主にアシの原にすむ。伊佐で目撃された個体は移動中の個体と思われ、越冬することはなかった。

(2) ノゴマ *Erithacus calliope*

1993年2月3日に大山の田イモ畑に隣接する草地で鳴き声が聞かれた。県内では冬鳥として渡来するが、数は少ない。

6, アマツバメ *Apus pacificus kurodae* (Photo. 10)

アマツバメ類はアマツバメの1種だけの確認であった。本種は1993年4月12日に伊佐の県道沿いで数羽の群れが目撃された。

(2) 哺乳類調査の結果と考察

本調査では調査の重点を鳥類に置いたため十分な生息調査ができなかった。しかし、調査の結果、オリイオオコウモリ、イエコウモリ、リュウキュウジャコウネズミ、ドブネズ

ミの4種の生息を確認した。これは今後調査をすすめていけば種数がさらに増えることが予想される。以下生息の確認された哺乳類の中で3種の生息状況について述べる。

1, オリイオオコウモリ *Pteropus dasymallus inopinatus*

1992年9月20日と12月2日に伊佐地区にある「なりせ通り（遊歩道）」に植栽されたモモタマナ（コバティシ）を採食している1個体が目撃された。また、1993年8月には海浜公園に植栽されたフクギの果実を採食している個体をしばしば目撃し、同公園内や隣接する児童公園のコバティシの樹下にペリット（食べかす）が確認された（Fig. 1）。したがって、本種は本地域を餌場として利用していると考えられた。

1992年9月21日の日中には、大山にある田イモ畑沿いの電線にぶら下がった1個体が目撲された（Photo.11）。この行動は休息行動と思われるが、本種は通常広葉樹が密生したうす暗い林内で休息するので、道路沿いの電線という場所で休息していることについてはどう解釈してよいか不明な点がある。

本種の休息地やねぐらとしては、隣接する普天間飛行場の西側にあたる琉球石灰岩がけずられてできら段丘状に発達した地域の森林部と考えられる。ここは墓地となっていて、森林地域が南北にベルトにひろがっている地域である。したがって、他に森林地域が見あたらないので、ここを起点に本種の活動が行われていると思われる。。

2, イエコウモリ（アブラコウモリ） *Pipistrellus abramus*

1992年9月20日、21日、23日、27日や10月1日、10月8日、12月2日の夕刻に、大山の田イモ畑や国道沿いの水路、伊佐側の海岸線などで採餌している小型コウモリ類をしばしば目撃した（Fig. 1, Photo.12）。その飛翔が目撃された時間は、9月23日が18時45分、9月27日が18時49分、10月1日が18時40分であった。したがって、日没間もない薄暮の頃から活動を開始していると思われた。なお、9月24日には早朝5時35分頃まで活動していた個体も目撃された。

本種は丸山勝彦氏（私信）によれば、超音波の周波数帯、音色、飛び方などから判断してイエコウモリであろうとしている。また、沖縄本島におけるイエコウモリの報告はここ数十年なく、生息を再確認する貴重な目撃であるとつけ加えている。

大山の田イモ畑では多い日で11頭（1993/9/23）も目撃されたので、田イモ畑や水路沿いなどが、夏場における重要な餌場となっていることが考えられ、これは餌となる飛翔性の小昆虫（ユスリカ類）が発生する田イモ畑や水路、湿地等の存在する環境が生息地や餌場としての良好な条件を備えていると考えられる。

本種は住宅地域の屋根裏などを主な休息地やねぐらにしていること知られている（谷口ら, 1988）。したがって、田イモ畑に隣接する住宅地や工場群などが、本種にとって良好な休息地及びねぐらを提供していると思われる。しかし、休息地やねぐらについては特定

していない。

3, リュウキュウジャコウネズミ *Suncus murinus riukiuanus*

沖縄にすむ数少ない食虫目トガリネズミ科の哺乳類である。本種は夜行正性で、1992年9月21日や1992年10月8日に大山の田イモ畑や国道沿いの水路脇などで日没後に採餌している個体を目撃した。出現した場所はパラグラスやススキの密生した草地であった。

調査の課題

1. 鳥類調査

- (1) 今回の調査は鳥類の目撃記録を中心にまとめたものであり、季節的な鳥類の出現についてはそれを検討する資料が乏しく詳細に言及できなかった。したがって、今後本地域における鳥類の季節的な出現について、さらに調査する必要性がある。
- (2) 今回の調査では95種の鳥類を確認し、暫定的な鳥類目録を作成した。しかし、この目録はわずか4年間の記録であり、さらに調査を継続していくば新たな鳥類の確認記録が増えていくことが予想される。したがって、継続的に調査を実施する必要性がある。

2. 哺乳類調査

- (1) イエコウモリについては、捕獲して計測するなど種の同定をさらに詳細に検討する必要がある。また、本種が本地域をどのように利用しているのかその生態的な行動圏を把握するための生態的な調査を行う必要がある。それには前提条件として個体識別を行うことが重要な課題になる。
- (2) オオコウモリについては、本地域における生息実態を把握するため、行動圏の把握や季節的な食性変化と休息場所の特定などが課題になろう。
- (3) 本地域からは4種の哺乳類が確認されたが、さらに4種以外の哺乳類が生息している可能性がある。したがって、継続的に調査を進めていくことにより、本地域の哺乳類相を明らかにすることができるよう。

〈要約〉

- 1、宜野湾市伊佐・大山・宇地泊地域で1991年から1994年まで鳥類及び哺乳類調査を実施した。
- 2、調査の結果、鳥類ではムラサキサギ、ヒシクイなど7目28科95種、哺乳類ではオリオオコウモリ、イエコウモリなど4科4種を確認した。確認された鳥類の内訳は、留鳥21種、夏鳥4種、旅鳥及び冬鳥68種、迷鳥2種であった。哺乳類の中では、イ

エコウモリの生息確認が沖縄島における数十年ぶりの記録である。

3、本地域は良好な野鳥の生息地や渡来地であり、また数少ない哺乳類やそれ以外の生物の生息地となっている。このことはまた自然観察の場所としても最適な場所である。したがって、現在の土地利用を維持しながら環境保全を図り、有効利用していく必要性を指摘した。

〈参考文献〉

- 沖縄野鳥研究会編. 1986. 沖縄県の野鳥 沖縄野鳥研究会, pp265.
- 沖縄野鳥研究会編. 1993. 改訂沖縄県の野鳥 沖縄出版, pp299.
- 環境庁編. 1991. 日本の絶滅のおそれのある野生生物一レッド データブックー, p93,
環境庁自然保護局野生生物課.
- 宜野湾市建設部都市計画課編. 1991. 宜野湾市水とみどりの基本計画, 宜野湾市, pp162.
- 八重山野鳥の会編. 1983. 八重山地方鳥類目録, 10周年記念誌. 八重山野鳥の会, pp75.
- 嵩原建二. 1992. 最近沖縄で確認された迷鳥, 博友第7号, 沖縄県立博物館友の会, 83-85.
- 谷口勝直・峯岸秀雄・木下あけみ. 1988. アブラコウモリ生態資料, 一川崎市中原区小杉
陣屋町付近における一その(1)密度, 川崎市青少年科学館年報(5): 23-30. 川
崎市青少年科学館.

Plate. 1, Interesting Birds in these areas



Photo. 3, カワセミ (大山)
Alcedo atthis bengalensis



Photo. 4, ムラサキサギ (大山)
Ardea purpurea manilensis



Photo. 5, セイタカシギ (宇地泊)
Himantopus himantopus himantopus

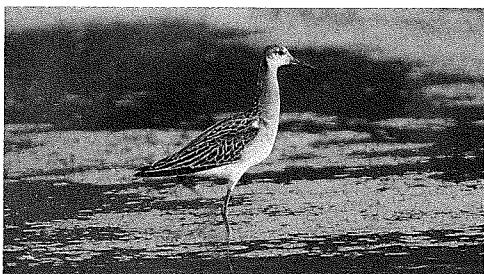


Photo. 6, エリマキンギ (大山)
Philomachus pugnax



Photo. 7, オグロシギ (宇地泊)
Limosa limosa melanuroides



Photo. 8, オオハシシギ (宇地泊)
Limnodromus scolopaceus



Photo. 9, オオヨシキリ (伊佐)
Acrocephalus arundinaceus orientalis

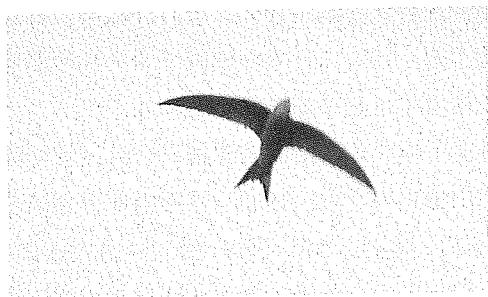


Photo.10, アマツバメ (伊佐)
Apus pacificus Kurodae

Plate. 2, Interesting Mammals in these areas

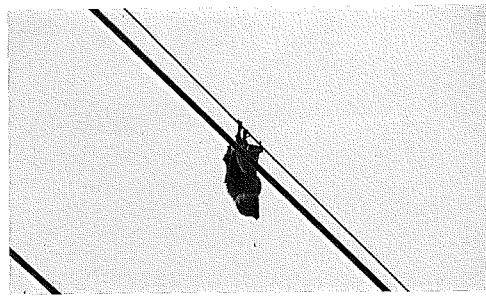


Photo.11, オリイオオコウモリ (大山)
Pteropus dasymallus inopinatus

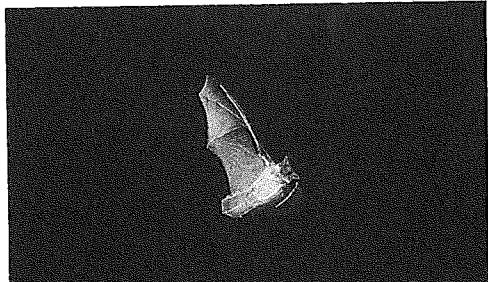


Photo.12, イエコウモリ (大山)
Pipistrellus abramus

伊佐・大山・宇地泊の鳥類目録（暫定）

Check list of birds in Isa, Oyama and Ushidomari.／凡例：順序は種別、確認場所、日付、個体数

コウノトリ目 CICONIIFORMES

サギ科 ARDEIDAE

1. リュウキュウヨシゴイ *Ixobrychus cinnamomeus* (GMELN)

留鳥：アシ原や河川などの湿地で生息する。赤褐色の鳥で、草地にいて外敵が近づくとくちばしを上にのばしてじっとしている習性（擬態）がある。

伊佐 1993/8(1)

大山 1992/4/16(2)

宇地泊1991/12/3(1), 1994/1/7(1)

2. ゴイサギ *Nycticorax nycticorax nycticorax* (LINNAEUS)

旅・冬鳥：県内各地に渡来する。夜に活動し、ガ-、ガ-と一声鳴きながら飛び回る。方言名の「ユーガラサー」はこの鳥。

大山 1992/9/21(1), 1992/4/22(1)

3. ササゴイ *Butorides striatus amurensis* (SCHRENCK)

旅・冬鳥：9月頃から渡来し、河川や田イモ畑などで見られる。背中に筐状の羽がある。

伊佐 1992/4/12(1), 1991/11/9(1)

大山 1992/9/22(1),

宇地泊1993/12/12(1)

4. アマサギ *Bubulcus ibis coromandus* (BODDAERT)

旅鳥：全身白色のサギの仲間。夏羽は頭から首、背中などが薄いだいたい色になる。草原や田イモ畑などで小群で見られる。

大山 1992/4/26(4), 1991/5

5. ダイサギ *Ardea alba modesta* (LINNAEUS)

冬鳥：全身白色になるサギの仲間では最大の種。長い足と首を持ち、河口近くにすむ。

伊佐 1993/12/2(1)

大山 1992/11/9(1)

宇地泊1994/2/11(2)

6. チュウサギ *Egretta intermedia intermedia* (WEGLER)

旅鳥：全身白色になるサギの仲間では中型の種で、くちばしの先端が黒くなる。タイモ畑や草原でみられる。

大山 1992/4/26(4), 1992/4/26(1), 1992/11/9(3)

宇地泊1993/12/12(1)

7. コサギ *Egretta garzetta garzetta* (LINNAEUS)

旅鳥：全身白色になるサギの仲間では小型の種で、足の指が黄色になる。

河川や干潟、田イモ畑で見られる。

大山 1992/4/12(1), 1992/4/16(3)

宇地泊1993/11/4(1)

8. クロサギ *Egretta sacra sacra* (GMELIN)

留鳥：海岸近くにすむサギの仲間。黒色型と白色型の2つのタイプがある。

宇地泊1992/11/16(1)

9. アオサギ *Ardea cinerea jouyi* CLARK

冬鳥：サギの仲間では最大の種。全身グレー色で干潟や河川でくらす。

宇地泊1993.11.12, 1992.10.12 (宮城邦治私信)

10. ムラサキサギ *Ardea pupurea manilensis* MEYEN

留鳥：海岸近くのマングローブ林や水田近くにすむ大型のサギ。八重山地方では留

鳥であるが、それ以外では冬場に漂鳥として渡来する。

大山 1992/11/9(1)

ガンカンモ目 ANSERIFORMES

ガンカモ科 ANATIDAE

11. マガソ *Anser albifrons frontalis* BAIRD

冬鳥：大型のガンカモの仲間。数少ない冬鳥として水田や河口に渡来する。国の天然記念物。

宇地泊、沖縄野鳥研究会 (1986)

12. ヒシクイ *Anser fabalis serrirostris* SWINHOE

冬鳥：大型のガンカモの仲間。数少ない冬鳥として水田や河口などに渡来する。

大山 1992/11/24(1)

13. アカツクシガモ *Tadorna ferruginea* (PALLAS)

冬鳥：中型のガンカモの仲間で、全身赤かっ色。まれな鳥として水田や田イモ畑などに渡来する。

宇地泊1986.1

宇地泊、沖縄野鳥研究会 (1986)

14. カルガモ *Anas poecilorhyncha zonorhyncha* SWINHOE

留鳥及び冬鳥：水田や田イモ畑、河川、ダム湖などでみられる。沖縄には留鳥として生息するものもいるが、冬鳥として渡来する個体が多いと思われる。

宇地泊1994/1/9(3)

15. コガモ *Anas crecca crecca* LINNAEUS

冬鳥：小型のカモの仲間。小群をつくって河口やダム湖などに生息する。数は多い。

宇地泊1992/10(1)

16. オカヨシガモ *Anas strepera strepera* LINNAEUS

冬鳥：中型のカモの仲間。小群をつくって海岸や河口、ダム湖などに生息するが、数は少ない。雄は全身灰色かかる細かな斑紋を持つ。

宇地泊、沖縄野鳥研究会（1993）

17. ヒドリガモ *Anas penelope* LINNAEUS

冬鳥：中型のカモの仲間。ふつうに小群をつくって河口やダム湖などに生息する。雄は額が白くなる。

宇地泊1991/12/3(1), 1993/11/14(4)

18. オナガガモ *Anas acuta acuta* LINNAEUS

冬鳥：中型のカモの仲間。小群をつくって海岸や河口、ダム湖などに生息するが、比較的数が多い。雄は首が白くなり、尾が長い。

宇地泊1994/1/9(3)

19. シマアジ *Anas querquedula* LINNAEUS

冬鳥：小型のカモの仲間。小群をつくって水田、田イモ畑などに生息する。コガモに似るが、眉斑が目立つ。

宇地泊1992/10/2(1), 沖縄野鳥研究会（1986）

20. ハンビロガモ *Anas clypeata* LINNAEUS

冬鳥：中型のカモの仲間。河口干潟やダム湖などに生息するが、数は少ない。くちばしが太くて広い。

大山 1993/10/5(1)

21. ウミアイサ *Mergus serrator* LINNAEUS

冬鳥：中型のガンカモの仲間。まれな冬鳥として河口や海岸などに渡来する。冠羽がければ立つ。

宇地泊、沖縄野鳥研究会（1986）

ワシタカ目 FALCONIFORMES

ワシタカ科 ACCIPITRIDAE

22. ミサゴ *Pandion haliaetus haliaetus* (LINNAEUS)

冬鳥：中型のワシタカの仲間。餌は魚食が主体で、海岸近くやダム湖などに生息する。

宜野湾市民体育館1993/1/10(1)

大山 1993/12/11(1)

23. リュウキュウツミ *Accipitaer gularis iwasakii* MISHIMA

留鳥：小型のワシタカの仲間。沖縄で繁殖する数少ない猛禽類で、森林地域に生息する。

伊佐 1993/11/29(1)

24. サシバ *Butastur indicus* (GMELIN)

旅・冬鳥：中型のワシタカの仲間。秋（寒露）の渡りは良く知られている。農耕地や森林地域などに生息するが、道路脇の電柱や電線にもよくとまる。

大山 1991/11/9(1), 1993/12/18(1)

ハヤブサ科 FALCONIDAE

25. ハヤブサ *Falco pergrinus japonensis* GMELIN

冬鳥：小型のワシタカの仲間。数少ない冬鳥として渡来し、農耕地や草原に生息する。獲物を蹴り落として餌を探る。

宇地泊1994/1/16(1)

26. チョウゲンボウ *Falco tinnunculus interstinctus* HORSFLID?

冬鳥：小型のワシタカの仲間。農耕地や草原に生息し、ホバリングしてエサを採る。

宜野湾市民体育館1993/1/10(1)

伊佐 1993/12/5(1)

宇地泊1993/11/14(1)

ツル目 GRUIFORMES

クイナ科 RALLIDAE

27. リュウキュウヒクイナ *Porzana fusca phaeopyga* STEJNEGER

留鳥：県内各地で生息し、全身赤褐色。数は多いが警戒心が強く、見る機会は少ない。

宇地泊1992/11/16(1) 雌3確認（繁殖）

28. シロハラクイナ *Amaurornis phoenicurus chinensis* (BODDAERT)

留鳥：県内各地で繁殖し、数が多い。草地、農耕地、水田などにすむ。胸から腹にかけてけ白くなる。

大山 1992/4/19(1)

29. バン *Gallinula chloropus indica* BLYTH

留鳥：最も普通に県内各地の水田や湿地、河川などで生息する。方言名「クミラー」。
主に大山や宇地泊の田イモ地域で見られ、雛も確認された。（繁殖）

大山 1992/4/16(4), 1992/9/8(4)

宇地泊1992/11/16(8)

チドリ目 CHRADRIIFOMES

レンカク科 JACANIDAE

30. レンカク *Hydrophasianus chirurgus* (SCOPOLI)

迷鳥：分布は東南アジアやインドで日本ではきわめてまれしか見られない。沖縄では、名護や宮古島、沖縄島北部の金武や喜如嘉などで記録がある。

宇地泊1987/5/26(1)（比嘉邦昭私信）

タマシギ科 ROSTRATULIDAE

31. タマシギ *Rostratula benghalensis benghalensis* (LINNAEUS)

留鳥：中型のシギの仲間で、水田、湿地などに生息する。雄が抱卵・子育てを行い、「一妻多夫」という繁殖生態を持つ。数は少ない。

宇地泊1992/9/4(1)

チドリ科 CHARADRIIDAE

32. コチドリ *Charadrius dubius curonicus* GMELIN

旅鳥及び冬鳥：普通に県内各地の水田、タイモ畑などに渡来し、数が多い。

方言名はチドリ全般をさす「チジュヤー」。目のまわりに黄色のリングができる。

宇地泊1992/11/16(4), 1992/10/4(2)

大山 1993/12/11(12)

33. ハジロコチドリ

旅鳥及び冬鳥：まれに県内各地の水田や田イモ畑などに渡来するが、数は少ない。

宇地泊, 沖縄野鳥研究会 (1986)

34. シロチドリ *Charadrius alexandrinus nihonensis* PEIGNAN

留鳥: 最も普通に県内各地の海岸や草地、水田、湿地などで生息する。沖縄では海岸近くの砂地や埋め立て地などで繁殖する。

宇地泊1992/10/4(1)

大山 1992/11/9(1)

35. メダイチドリ *Charadrius mongloius stegmanni* PORTEHKO

旅鳥: 県内各地の海岸、干潟などに渡来する中型のチドリ。

宇地泊1991/12/3(1)

36. ムナグロ *Pluvialis dominica fulva* (GMELIN)

旅鳥及び冬鳥: 最もふつうに県内各地の草地、水田、田イモ畑などに渡来するが、数は多い。

宇地泊, 沖縄野鳥研究会 (1986)

宇地泊1992/11/16(5)

大山 1992/9/8(8)

37. ダイゼン *Pluvialis Squatarola* (LINNAEUS)

冬鳥: 最もふつうに県内各地の河口干潟や田イモ畑などに渡来するが、数は多い。

宇地泊1991/12/1(1)

38. タゲリ *Vanellus vanellus* (LINNAEUS)

冬鳥: ふつうに県内各地の河口干潟や水田、田イモ畑などに渡来するが、数は少ない。頭の飾り羽（冠羽）がめだつ。

宇地泊, 1992.10.12, 1993.1.5 (宮城邦治私信)

シギ科 SCOLOPACIDAE

39. キョウジョシギ *Arenaria interpres interpres* (LINNAEUS)

旅鳥: 中型のシギの仲間で、河口干潟や海岸などに渡来するが、数は多い。宇地泊の海岸近くで海草をひっくり返して餌を探る小群が目撃された。

宇地泊1993/11/14, 1992/10/4(1)

40. トウネン *Calidris ruficollis* (PALLAS)

冬鳥: 小型のシギの仲間で、ふつうに県内各地の河口干潟や水田、田イモ畑などに渡来するが、数は多い。

宇地泊1993/12/3(3), 1992/11/16(1)

大山 1992/9/22(3)

41. ヒバリシギ *Calidris minutilla subminuta* (MIDDENDORFF)

冬鳥：小型のシギの仲間で、県内各地の河口干潟や水田、田イモ畑などに渡来するが、数は少ない。

宇地泊1992/5/10(3)

宇地泊、沖縄野鳥研究会（1986）

大山 1992/4/26(6), 1992/9/8(1), 1992/11/9(2)

42. オジロトウネン *Calidris temminckii* (LEISLER)

冬鳥：小型のシギの仲間で、県内各地の河口干潟や水田、田イモ畑などに渡来するが、数は少ない。背中の羽は灰色がかる。

宇地泊1992/5/10(1)

宇地泊、沖縄野鳥研究会（1986）

43. ハマシギ *Calidris alpina sakhalina* (VIEILLLOT)

冬鳥旅鳥：中型のシギの仲間で、ふつうに県内各地の海岸、河口干潟や水田、田イモ畑などに渡来する。20羽内外の群れで採餌することが多く、田イモ畑で見られた。

宇地泊、沖縄野鳥研究会（1986）

宇地泊1991/11/16(11), 1993/12/19(17)

大山 1991/11/16(1)

44. エリマキシギ *Philomachus pugnax* (LINNAEUS)

旅鳥：中型のシギの仲間で、河口干潟や水田、田イモ畑などに渡来するが、数は1－2羽と少ない。

宇地泊1992/11/16(1), 1992/11/4(2), 1992/11/7(1)

大山 1992/9/8(1), 1991/11/16(1)

45. ツルシギ *Tringa erythropus* (PALLAS)

旅鳥：中型のシギの仲間で、河口干潟や水田、田イモ畑などに渡来するが、数は少なく、まれな旅鳥である。くちばしや足が長く、スマートなシギ。

宇地泊、沖縄野鳥研究会（1993）

46. アカアシシギ *Tringa totanus eurhinus* (OBERHOLSER)

旅鳥：中型のシギの仲間で、河口干潟や水田などに渡来するが数は少ない。足が黄色味がかる薄いだいだい色をしている。

宇地泊1992/10/4,

47. コアオアシシギ *Tringa stagnatilis* (BECHSTEIN)

旅鳥：中型のシギの仲間で、河口干潟や水田、田イモ畑などに渡来するが、数は少

ない。アオアシシギよりほっそりしていて、くちばしも細くまっすぐ。

宇地泊1992/10/24(1)

48. アオアシシギ *Tringa nebularia* (GUNNERUS)

冬鳥及び旅鳥：中型のシギの仲間で、ふうつに河口干潟や水田、田イモ畑などに渡来するが、数は少ない。足が青みがかり、くちばしがやや上にそる。

宇地泊1992/11/16(4)

大山 1992/9/8(1), 1992/9/22(1), 1992/11/9(1)

49. クサシギ *Tringa ochropus* LINNAEUS

冬鳥及び旅鳥：中型のシギの仲間で、河口干潟や水田、田イモ畑などに渡来するが、数は多い。体色は灰青色で、イソシギにくるがやや大きい。

大山 1992/9/22(1)

50. タカブシギ *Tringa glareola* LINNAEUS

冬鳥及び旅鳥：中型のシギの仲間で、ふつうに河口干潟や水田、田イモ畑などに渡来し、数は多い。

宇地泊1992/11/16(1), 1993/11/14, 1992/10/7(5)

大山 1992/4/16(10), 1992/9/8(2), 1992/9/22(4), 1992/11/9(3)

51. キアシシギ *Tringa brevipes* (VIEILLOT)

旅鳥：中型のシギの仲間で、河口干潟や海岸などに渡来するが、数は多い。

宇地泊1992/5/10(2)

大 山1992/9/22(1)

52. イソシギ *Triga hypoleucus* LINNAEUS

冬鳥及び旅鳥：中型のシギの仲間で、ふつうに河口干潟や水田、田イモ畑などに渡来する。数は多い。脇から肩に入り込むような白い羽が目立つ。

宇地泊1992/11/16(3)

大山 1992/4/16(10), 1992/9/22(1), 1992/11/9(7)

53. チュウシャクシギ *Numenius phaeopus variegatus* (SCOPOLI)

旅鳥：大型のシギの仲間で、河口干潟や海岸などに渡来するが、数は少ない。下にカーブする細長いくちばしを持つ。

宇地泊1993/11/14(1), 1994/2/9(1)

54. タシギ *Gallinago gallinago* (LINNAEUS)

冬鳥及び旅鳥：中型のシギの仲間で、ふつうに河口干潟や水田、湿地などに渡来し、数は多い。細長くまっすぐなくくちばしを持つ。

宇地泊1992/11/16(2), 1993/11/14

大山 1992/4/16(2), 1992/9/8(1), 1992/11/9(2)

55. タシギの一種 *Gallinago sp*

冬鳥及び旅鳥：タシギ同様、河口干潟や水田、湿地などに渡来するジシギ類には、ハリオシギ、チュウジシギなどあるが、それらの種を野外識別することは困難である。ここではそうしたシギ類の一種と思われる種も見られる。

宇地泊1994/1/26(2)

56. ヘラシギ *Eurynorhynchus pygmeus* (LINNAEUS)

旅鳥：小型のシギの仲間で、河口干潟や水田、湿地などに渡来するが、非常にまれ。くちばしがスプーン状になっている。

宇地泊, 沖縄野鳥研究会 (1986)

57. オグロシギ *Limosa limosa melanuroides* GOULD

旅鳥：中型のシギの仲間で、河口干潟や草原などに渡来するが、数は少ない。まっすぐな細長いくちばしを持つ。宇地泊では夏羽の個体が見られた。

宇地泊1984/12/25(1)

58. オオハシシギ *Limnodromus scolopaceus* (SAY)

冬鳥及び旅鳥：中型のシギの仲間で、河口干潟や草原などに渡来するが、数は少ない。

宇地泊, 沖縄野鳥研究会 (1986)

宇地泊, 1986/1(1)

セイタカシギ科 RECURVIROSTRIDAE

59. セイタカシギ *Himantopus himantopus himantopus* (LINNAEUS)

冬鳥及び旅鳥：大型のシギの仲間で、河川、河口干潟、水田、田イモ畑などに渡来するが、数は少ない。背中は黒色で、まっすぐな細長い足とくちばしを持つスマートなシギ。

宇地泊, 1992/11/11(4), 1993/10/31(2)

ヒレアシシギ科 PHALAROPODIDAE

60. アカエリヒレアシシギ *Phalaropus lobatus* (LINNAEUS)

旅鳥：主に海上を通過していくが、内陸の水田の水たまりなどに飛来する個体がし

しばしば目撃される。

宇地泊1993/6/1(1) 若鳥

カモメ科 LARIDAE

61. セグロカモメ *Larus argentatus vegae* PALMEN

冬鳥：大型のカモメの仲間で、海岸線を飛翔しながら餌を採る。まれな冬鳥として渡来するが、幼鳥が多い。

海浜公園人工ビーチ，1993/2/16(1)

62. ウミネコ *Larus crassirostris* VIEILLIOT

冬鳥：大型のカモメの仲間で、海岸、干潟、埋め立て地などにまれに渡来する。

宇地泊，1992/10/4(1)

63. オオアジサシ *Sterna bergii cristata* STEPHENS

迷鳥：まれに沖縄近海でみられる大型のアジサシ。沿岸部海岸線に近づく時、しばしば目撃される。

宇地泊，1987/12/19(1)（大城亀信私信）

64. ベニアジサシ *Sterna dougallii bangsi* MATHEWS

夏鳥：海岸や岩礁でみられるアジサシの仲間で、沖縄には夏場渡来し、岩礁で繁殖する。くちばしと足が赤味を帯びる。

海浜公園人工ビーチ，1993/8(1)

65. エリグロアジサシ *Sterna sumatrana sumatrana* RAFFLES

夏鳥：海岸や岩礁でみられるアジサシの仲間で、沖縄には夏場渡来し、海岸近くの岩礁で繁殖する。くちばしと足は黒く、えりも黒い。

海浜公園人工ビーチ，1993/8(1)

66. クロハラアジサシ *Sterna hybrida javanica*

旅鳥：海岸線や河川、ダム湖、水田などでみられるアジサシの仲間。数は少なく、亞成鳥が観察される機会が多い。海浜公園の池で若鳥が目撃された。

海浜公園 1992/9/22(1)

ハト目 COLUMBIFORMES

ハト科 COLUMBIDAE

67. リュキュウキジバト *Streptopelia orientalis stimpsoni* (STEJNEGER)

留鳥：住宅地や農耕地、森林地域などにすむ。最も普通に見られる。

宇地泊1992/10/4(1)，1994/1/9(1)

大山 1992/4/16(4), 1992/9/8(1), 1992/11/9(2)
伊佐 1994/2/6(2)

ホトトギス目 CUCULIFORMES

ホトトギス科 CUCULIDAE

68. ホトトギス *Cuculus poliocephalus poliocephalus* LATHAM

夏鳥：初夏に渡来するが、沖縄で繁殖しているかどうかについては不明。

他の鳥に卵を預け、孵化・育雛させる習性（託卵）がある。伊佐で夜間鳴き声を聞く。

伊佐 1992/5(1),

アマツバメ目 APODIFORMES

アマツバメ科 APODIDAE

69. アマツバメ *Apus pacificus kuyodae* (Domaniewski)

旅鳥：本地域には初夏に渡来すると思われ、伊佐の道路沿いで群れで確認された。

伊佐 1993/4/7(7), 1993/4/12(10+)

ブッポウソウ目 CORACTIFORMES

カワセミ科 ALCEDINIDAE

70. カワセミ *Alcedo atthis bengalensis* GMELIN

留鳥：県内各地の河川、沼地等で生息する。河川の汚濁が進行する市街地の河川で姿を見ることは少ない。全身瑠璃色。

大山 1991/12/3(1), 1993/12/25(1), 1994/1/15(1)

スズメ目 PASSERIFORMES

ツバメ科 HIRUNDINIDAE

71. ショウドウツバメ *Riparia riparia ijimae* (LONNBERG)

旅鳥：北海道で繁殖し、沖縄には旅鳥として、通過する。

大山 1992/11/9(3)

72. ツバメ *Hirundo rustica gutturalis* SCOPOLI

旅鳥：本土では夏鳥であるが、沖縄では初夏と秋口に渡来する旅鳥。

大山 1992/9/8(10)

宇地泊1992/10/4(1)

伊佐 1993/4/7(7)

73. リュウキュウツバメ *Hirundo tahitica namiyei* (STEJNEGER)

留鳥：分布は奄美大島以南の琉球列島から東南アジアで、県内ではふつうに繁殖分布する。ツバメに比べ腹の色が白くなく、汚れたように見える。

伊佐 1993/11/29(1)

宇地泊1992/11/16(5)

大山 1993/12/25(1)

セキレイ科 MOTACILLIDAE

74. マミジロツメナガセキレイ *Motacilla flava simillima* HARTERT

旅鳥及び冬鳥：県内各地の河川、水田、湿地などで生息する。全身グレー色で細身のセキレイの仲間。

大山 1992/9/22(1)

75. キセキレイ *Motacilla cinerea robusta* (BREHM)

旅鳥及び冬鳥：県内各地の河川、水田、湿地などで生息する。尾羽が長く、全身黄色味がかり、ほっそりしていてスマート。

宇地泊1991/11/16(1)

大山 1992/4/16(2)

伊佐 1993/12/25(1)

77. ハクセキレイ *Motacilla alba lugens* GLOGER

冬鳥：県内各地の河川、水田、湿地、畜舎近くなどで生息する。成鳥は尾羽が長く、体色は、白と黒灰色でスマート。若鳥は全身グレー。

宇地泊、沖縄野鳥研究会 (1986), 1994/2/11(1)

大山 1991/11/9(6)

伊佐 1994/1/5(1)

78. ムネアカタヒバリ *Anthus cervinus* (PALLAS)

冬鳥：草原、田イモ畑、水田などで生息する。数は少ない。

大山 1991/11/9(3)

79. タヒバリ *Anthus spinolella japonicus* TEMMINCK & SCHLEGEL

冬鳥：田イモ畑、水田などで小さな群で生息する。数は多い。

大山 1992/4/19(2)

ヒヨドリ科 PYCNONOTIDAE

80. シロガシラ *Pycnonotus sinensis* (GMELIN)

留鳥：住宅地、農耕地、森林地域などで見られる。もともと沖縄本島にいなかった鳥で、最近北部へ分布域を広げている。南部では野菜の食害がある。

大山 1992/4/16(2), 1992/9/8(1), 1992/11/9(2)

伊佐 1994/1/5(1)

宇地泊1993/12/28(2)

81. リュキュウヒヨドリ *Hypsipetes amaurotis pryeri* STEJNEGER

留鳥：住宅地、農耕地、森林地域などに生息する。方言名「スーサー」

宇地泊1994/2/11(1)

大山 1991/11/9(3), 1993/12/25(2)

伊佐 1993/12/25(3)

モズ科 LANIIDAE

82. アカモズ *Lanius cristatus superciliosus* LATHAM

旅鳥及び冬鳥：冬場に農耕地や灌木林近くで見られる。数は少ない。

大山 1991/12/3(1)

ヒタキ科 MUSCICAPIDAE

ツグミ亜科 TURDINAE

83. ノゴマ *Erythacus calliope* (PALLAS)

冬鳥：草原、アシ原、灌木林などで生息する。姿をみると少なく、さえずりが遠くまでよく響く。

大山 1993/2/3(1)

84. イソヒヨドリ *Monticola solitarius philippensis* (MULLER)

留鳥：もともと海岸近くの崖地が生息場所であるが、最近住宅地、農耕地などにも生息するようになった。雄は背中が青色で美しい。

宇地泊1992/10/4(1)

大山 1992/4/16(2), 1992/9/8(1), 1992/11/9(2)

伊佐 1994/2/7(1), 1993/1/30(1), 繁殖期のさえずり初認

85. シロハラ *Turdus pallidus* GMELIN

冬鳥：農耕地、森林、灌木林近くで生息する。全身緑褐色で腹部は白い。地上の枯れ葉をひっくり返して餌を探る。よく窓ガラスにぶつかり保護される。数が多い。

大山 1992/4/12(5), 1993/12/11(1)

ウグイス亜科 SYLVIINAE

86. リュウキュウウグイス *Cettia diphone riukiuensis* (KURODA)

留鳥：草原、灌木林、森林の林縁などで生息する。姿をみることは少なく、さえずりで近くにいることに気が付く。冬はチャ、チャと地鳴きをする。

宇地泊1992/11/16(2)

伊佐 1993/11/29(1), 12/11(1)

大山 1993/12/25(1)

87. オオヨシキリ *Acrocephalus arundinaceus orientalis* (TEMMINCK & SCHLEGEL)

冬鳥：数少ない冬鳥として草原、アシ原などで生息する。

伊佐 1992/10/26(1)

88. セッカ *Cisticola juncidis brunniceps* (TEMMINCK & SCHLEGEL)

留鳥：草原、農耕地などで生息する。ヒッ、ヒッととかチンチン、チンチンとさえずる。ヒバリと良くまちがえられるが、ヒバリは沖縄では冬鳥として渡来する。

宇地泊1992/11/16(1)

大山 1991/11/9(1), 1993/12/11(2)

伊佐 1993/12/25(1),

1994/2/19(2) フライングデイスプレイ初認

カササギヒタキ亜科 MONARCHINAE

89. リュウキュウサンコウチョウ *Terpsiphone atrocaudata illex* BANGS

夏鳥：森林地域に生息する。「ツキヒーホシホイホイ」との聞きなしがあり、「三光鳥」と呼ばれる。雄は長いリボンのような尾羽を持っている。

伊佐 1992/10/26(1) 落鳥保護

メジロ科 ZOSTEROPIDAE

90. リュウキュウメジロ *Zosterops japonica loochooensis* TRISTRAM

留鳥：もっとも身近な鳥の一つ。住宅地や農耕地、公園、森林地域などふつうに見られる。目のまわりが白色になっている。

宇地泊1994/1/16(1)

大山 1993/12/25(1)

伊佐 1993/12/25(1)

ハタオリドリ科 PLOCEIDAE

91. スズメ *Passer montanus saturatus* STEJNEGER

留鳥：もっとも身近な鳥の一つ。住宅地や農耕地、公園などふつうに見られる。

宇地泊1993/12/28(8)

伊佐 1993/12/11(7)

大山 1991/11/9(20+)

ムクドリ科 STURNIDAE

92. ムクドリ *Sturnus cineraceus* TEMMINCK

冬鳥：公園の草地や高木、電線などに群がり、移動しながら餌を採ったり、休息したりする。

大山 1993/4/13(30)

93. ホシムクドリ *Sturnus vulgaris* LINNAEUS

冬鳥：草原や農耕地などにまれに渡来する。

大山 1992/10/26(1)

カエデチヨウ科

94. アミハラ *Lonchura punctulata* ESTRILDIAE

留鳥：飼い鳥の野生化。住宅地空き地の草地や休耕地、田イモ畑で小さな群れで見られる。

宇地泊1993/12/28(6)

大山 1992/4/12(6), 1992/9/8(5)

伊佐 1991/11/9(3)

95. キンパラ *Lonchura malacca*

留鳥：飼い鳥の野生化。住宅地空き地の草地や休耕地、田イモ畑で小さな群れで見られる。アミハラの群れの中にいることもある。

大山 1992/4/12(1), 1992/9/8(5), 1991/11/9(2)

合計95種

種別：留鳥21種（飼い鳥の野生化含む）、夏鳥4種、旅及び冬鳥68種、迷鳥2種

地域別：大山49種、伊佐18種、宇地泊64種、海浜公園3種

伊佐・大山・宇地泊の哺乳類目録（暫定）

Check list of Mammals in Isa, Oyama and Ushidomari.

食虫目 INSECTIVORA

トガリネズミ科 SORICIDAE

- 1、リュウキュウジャコウネズミ *Suncus murinus riukiuanus*

翼手目 CHIROPTERA

大翼手亜目 SUBORDER MEGACHIROPTERA

オオコウモリ科 PTEROPIDAE

- 2、オリイオオコウモリ *Pteropus dasymallus inopinatus*

小翼手亜目 SUBORDER MICROCHIROPTERA

ヒナコウモリ科 VESPERTILONIDAE

- 3、イエコウモリ（アブラコウモリ） *Pipistrellus abramus*

げっ歯目 RODENTIA

ネズミ科 MURIDAE

- 4、ドブネズミ *Rattus novegicus*

サシバの秋の渡りと集団渡来地の住民とのかかわり

久貝勝盛

(沖縄県立博物館)

The Relationship between Autumnal Migration of the Gray-Faced Buzzard-Eagle
and the Native People of the Concentration Migratory Points.

Katsumori KUGAI

(Okinawa Prefectural Museum)

サシバの集団渡来地で知られるバタン諸島（フィリピン）、ガランピ岬（台湾）、宮古諸島、徳之島、佐多岬（鹿児島県）、伊良湖岬（愛知県）で地域住民とサシバとの関わりを調べた。伊良湖岬、佐多岬、徳之島ではさほど関わりはみられないが、宮古諸島、ガランピ岬、バタン諸島では強い関わりがみられた。

なお、この報告書は1985年に発表した「The Life Cycle of the Gray-faced Buzzard-eagle」（人材育成財団、研究報告書第1号、1985）を加筆修正したものである。

First of all, the author picked out several concentration migratory points of the Gray-faced Buzzard-eagle widely known to the native people. He visited the places and examined them in detail. The relationship between the Gray-faced Buzzard-eagle and the native people of the concentration places was examined by personal communication with the native people of Taiwan, the Batan Islands of the Philippines, the Miyako Islands, Tokunoshima Island, the area of Cape Sata of Kagoshima prefecture, and Cape Irako of Aichi prefecture.

The native people of the area of Cape Irako and Cape Sata have not poached by their own catching methods on a large scale the Gray-faced Buzzard-eagle which migrates to

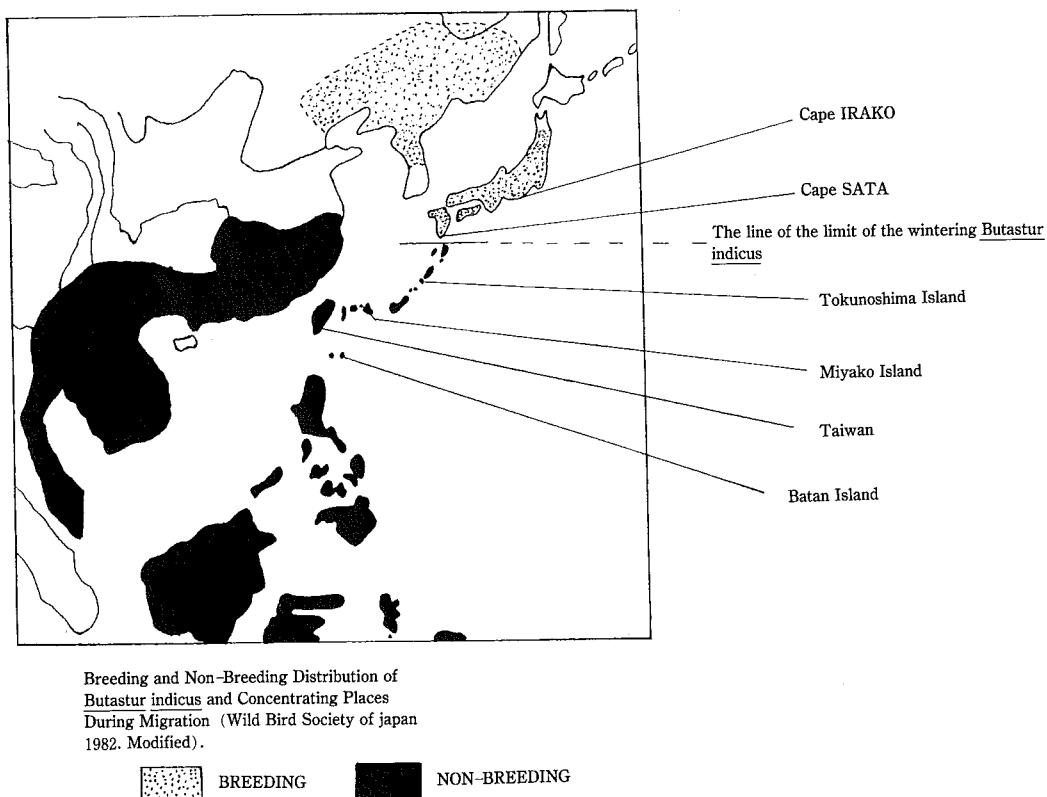
※ 本研究の一部は1993年度 FGF の助成金によるものである。

these areas. Hence, they have not so much had a strong relation-ship.

But the native people of the Miyako Islands, Tokunoshima Island, Taiwan, and the Batan Islands of the Philippines have poached by their own catching methods that they conceived during their long history with the birds. In other words, the Gray-faced Buzzard-eagle has become a part of their lives. As shown below, the relationship between the birds and the native people of the Miyako Islands, Tokunoshima Island, Taiwan and the Batan Islands and their catching methods are explained.

Cape Irako was examined in october 1978 and 1993, Cape Sata in october 1979 and 1993, Tokunoshima island in october 1987, the Miyako Islands in every october from 1973 to 1991, Cape Oluanpi of Taiwan in october 1982 and Batan Islands in october 1984 respectively.

On this paper, the author added new information and some photos to the paper on the life cycle of the Gray-faced Buzzard-eagle reported already in 1985 and modified.

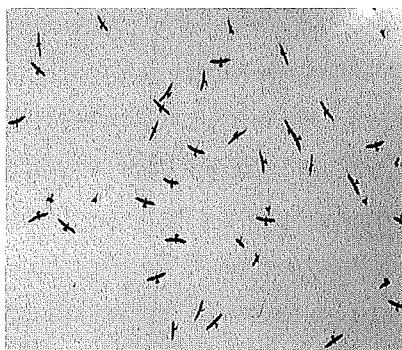


1 The Miyako Islands

All of the Miyako Islands, widely known as the roosting place of the Gray-faced Buzzard-eagle from olden times, have been very excited during the autumnal migratory season. The Gray-faced Buzzard-eagle is a protected bird today. So only very few people have poached it. But the history of the poaching of the birds is very long. Anyway, in olden times if the schools had athletic meetings during the autumnal migratory season, the native people protested to the schools because of not catching the birds due to the sound of bells and drums and voices. So, we can imagine how all of the people of the Islands had been excited during the migratory season.



Resting Butastur indicus



Flock of Butastur indicus

The native people of the Miyako Islands have designed their own very interesting catching method during the long history which they have concerned themselves with the Gray-faced Buzzard-eagle. It is a catching house called Tsugya (means a catching house). First, they make a catching house to hold two men at slightly above the middle of a tree of above 15 meters height by using the branches of pine trees, vines and pampas grass. Of course they selected the most proper tree for the roosting of the Gray-faced Buzzard-eagle. They know which tree is the best through their long experiences. They also set three perches at 1.5 meters above the catching house and put a captured decoy bird on the perch. The decoy bird is an adult male. The native people are calling it Akamii (means red eyes in their dialect) in relation to the color of the iris. They don't use any other birds except this male adult as their decoy bird. The decoy bird is put on the bottom of the perch. The decoy bird is tied fast from under the wings through the back with a string. This string reaches into the catching house under the perches. At the Miyako

Islands, we can see the Gray-faced Buzzard-eagle from around 11:30 o'clock in the morning. The peak is from 16:00 to 18:00 pm.



Decoy Bird



Catching House (Tyugya)

When a large flocks of the Gray-faced Buzzard-eagle passes over the Tsugya (catching house), the man in the catching house pulls the string of the decoy bird and makes it flap. The Gray-faced Buzzard-eagles, flying over the catching house recognize it and are tempted by it and fly down on the perch near the decoy bird one after another. When the Gray-faced Buzzard-eagle land on the perch, the man in the catching house catches it by using a bamboo pole which its tip with a circular string (put the circular string on its neck and pull down).

The figures of the Gray-faced Buzzard-eagle which flies down aiming at the decoy bird like a bullet from an altitude of 700~800 meters are very splendid. When they fly down like a bullet, they fold their wings into a triangular form. The sound of cutting the air with their wings reaches as far as the catching house. We can also hear the sound of the violent breath of the Gray-faced Buzzard-eagle which lands on the perch near the decoy bird. They will consume a lot of energy during their flying. But then, we are astonished with their sharp eyesight which recognizes the decoy bird from an altitude of about 1,000 meters.

But why must the decoy bird be special adult male type which the native people call Akamii (red eyes)? According to the native people, the Gray-faced Buzzard-eagle that comes flying to the Miyako Islands at the begining of the migratory season is a juvenile bird. An adult bird, male type (red eyes) is very few. So it is said that if someone caught Akamii (red eyes, male type), he was very glad because he might have a chance to catch many other birds by using it as a decoy bird during the season. It is said that the

most beautiful decoy bird was sold for \$ 50. This means that if somebody buys it at such a high price, he will be able to recover his costs by using it.

Judging from the story of the native people who have had a deep relation with the Gray-faced Buzzard-eagle as mentioned, I presume that the native people will become to know that the decoy bird (an male adult, red eyes) will have the position of being a leader during migraton. It also seems similar to the above-mentioned matter, that the Gray-faced Buzzard-eagles which are caught at the catching house by using a decoy bird, are all juvenile birds. The author wants to take some time to survey this observation.

Then, how many Gray-faced Buzzard-eagles were caught by the native people during one season? A certain old man told me that he had caught about 100~150 birds during one season and his friend caught 138 birds during one day. It is said that about 1,500~2,000 catching houses (Tsugya) were made all over the Miyako Islands before World War II. They say that about 60 birds on an average were caught by one catching house (Tsugya) during each season. So, it is considered that about 100,000 birds were sacrificed all over the Miyako Islands during every migratory season. Before World War II, the breeding places of mainland Japan had an ideal environment to breed. Therefore, a great number of Gray-faced Buzzard-eagles would have increased satisfactorily.

At the peak of the migration, a lot of Gray-faced Buzzard-eagles came flying to the Miyako Islands. Some of them could'nt find a tree to perch on and flew down into the sweet potato fields. The women working in the fields sat with their heads covered with sweet potato vines. When a bird perched on their sweet potato vines, they caught it quickly with their bare hands. They occasionally caught 4~5 birds. So, in these days, it can be imagined how much greater the number of Gray-faced Buzzard-eagles were that came flying to the Miyako Islands.

The author considers that the story about how so many Gray-faced Buzzard-eagle came flying together to the Miyako Islands at the same time that the sky became black, is true.

At 1609, the Miyako Islands were controlled under Satsuma and the native people were required to pay a very severe tax. People worked very hard in order to pay the tax. The tax is called Nintoh-jei. People boiled the leaves and vines of sweetpotatoes with sea water to keep off hunger. For 266 years Nintoh-jei continued, and people could not eat meat or drink alcohol. So the people who were suffering from unbalanced nutrition had to find a source of nourishment. Fortunately, the gods sent to the Miyako Islands a

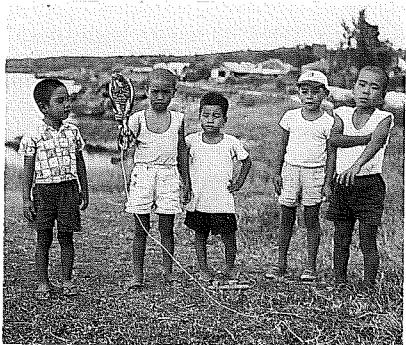
great number of the Gray-faced Buzzard-eagles for this supply of nourishment. The unbalanced nutrition of the people was mitigated by the bird's appearance. Nobody knows the time when people began to eat the Gray-faced Buzzard-eagles. But possibly, people might have begun to eat them during the days of Nintoh-jei. Anyway, in those days, the Gray-faced Buzzard-eagles were a very important food for the native people and the pleasure of hunting restored their fatigue. So when we talk about the Gray-faced Buzzard-eagles with an old man who caught a lot of birds in his youth, the conversation becomes lively and we lose all sense of time.

In olden times, in the days when the Gray-faced Buzzard-eagle was not caught, people sat in a circle and had a beauty contest with the birds. A person who caught a very beautiful male bird to use as a decoy bird, or who had made a catching house (Tsugya) at the best place to catch the birds, was very envied by everybody. They were proud of the large numbers of birds which they had caught and talked with each other about the best way to cook them. When people cooked them, they generally made a stew with them or put them into boiled water and plucked the feathers and fried them with their own fat. The stew was called "Taka Jyushi" in miyakoan dialect. "Taka Jyushi" means a stew made of Gray-faced Buzzard-eagle. Children made rings with the sharp claws of the birds and the feathers were used as a broom.

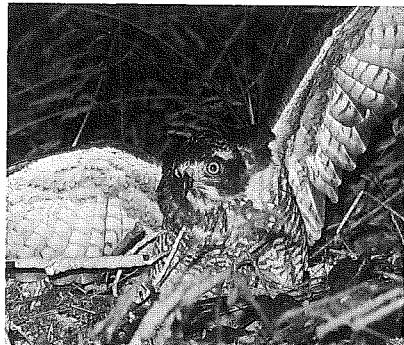
The migratory season of the birds have brought to all of the native people a chance for good communication. They gathered together and talked wiht each other about various stories concerning the birds, every night after catching them. In those days, the Gray-faced Buzzard-egle was given to all of the children as their living toys. Children competed for the flying distance of the birds. They tied a string which was attached to a wooden clog around both legs and then they released the birds, carrying the wooden clog, for the race. The person who caught a lot of birds sold them at a market. The juvenile bird cost 10 to 15 cents (US dollars). The adult one cost 20 to 25 cents. They were also carried to the market in mainland okinawa. Some people fed the birds in a storehouse and when a guest visited, they cooked them and offered them to him. So those days were the worst period for the Gray-faced Buzzard-egles who flew to the Miyako Islands.

The hills and trees near villages which had ideal conditions to catch the birds, were bidden. After the bidding, people informed each other about ownership by tying pampas grass around the tree during the migratory season. The date of the bid was fixed. If anyone had marked a tree belonging to a village with pampas grass before the bid day, it

was not permitted by the people. The money from the bid was used at a meeting on respect-for-the-aged holiday, for athletic meetings, New Year's Day or the festivals of the village.



Kids and the Bird
(Photo by Dr. George H kerr)



Poached Butastur indicus

Both Irabu and Shimoji island are the places where the greatest number of the bird sused to come flying among the Miyako Islands. These islands have a very interesting local song concerning the Gray-faced Buzzard-eagle as follows.

Kugatsu-n Mai-fu Taka-gama Du-n-ma Su-tsua Shi-i-du Tubi-mai-fu
(Every September of the lunar calendar, the Gray-faced Buzzard-eagle
recognizes the season and comes flying to our islands.)

Kugatsu-n Mai-fu Taka-gama Du-n-ma Suma-nu-ban Mura-nu-ban Chi-du
Nukui-ya-munu Du-ta-mai Suma-nu-ban Chi-du Nu-ku-ra-ji-ti
(The Gray-faced Buzzard-eagle which comes flying to our islands in
September of the lunar calendar stays to protect islands. So let's
also do our best to protect our islands.)

Sutsu-nu Tui-gama Du-n-ma Mu-du-chi Mi-rai-su-ga
Du-nu Fu-fa N-miya Nou-chiga Mi-ra-in-ga
(At every migratory season, we can see the Gray-faced Buzzard-eagles.
But my child who died doesn't appear forever.)

From this local song, we can imagine that the Gray-faced Buzzard-eagle was a part

of the life of the native people and how the Gray-faced Buzzard-eagle deeply occupied their hearts.

The children in Hirara City of Miyako Island sang loudly when the Gray-faced Buzzard-eagles appeared over the Miyako Islands.

Taka Do-oh-i Den-go U-wa-ga Ya-ya N-za-ga Tarama-nu Pai-nu-ka-ta

U-pu Gi-su-ki Nu Su-ta N-du Ya-ya Tsu-fu-i Su-sa Tsu-fu-i

Bi-yu-i Taka Nui Nui

(Hey, Gray-faced Buzzard-eagle, Where is your house?

My house is in the big tree at the north, far from Tarama island.)

In addition, we have the following legend at Nikadori area, Hirara City. The children from this area grew up hearing it.

In olden times, when the Father of the Gray-faced Buzzard-eagle was flying over the Miyako Islands, his wing was hurt and he took rest in the area of Nikadori Creek. He died from the wounds on a chilly night when the autumn wind was blowing.. So his fellows visited the Miyako Islands to worship his spirit every fall.

We also have another interesting story at Shimosaki area, Hirara City.

In olden times, the Gray-faced Buzzard-eagle and frogs were close friends. One day, they promised to run an informal race about a trifle from the western part of Miyako Island to the eastern part. They bet a bottle of wine and a fish on the race. If the frog competes honestly with the bird, he will lose. So he assembled all of the frogs in Miyako Islands and demanded them to cooperate with him. The frog arranged his friends at regular intervals from the starting point to the goal and competed with the bird. Finally, the bird lost the race due to the frog's wits. The frog demanded the wine and a fish from the bird. But he had no money to buy wine. So the bird asked the frog to wait for three months. But the bird couldn't pay the money to buy wine for the frog after three months had passed. Soon, the autumn was over and the bird returned to his native place. So they say that all of the frogs on Miyako Island croaked and demanded their prize.

In the Miyako islands, when the migratory season has come, the Gray-faced Buzzard-eagle certainly appears in the daily conversation of people, in their daily life, in the local songs and in the legends. There is an unparalleled and a unique culture of the Gray-faced Buzzard-eagle in the Miyako Islands.

2 Tokunoshima Island

Tokunoshima Island is located about 420 kilometers south of Cape Sata. Since Tokunoshima Island was expected to be a concentration locality for migratory hawks, it was examined twice in 1987 (october 10-13 and october 18-21). The first step was to obtain information concerning the migration of Gray-faced Buzzard-eagle from the native people of Tokunoshima Island. This proved very difficult. However, enough information was obtained from some hunters to determine some of the concentration migratory points.

The point that the birds funnel through on their entarance and exit is at Isencho, Tokunoshima Island. Here, the birds fly to the island from the south-west at 1700 and 1800 hours in the evening and leave around 0600 hours the next morning. This situation is very similar to the Miyako Islands. The points where many Gray-faced Buzzard-eagles come to the island are at Itokina, Agon, Yaezoh, and Bane in Tokunoshima Island. At the basin of Yae-zoh, there is a low hill called Ta-i-ri-du by the native people. Historically, it is said that this was where many Gray-faced Buzzard-eagles came into the island. In fact, the word "Ta-i-ri-du" means the hill to shoot the hawks. Now more than half of the hill has been destroyed and it has been turned into a sugarcane field. It is, however, still said that some hawks come through this area every year.

In olden times, it is said that people poached the birds by using a gun or a birdlime.



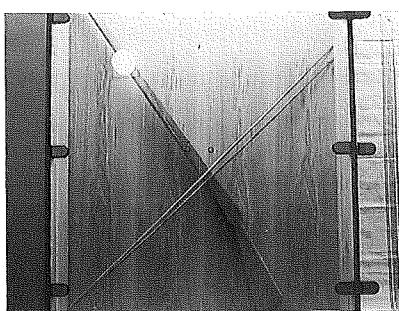
A low hill Called Ta-i-ri-du by the native people

3 Taiwan

The people of the Tainan area of Taiwan, widely known as a resting place of the Gray-faced Buzzard-eagle, also gets as excited as the people of the Miyako Islands during the migratory season. They sometimes poached the bird by using a gun. But most of them use a gun-bow. A gun-bow means a gun that uses an arrow instead of a bullet.

During the migratory season, every day the children or the young men climb on the roof from about 4 o'clock in the afternoon and watch the birds. They have ascertained at which part of a mountain the birds take their rest, and after sun-set, they poach the birds by using a gun-bow and a flash light.

They say that also in this area, the Gray-faced Buzzard-eagle remains the chief topic of the conversation among the people during the migratory season. But at the present time, the poaching of the Gray-faced Buzzard-eagle also has been prohibited by the efforts of the people in the wild bird society of Taiwan. The gun-bow that had been used in ancient times, has been displayed at the National Museum in Kenting Park in Taiwan.



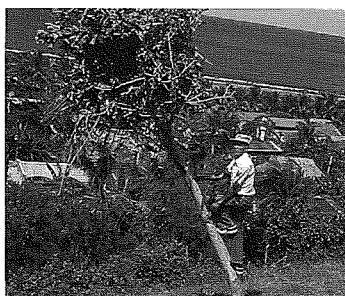
Gun-Bow

4 The Batan Islands of the Philippines

The Batan Islands consist of Batan Island and Sabatan Island. Both islands are well known to the native people as the concentrating place of the Gray-faced Buzzard-eagles. But the people from other island don't know about this. The Batan islands are located 200 kilometers north of the northern part of Lozon island and 400 kilometers north of Manila. It takes about 2 hours and 30 minutes from Manila to Batan Island using a 48-seat airplane. There are very few trees on the islands because of elimination for fuel. There is no sign of reforestation. On these islands, the main kind of trees are coconut trees. According to the native people, trees don't grow easily because of the typhoons.

The native people call the Gray-faced Buzzard-eagle "Kuyab" and have had a deep relationship with the birds similar to the Miyako islands. "Kuyab" means the birds which comes flying during the daytime. In every place on these islands, the Gray-faced Buzzard-eagle appears during the afternoon until evening. So the word "Kuyab", is a very nice dialect word that describes well the habits of the bird. In Batan, Ivana area is the only concentrating place. In this island, the Gray-faced Buzzard-eagle has been adopted into

a supplementary reader of an elementary school. The contents are as follows;



Catching House of the Batan Islands

October is here and once again, the science teachers of the Ivana Elementary School motivate their pupils as they discuss the long awaited coming of the "Kuyab" birds similar to the Philippine eagle.

With various illustrations, the science teachers explain to the pupils that this species of birds come somewhere from China, and because of the Siberian winter, they are forced to migrate to warmer regions. These birds follow a certain direction. Ivana and Sabtang (an island about three nautical miles from Ivana) happen to be within their course of direction.

When the "Kuyabs" do finally come, which is usually in the middle of October, children excitedly welcome their coming with shouts of joy.

The birds spend the night resting on any tree around. Since there are thousands of them, people can't help but catch some of birds for pets or even for food. Some enterprising young men would prepare artificial roosts for the "Kuyab". They position four posts on the ground and put twigs and leaves on top. These are artificial trees, usually with ladders for reaching the top. On top is a cozy space where the tired "Kuyabs" can rest. The men hide just underneath and when the "Kuyab" alights on the makeshift roost or "Pongkot", the men catch them with bare hands. Usually this is done under the cover of darkness.

The "Kuyabs" navigate long distances over seas and land, flying day and night. They are guided in their long journey by the stars and the earth's magnetic impulses. They alight in the Batan Islands for an overnight rest and resume their long journey to the South at the light of dawn. They come back after the winter season, in February and March. This time they fly over the Batanes Isles.

It is said that some of these birds are caught in Cagayan and Isabela. Some birds car-

ry bands sometimes with messages.

Locally know as "Kuyabs" these birds belong to the raptorial falcon family specifically called Gray Buzzards. They have weak short toes with strong wings.

The "Kuyabs" never fail to come on October 13. On or before this date they start alighting on the treetops at Sabtang and Ivana. The Ivana folks believe that they come around this date because they are the Virgin Mary's birds. October is the Lady's month and October 13th is her Feast Day in most Ivatan Villages.

We can imagine from the supplementary reader how the native people have deeply concerned themselves in the birds. The native people also have poached them by making a catching house like the "Tsugya (catching house)" of the Miyako Islands.

But the catching house of this island and of the Miyako Islands are a little different. The native people have not used living trees to make the catching house because of a lack of growing trees. Instead, they set up a tree trunk on the slope of the mountain and make the catching house by putting a man inside the tree trunk. Sometimes they have set up four tree trunks and made a bigger catching house to hold two men by using these trunks. After making a catching house, they camouflage it like a big tree by using many green leaves. When they want to catch the birds, they go into the catching house before the birds appear and wait for them. The birds come flying around four o'clock p.m. until evening. The birds which fly to this island, perch on the catching house which is camouflaged like a big tree to rest from their fatigue. The man hiding inside the catching house quickly catches the legs of the birds with his bare hands. When the bird perches on the tree, first he looks down and then looks around as his habit. So the man hiding inside the catching house must catch it before he looks down into the house. They say that the timing to catch a bird is very difficult. It is also said that in this island, more than 100 catching houses have been made during the season and someone caught 13 birds in one day. It is presumed that more than 10,000 birds have been poached on this island too.

It is very interesting to compare the catching method of the Miyako Islands and of the Batan Islands.

- (1) In the Batan Islands, the method presumed to be the oldest one, still remains. This method is presumed to be the same one as the first method of the Miyako Islands.

- (2) In the Miyako Islands the decoy bird has been used, but in the Batan Islands it isn't.
- (3) In these days native people from both places have poached the birds by using a flashlight and a bamboo pole with a hook.
- (4) During the migratory season in the Miyako Islands, the native people have not used a gun, but in the Batan Islands sometimes a gun has been used.

Acknowledgements

The author wishes to express hearty thanks to Dr. Sadao Ikehara, a honorary professor, University of the Ryukyus, Dr. P.J. Alfonso, Department of Wildlife, UPLB, Professor P.L. Alviola, Department of Wildlife, UPLB and Miss Jane Sutter, Asistant English Teacher, Miyako Senior High School for their nice advice and their help in checking my English and typing.

References

- (1) H. Elliott McClure, 1974, Migration and Survival of birds of Asia U.S. Army Component SEATO Medical Research Laboratory Bangkok Thailand.
P124~125, P367~369.
- (2) Kramer Gustar, 1952, Experiment on Birds Orientation. Ibs, 94:P265~285.
- (3) Kasumori Kugai, 1979a, The migration of the Gray-faced Buzzard-eagle, The Nature of the Miyako Islands. The Board of Education of Hirara City P108~111.
- (4) _____, 1981b, Miyako Guntoo no Sekitsui Dobutsu to Dobutsu Tennenkinenbutsu, Hirara Shi no Bunkazai. P73~83.
- (5) _____, 1983c, The migration of the Gray-faced Buzzard-eagle and the Miyako Islands. Okinawa Association of Biology Education Vol.16. P6~14.
- (6) _____, 1985d, The Life Cycle of the Gray-faced Buzzard-eagle. Research Report Vol.1, Human resources development foundation of Okinawa prefectural government.

- (7) ——————, 1994e, A Basic Study of Migratory Birds. Report of Researcher Assistance Program Vo 1.2, P7~37.
- (8) Leslie Brown and Dean Amadon, 1900 Eagles, Hawks and Falcons of the World. Vo 1.2, P537~544.
- (9) Sadao Ikebara, 1975, Hyoshikiho ni Yoru Sashiba Butastur indicus no Watari ni Kansuru Chosa Gaikyo, Okinawa Kenritsu Shizen-koen Ko-hochi Gaku-jyutsu Chosa Ho-koku, P129~144.
- (10) Wild Bird Society of Japan, 1982, A field Guide to the Birds of Japan.
- (11) Yukihiko Kojima, 1982, Territory and Territorial Behavior of the Gray-faced Buzzard-eagle Butastur indicus. Bulletin of the Ornithological Society of Japan, Tori, 30 Vo 1. 30, No.4, P117~147.

<調査報告>

第二代沖縄県令上杉茂憲関係資料について

萩 尾 俊 章

(沖縄県立博物館)

Report on the Materials of Mr. Mochinori UESUGI, the Second Okinawa Prefectural Governor

Toshiaki HAGIO

(Okinawa Prefectural Museum)

Abstract : Mr. Mochinori UESUGI was the second Okinawan Prefectural Governor since the collapse of the Ryukyu Kingdom. He was from what was formerly known as Yonezawa Han, in the Tohoku area, present-day Yamagata Prefecture and was in office from 1881 to 1883. He established administrative policies by visiting all of Okinawa Island, the Miyako Islands and the Yaeyama Islands. He also sent to Tokyo the first five scholarship students to learn about Japanese civilization and thought. He and his wife won the hearts of the Okinawan people through their open communication with, and encouragement of the scholarship students. After resigning the Governorship in Okinawa prefecture, Mr. UESUGI still continued to support the Okinawan scholarship students. Though his tenure was shortened, he had contributed to the renovation of Okinawan society and had grappled hard in order to educate competent persons. He was the person who laid the foundations of Okinawan modern society and education.

The purpose of this paper is to introduce concerning all aspects of Mr. Uesugi's life and work. These materials are kept in three places, the Uesugi museum, Yonezawa city library and the remainder are managed in a private office. The author was fortunate enough to have had the opportunity to examine the historical materials in December, 1993. Many papers concerning the materials have been published already, but some important materials are left unknown. In this paper, the author will introduce new materials concerning Uesugi.

はじめに

上杉茂憲（うえすぎ・もちのり）は琉球処分（明治12年）後の第二代沖縄県令である。東北旧米沢藩（現在の山形県米沢市）の出身で、明治14年（1881）から明治16年まで約2年間県令として在職した。上杉県令は沖縄本島の各地や先島地方の民情視察を行って施政の方針を確立したり、第1回県費留学生5人を東京に派遣するなど開明的な県政を試みた。また、沖縄を去るにさいして奨学金を寄付したことでも知られている。

上杉県令は沖縄社会の刷新と人材育成に熱心に取り組み、沖縄近代社会・教育の夜明けともいべき時代の基礎を築いた人物といえる。

さて、1993年11月上旬に、知事公室からの依頼で第2代沖縄県令上杉茂憲公の顕彰等に向けての資料調査の話があり、11月16日から18日にかけて山形県米沢市において調査を行う機会に恵まれた。以下はその際の資料調査の報告である。

調査は沖縄県人材育成財団の西銘正毅と長嶺清喜、沖縄県立図書館史料編集室の田港朝和の各氏と萩尾俊章の計4名があたった。調査機関はいずれも米沢市内にあり、上杉家管理事務所、米沢市立上杉博物館、米沢市立図書館の各機関であった。

上杉家史料の調査にあたっては御当主の上杉隆憲氏の御高配と御配慮の賜でありとくにここに感謝申し上げたい。

1. 第二代県令上杉茂憲について

上杉茂憲は弘化元年（1844）2月18日、第十三代斉憲の長男として米沢に生まれる〔図－1 上杉家略系図参照〕。幼名は龍千代、喜平次、のち章憲、茂憲となった。

上杉家は山形県米沢市の名家で、上杉謙信の流れをくみ代々米沢藩を治めた有力大名家であった。上杉茂憲は、廢藩置県後に華族に列せられた。明治5年（1872）から翌年にかけてはイギリスに留学し、最新の知識と文化を吸収して帰国した人物であった。1877年には宮内省御用掛に任じられた。

そして、薩長闇による明治政府の中、上杉茂憲（以下、とくに明記しない限り上杉または上杉県令と表記）は明治14年（1881）5月18日付で沖縄県令兼判事、すなわち第二代沖縄県令を命じられた。明治16年4月元老院に転ずるまでの約2年間沖縄県令として在職し、県政を司った。当時38才であった。政府は上杉を県令に任命するにあたり、上杉家家令の池田成章を補佐役としてつけた。

米沢温故会編『上杉家御年譜』の明治14年5月18日には、「御用召二付礼服御着用太政官へ御出頭ノ処 前日岩倉右大臣ヨリ御内話ノツ、キ左ノ通御任官アラセラル」とあり、^(注1)

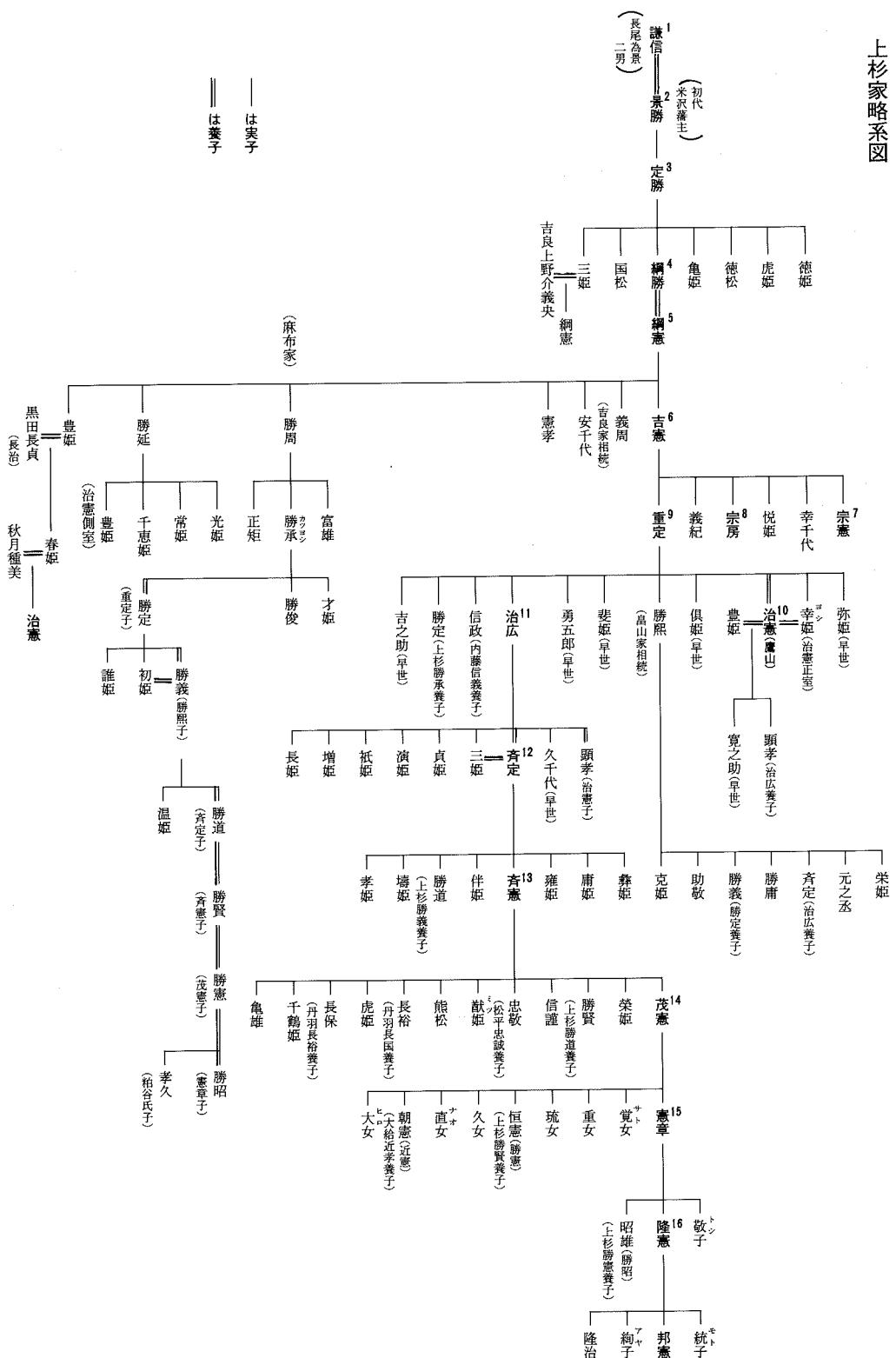


写真1 米沢城址



写真2 上杉茂憲公（上杉邦憲氏提供）

上杉家略系図



沖縄県令への任官がおこなわれた。任官の辞令書は後掲のとおりである。(写真3・4参照)

この任官により5月19日には鍋島前沖縄県令が上杉邸に来邸し対談、さらに翌日鍋島前県令とともに伊藤参議、松方内務卿を訪問してもいる。

6月14日が沖縄県赴任の出発日であった。併に畠山義孝、左近司六蔵、三俣元三郎、清水熊吉の四人を連れ、また御用掛池田成章と付人の竹津友次郎他が同行した。家族・親族をはじめ旧藩人ら多数の見送りをうけながら、横浜港から名古屋丸で出港し一路神戸へ向かった。16日夜に神戸に到着し、18日に沖縄行きの黄龍丸で出港。鹿児島と奄美大島に各々寄港し、25日に那覇に到着した。そして、29日には鍋島前県令から一切の事務引継をうけている。

10月には泉崎に適当な住居があるということで、26日転居することになった。この住居は、大戦前まで豪華な家・屋敷のあった那覇市上泉町の仲尾次家のことで、これを全部借り受けて住まい、そこから那覇西村の県庁へ通勤したという。

同年の11月には沖縄本島の巡回をおこなっている。目的は民情を視察して県政の方向を見定めることにあった。島尻・中頭・国頭を視察するにあたって、それらの三役所には次のような通達をした。

「不日長官御所轄内へ巡視相成候ニ付き孝子節婦等平素他ノ亀鑑トモ相成ルヘキ特行者有之候ハ、其折御申出可有之旨(注2)候」

また、「今回長官巡回ニ付テハ所在人民或ハ土産ヲ献上シ或ハ故ラニ閭里之外飾ヲナス等モ難圖候処是等ノ事一切無之様役所員ニテ御注意相成度且宿所食事等モ特別ノ用意ニ及ハス其箇所有合ノモノニテ可被相辨候(注3)」という通達を三役所におこなっており、住民への心遣いがみえる。

明治14年11月8日、島内巡回のために出発した。随行は県官5名、左近六蔵、三俣元三郎、他に通訳1名を伴った。通訳を伴ったことは当時の事情を反映しており興味深いところである。沖縄本島の巡回についてはすでに紹介されているのここでは省略する。

翌年の明治15年3月11日から御用伺のために上京している。自ら沖縄本島をはじめ各島々を巡り、沖縄県民の実情を視察した結果をふまえて、県民の苦しい生活を救うべく、政府に対して制度改革などの意見書を提出するねらいがあった。明治15年5月6日付で内務省・大蔵省宛「沖縄県上申」を提出した。その上申に対する政府の回答は制度改革は尚早であるとの反対論が根強くあったために、さらに5月31日付をもって意見書を提出している。なお、滞在中の4月27日には旧藩主尚泰家を訪問してもいる。

同年7月5日に帰任することになったが、このときは夫人の兼、長男の憲章、次女の重を同伴した。また、上杉提出の意見書に応えるかたちで、政府は太政官参事院補尾崎三良を派遣することになり、彼も上杉一行に同行した。同月19日には沖縄に到着している。

帰任後早々の8月17日から先島の巡視をおこなっている。このときは尾崎も同行し、久米島、粟国島、宮古・八重山を巡回し、8月30日に那覇へ戻った。

在任中は教育・人材育成に力を注いだことはよく知られている。前鍋島県令の時に、師範学校、中学校、小学校が設立されていたが、小学校の数や教員も不足していたという。

赴任早々の明治14年6月12日には、南風原間切土族真境名元連（当時11歳）が九州小倉に勤学出発すると聞き、率先して勉学に奮起することにいたく感銘し、金拾円を遣わしその志しを賞賛したという。

明治14年11月には、県費留学制度が発足し、東京へ5人の留学生を派遣した。第一回の留学生は謝花昇、岸本賀昌、太田朝敷、高嶺朝教、今帰仁朝蕃であった。今帰仁は中途で帰郷し、山口全述にかわった。農民出身の謝花昇を除いて、いずれも土族出身であった。留学生たちは帰郷後政財界やジャーナリスト、あるいは自由民権運動の指導者として活躍した。このような留学制度の発足には上杉の人材育成に傾ける熱意があった。

沖縄を去るときには1,500円の大金を教育資金として寄付した。沖縄側の文献では金3,000円と記載されているが、『上杉家御年譜』では明治16年5月9日付記事に「元老院議官ニ栄任ノ記念トシテ当県下教育資金トシテ金一五〇〇円御寄付アラセラル」とある。^(注4) いずれが正しいかは今後に譲るとしても、こうした制度・資金によってのちの沖縄の教育・文化をになう人間が育っていったことは明白である。

さきに上杉が沖縄管内を視察・調査し、全島の間切の制度を改正する政策をたて、政府にその意見書を提出したことは、反面結果として彼の県令としての任期を縮めることにもなった。意見書の提出に対して、明治政府は民情視察のために元老院議官補尾崎三良を沖縄に派遣した。だが、皮肉にも尾崎は「県官漫りに旧慣を改め民情を傷ふ」という趣旨の報告をした。^(注5)

この復命によって政府は、明治16年1月14日さらに密命を帯びた会計検査院長の岩村通俊を民情視察のため派遣した。その後岩村と県令は何度となく会談を行っている。

ただ、政府のおこない方は余りにも県令を侮辱したものとの見地から、上杉は辞職の覚悟もあったようであるが、岩村の説得もあって、岩村の所属取消の処分があればと踏みとどまる意志を固めた。

しかし、中央集権的国家樹立を第一に考えていた政府に上杉の考えは最終的には受け入れられず、元老院に転任となった。当時の沖縄県はまだ日清両属問題が尾をひいており、日清両国に緊張状態が続いている。そのような中にあって、旧士族層は、廢藩置県に反対の立場から、頻繁に渡清して清国側に嘆願を繰り返していた。旧士族層をなだめるために政府は彼らを優遇したといえる。その重要な政策として旧慣温存政策があったのである。上杉は社会の刷新と旧慣温存政策の中のはざまで、苦しい立場にたたされていたのであ

る。

結局、明治16年5月17日に元老院議官に転任を命じられ沖縄をあとにした。その際、東京の学校に入学させるために一人の少年を伴っていたという。なお、離任前の明治16年4月29日には三女が誕生し、その子は「於琉（おりゅう）」と命名された。

その後、上杉茂憲は翌明治17年には伯爵を授けられ、大正8年（1919）4月18日に76歳で他界した。

2. 上杉県令関係資料

上杉県令に関する史料は、琉球政府時代の1965年に発刊された『沖縄県史』11巻所収の上杉県令関係日誌、ならびに沖縄県立図書館史料編集室が刊行した『沖縄県史料 近代4』（1983）に所収されており、貴重な資料となっている。それらに紹介された史料が上杉家資料である。

上杉家に伝存する資料は上杉家管理事務所（上杉虎雄所長）が管理し、資料は蔵に一括して保管されている。蔵は旧米沢城社の壕の側にある旧上杉伯爵邸、現在は上杉記念館及び座の文化伝承館の敷地内にある。

上杉家資料はその多くが未整理の状態にある。上杉茂憲関係資料はほとんどが『沖縄巡回日誌』をはじめとする文書と書簡であり、他に関連するのは上杉茂憲の書跡1点（時代不詳）と御官服（県令在職以後のもの、1式）・印章がある。沖縄県令在職に関わる沖縄関係の資料は文書と書簡以外、現在では確認できない。

ただし、今回の調査ではそれらに加えて若干の新しい史料が発見されたので、その点は後で補足し紹介しておきたい。

上杉家資料の一部は米沢市立上杉博物館ならびに米沢市立図書館に寄贈されている。

その中の上杉茂憲関係資料は上杉博物館では書跡2点と肖像画の写真1点がある。書跡のうち一つは七言絶句で、箱根萬翠楼席上の感慨を詠んだもので、もう一つは明治40年に詠んだ俳句（寄せ書き）である。肖像写真の複製（軸物）は上杉熊松による原画を写真撮影したものを軸に仕立てたもので、父の斎憲とともに表装されている。

市立図書館には昭和6年（1931）に杉原謙が上杉茂憲の年譜を作成する際に書き写した資料があるが、これは上杉家所蔵文書の写本である。他に米沢藩知事に関わる告諭案があるが、他はすべて刊本の類である。

上杉茂憲に関しては『茂憲公御年譜初稿』が全37冊があり、その中で沖縄関係は巻13～15の3冊ある。これは杉原謙の稿本である。

これらの史料をもとに、『上杉家御年譜』が米沢温故会から刊行されており、その中で

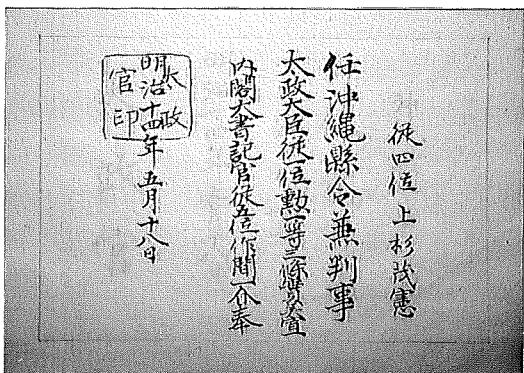


写真3 『御年譜資料』(一覧表番号 No.37)

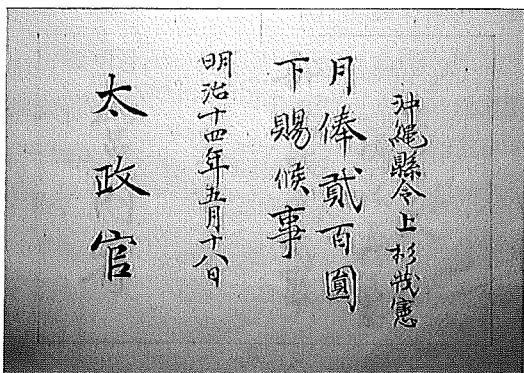


写真4 左同

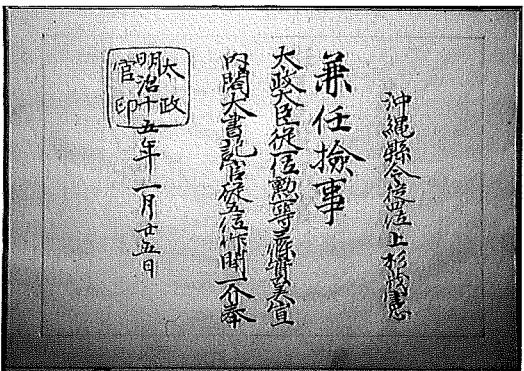


写真5 『御年譜資料』(一覧表番号 No.37)

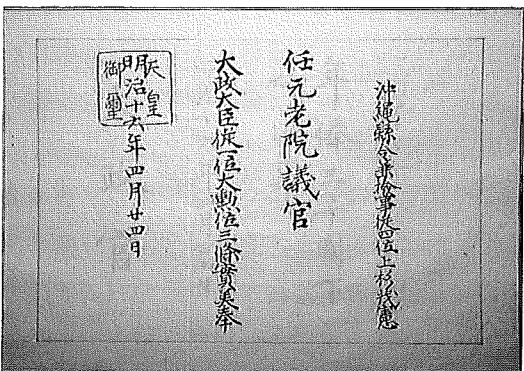


写真6 左同

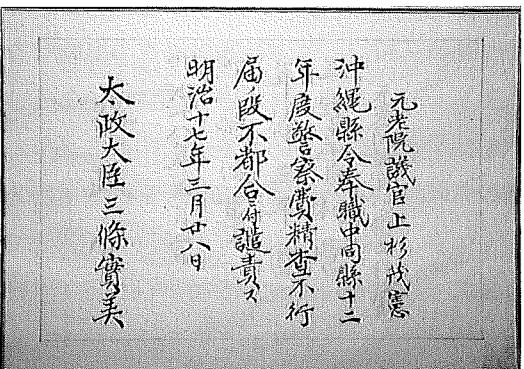


写真7 『御年譜資料』(一覧表番号 No.37)

上杉茂憲は19～22まで計4巻にわたりまとめられている。とくに巻20は沖縄在任中の記事が日を追って記され、上杉茂憲の私的な面もふくめて日課の様子がわかる。

今回、上杉家資料で新たにわかったものは下記の史料である。名称の後にある（ ）の番号は次節に掲載した資料一覧表の番号である。

まず、米沢市立図書館の『御年譜資料』(No.37)の中には、辞令書の写しも含まれている。これまでに、上杉県令の辞令書に関する資料は報告されていないので、ここに沖縄県令在職に関わるものを紹介しておきたい。

上杉管理事務所の資料では以下の史料を新たに確認することができた。

「東京勤学人名」(No.10)は第1回の県費留学生の名簿であり、沖縄県の用紙に墨書きされたもので、用紙の右端には鉛筆書きで明治十五年十一月書記官と記され、〈馨治〉の印が押されている。馨治とは県書記官田中馨治のことであろう。(資料1参照)

東京勤学人名		(10)	
右同	中学校生徒	右同	中学校生徒
師範学校生徒	華族今帰仁朝敷三男	師範学校生徒	華族今帰仁朝蕃
東風平間切平民	十五歳	士族大田朝明長男	十五歳
謝花昇	十五歳	岸本賀稚長男	十八歳
十八歳	岸本賀昌	大田朝敷	高嶺朝教
			十五歳

資料1 (一覧表番号 No.10)

これまで、沖縄県の近代統計資料は「沖縄県統計資料」(明治16年～昭和15年)が基本的な重要資料となっている。^(註7)今回見つかった「沖縄県明治十三年租税一覧表」(No.8、表-1参照)は、『沖縄縣史20 沖縄県統計集成』の「沖縄県統計資料」では紹介されていないものであり、同書付録の明治13年沖縄県統計概表とあわせて比較すると興味深い。

租税一覧には、明治13年の間切・島数、村数、反別(田・畠)とその石高、税金、戸数、人口が載せられる。内訳明細表には地税として米、麦、下大豆、他に成替品目として粟、粟粉、白大豆、本大豆、小豆、菜種子、黍、黍粉、白蕎麦、砂糖、真綿、反布が記載される。夫賃粟税(宮古・八重山の先島に賦課された税)として、成替品目の粟、白木綿布、フクイ三間筵・二間筵、安谷葉三間筵、安谷葉二間筵、海鼠、刺参、角俣、牛皮、木綿花、白菜、胡麻の数量と一部代金が示される。また、夫役錢税として金、備後綱目表筵、割蘭表筵、米、さらに浮得税(11種の植物と15種の物件に賦課された税)として棕櫚繩、塩、真綿、その他島嶼雜税(硫黄)、船税(五反帆以上)、焼酎税、銀行税などが記載される。

「国頭地方大概表」(No.13、表一2参照)には明治14年における国頭地方の租税が一覧表でまとめられている。これについても「沖縄県統計資料」にはみられないものであり、当時の国頭地方の租税や生産物の状況がわかる。内容は国頭役所所轄の間切における村数、耕地反別、官山反別、物産(藍・砂糖)、共有貯蓄(米・粟)、負債高、米石産高、内官納私得、明治十四年租税上納額、地頭代以下役俸一分が記される。

「国頭所轄間切略図」(No.12)は国頭地方の略図である。いつのものであるかは不明であるが、墨字で9間切を、朱字でムラ名を示し、間切境界、本道と支道、宿駅、島については海路を記入してある。おそらくは、上杉県令が国頭を巡回したときの略図であろう。

「沖縄縣組躍りの詞」(No.7)には「花売之縁」と「伏山敵討」の2編が収められている。上杉が沖縄県令在職中に披露されたときの組踊の台本の詞を書き写したものといわれている。

「(書類表題なし) 明治15年5月31日(No.9)日付」は、沖縄県上杉茂憲の署名と印がある。沖縄県用紙に記載され、後半は「間切吏使新旧比較説明書」が合冊されている。これは上述した明治15年5月31日、県令が政府に提出した意見書の控と思われる。(写真8参照)

表1 沖縄県明治十三年租税一覧表

	間切数	村数	反 別	高	税 金	戸数	人 口
間 切	35	592	田 3,4242,717	417,1646,443	67,5673,305	75,573	361,617
島	9		畠 8,5661,812	474,4268,226			
合		592	11,9904,529	891,5914,669	67,5673,305		
内 訳 明 細 表							
地 税			夫 役 錢 税				
品 目	員 数	代 金	貢額金 2,0159,732				
米	2,9807,456合	33,6991,574厘	成替品目	員 数	代 金		
麦	6631,307	5,1524,784	金	1,9306,077	1,9306,077		
下大豆	2010,249	1,6117,523	備後綱目表筵	1,530	262,925		
粟	2271,936	2,3347,973	割蘭表筵	1,156	153,027		
粟粉	122,443	638,405	米	1,752	18,347		
白大豆	40,850	414,628	合		1,9740,376		
本大豆	33,545	301,377	浮 得 税				
小豆	4,510	36,621	貢額棕櫚繩	1,6895,296才			
菜種子	194,604	901,146	貢額塩	80,845合			
黍	64,731	407,575	貢額真綿	40,755分			
黍粉	182,757	463,025	貢額金	84,931厘			
白扁豆	410	4,162	成替品目	員 数	代 金		
砂糖	2,8175,578	18,1213,290	棕櫚繩	1,5977,212	1518,285		
真綿	47,505	619,939	塩	80,845合	147,735		
反布	5,800	2,4848,173	真綿	99匁	693		
合		63,7830,196	米	30,426合	321,994		
夫 貢 栗 税			金	83,286	83,286		
貢額栗 1314,830			合		2071,993		
成替品目	員 数	代 金	島 嶋 雜 税				
粟	1212,667合	1,2460,153	品 目	員 数	代 金		
白木綿布	135反	135,000	硫黃	15000	196,500		
フクイ三間筵	80		船 税				
フクイ二間筵	41		品 目	員 数	税 金		
安谷葉三間筵	201		五反帆以上	48艘	19,131		
安谷葉二間筵	68		燒 酎 税				
海鼠	648		品 目	營 業 人	税 金		
刺参	432		米・黍燒酎	110	2580,456		
角侯	660斤		銀 行 税				
牛皮	800		箇 所	株 高	税 金		
木綿花	345		1	50000000	280,000		
白菜	9,734						
胡麻	9,173合						
合		1,2954,653					

表2 国頭地方大概表（明治14年）

		所轄内反別其他概略一覽表国頭役所																					
合計		島 19ヶ間切	伊江島	金武	久志	國頭	大宜味	羽地	今帰仁	本部	名護	恩納	間切名	村数	耕地反別	官山反別	物産	共有貯蓄	負債高	米石産高	内官納	十四年租税	役頭代以下
百三拾	五ヶ村	五ヶ村	七ヶ村	拾三ヶ村	拾八ヶ村	拾八ヶ村	拾八ヶ村	拾七ヶ村	貳拾ヶ村	拾八ヶ村	拾三ヶ村	拾ヶ村	百町六反四畝廿五步	三百六町三反四畝廿五步	四百四拾六町四反六畝廿五步	四百四拾六町四反六畝廿五步	製藍千斤	米拾六石六斗四升	ナシ	八百五拾石	六千五百六拾貳円	五百六拾貳円	
貳千百八拾八ヶ村歩	八反三畝拾八ヶ村歩	八反九畝拾貳町廿歩	廿壹歩	九畝拾九町八反	五百畝廿八步	五拾九町三反	六畝廿八步	貳百拾九町八反	三百五拾七町五	五百三拾八步	五百三拾七町五	五百三拾八步	五百三拾七町五	五百三拾七町五	五百三拾七町五	五百三拾七町五	五百三拾七町五	五百三拾七町五	五百三拾七町五	五百三拾七町五	五百三拾七町五	五百三拾七町五	
五千七百四拾九步	壹町歩	ナシ	三反九畝拾四町五步	六百八拾四町	○七百四拾六町五步	六百四拾六町四	六百五拾六町四	三反六畝廿九步	九反零拾九町	九反零拾九町	九反零拾九町	九反零拾九町	九反零拾九町	九反零拾九町	九反零拾九町	九反零拾九町	九反零拾九町	九反零拾九町	九反零拾九町	九反零拾九町	九反零拾九町	九反零拾九町	
三百九拾貳万三千斤	砂糖七拾貳万斤	製藍拾六万三千斤	砂糖四拾万斤	砂糖三万斤	八百斤	八百斤	八百斤	七百斤	製藍九千五百斤	七百四拾万四千斤	砂糖拾八万斤	砂糖拾八万斤	砂糖老万五千斤	五百老万五千斤	五百老万五千斤	五百老万五千斤	五百老万五千斤	五百老万五千斤	五百老万五千斤	五百老万五千斤	五百老万五千斤	五百老万五千斤	五百老万五千斤
栗六拾三石六斗	七合	米三百三拾六斗	米三拾八石	米ナシ	米ナシ	米拾九石貳斗	米拾七石九斗	米拾七石九斗	六斗	米貳拾五石	米六拾四石	米六拾四石	米六拾四石	米四拾六石	米六拾四石	米四拾六石	米六拾四石						
四万七千五百拾円	八千九百九拾六升	ナシ	五千八百拾三円	九百三拾七石	四斗	六百七拾貳石	七百八拾三石	七百八拾三石	七	六千貳百六拾	千九百三拾	千九百三拾	千九百三拾	四千九百三拾	八拾七円	八拾七円	八拾七円	八拾七円	八拾七円	八拾七円	八拾七円	八拾七円	八拾七円
三分	七分	三分	七分	三分	七分	三分	七分	三分	七分	三分	七分	三分	七分	三分	七分	三分	七分	三分	七分	三分	七分	三分	七分
九円六拾五錢四厘	万貳千三百貳拾九円	五千八百八拾七厘	五千八百八拾五錢四厘	五千八百八拾五錢四厘	四千九百三拾七円	五千九百三拾七円	五千九百三拾七円	五千九百三拾七円	五千九百三拾七円	五千九百三拾七円	五千九百三拾七円	五千九百三拾七円	五千九百三拾七円	五千九百三拾七円	五千九百三拾七円	五千九百三拾七円							
拾五錢五百貳円貳	老万五百貳円貳	拾五錢五百貳厘	八百八拾七円	九百三錢三厘	五百四拾四円	八錢九厘	五百四拾九円	七錢老厘	五百四拾九円	四百四拾九円	五百四拾九円	五百四拾九円	五百四拾九円	五百四拾九円	五百四拾九円	五百四拾九円	五百四拾九円	五百四拾九円	五百四拾九円	五百四拾九円	五百四拾九円	五百四拾九円	五百四拾九円

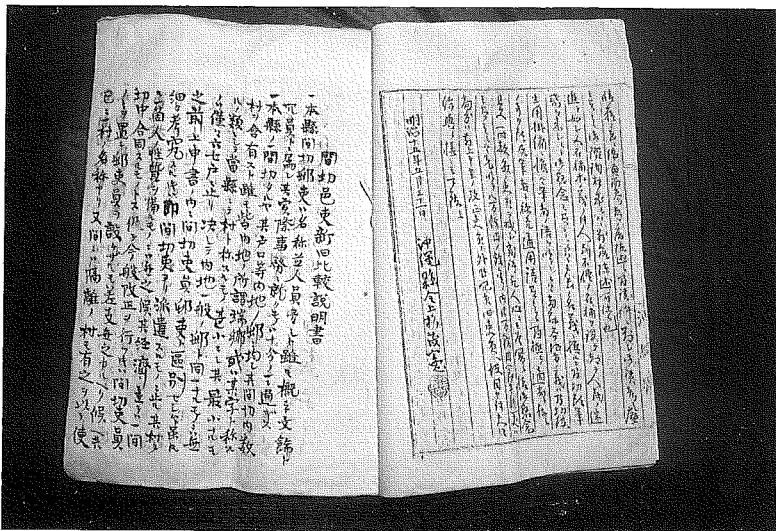
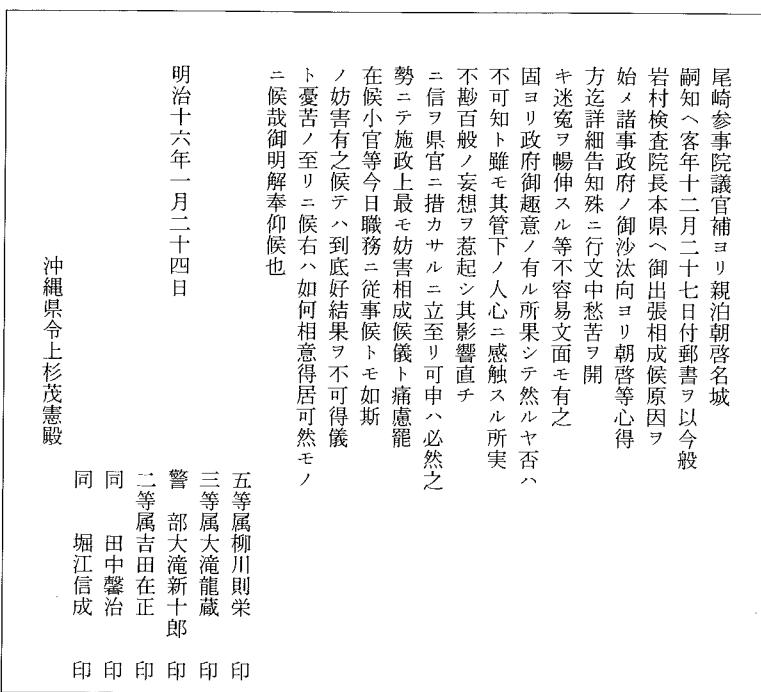


写真 8 (書類表題なし) 「間切吏使新旧比較説明書」(一覧表番号 No.9)

「明治十六年一月諸課長より事書紙面」(No.11) は1封筒1枚で、本紙は沖縄県用紙が使用され、明治16年1月24日付、諸課長から沖縄県令上杉茂憲宛に提出された文書である。(資料2参照)

『上杉家御年譜』には、同日「当県課署長の面々尾崎議官補ノ復命 並ニ本県民ニ対スル秘密通信等ノ所為ニ憤慨ノ余リ」とあり、既述のような窺書を提出したという。^(注8)



資料2 「明治十六年一月諸課長より事書紙面」(一覧表番号 No.11)

また、上記の「窺書ノ裏面ニハ萬一当事件ノ為ニ県令桂冠等ノ事アルトキハ県官一同物
辞職ヲモ為シ兼間敷意氣ヲ視ハレタリ」^(注9)とあり、政府の対応について県官不満がうっ積
していたことがみてとれる。

その他には「(規則書) 第一条~第四条」(1 級、No.14) があり、裁判事務の事、施政
上針路主義ヲ定ムル事、村吏改正之事、廃役士族等ニ恩賜金之事など當時懸案になつて
いる事項が箇条書きで記載されている。「夫役錢ノ内從来日用錢ト唱ヘシ税錢免除ノ義ニ付
上申」(No.15) は、旧藩時代からの慣行で徵収されていた租税のうち、人頭に賦課し、
きわめて人々を苦しめていた夫役錢の内の日用錢を免除するという趣旨の上申書である。
沖縄県用紙に記されている。漢詩の写しの「那覇八景・和芳韻」(No.16) も残されてい
る。

3. 上杉県令関係資料一覧

今回調査した上杉家所蔵資料（上杉管理事務所）、米沢市立上杉博物館、米沢市立図書
館の資料について一覧表で示した。これまで県史などで紹介された分については備考の欄
でその都度注記した。山形県立図書館は実際には調査していないが所在のみ掲げた。

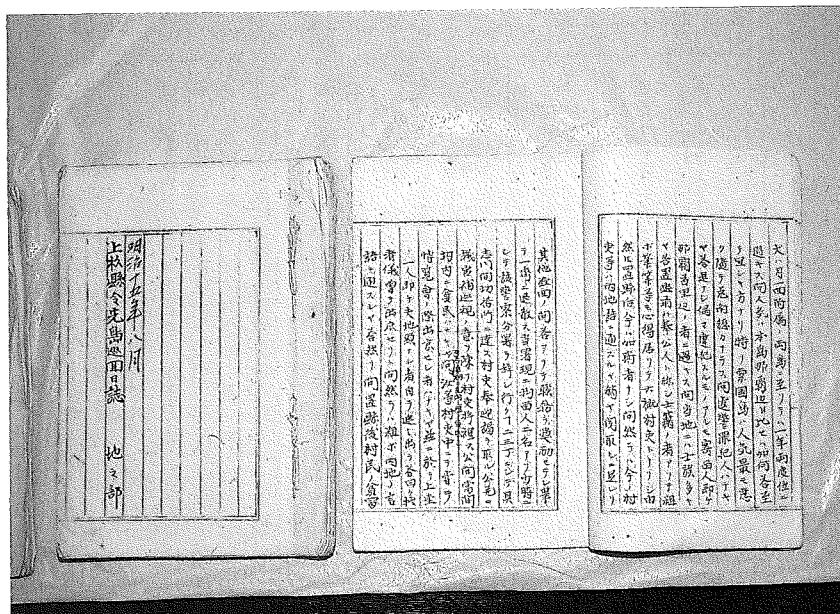


写真9 『上杉県令先島巡回日誌 地之部』(左) と同名書 天之部 (右) [No.1]

1. 上杉家所蔵資料（上杉管理事務所）

〈沖縄県令在職に関わる資料〉

No.	種別	名 称	点数	備 考
1	文書	沖縄巡回日誌	9冊	沖縄本島、先島の巡回日誌。『沖縄県史 近代4』所収
		上杉県令沖縄本島巡回日誌 島尻之部 天 沖縄本島巡回日誌 地 沖縄本島巡回日誌 人 上杉県令沖縄本島巡回日誌 付録 沖縄本島巡回日誌 付録 中頭地方之部 沖縄本島巡回日誌 付録 国頭地方之部 上杉県令先島巡回日誌 天之部 上杉県令先島巡回日誌 地之部 上杉県令先島巡回日誌 人之部	1冊 1冊 1冊 1冊 1冊 1冊 1冊 1冊 1冊 1冊 1冊 1冊 1冊 1冊 1冊	
2	〃	沖縄縣日誌、明治13~16年	20冊	県令及び沖縄県の公的記録。『沖縄県史 11』所収
3	〃	沖縄來状綴、明治14~16年	1冊	執事から東京邸宅宛の書状綴。『沖縄県史 近代4』所収
4	〃	事務引継書類 上・下	1冊	次の岩村県令への懸案引継書類。〃 所収
5	〃	琉球文伝	1綴	琉球の漢詩172首の写本。〃 所収
6	〃	沖縄縣盟約書	7枚	県官民の服務の誓約書。〃 所収
7	〃	沖縄縣組躍りの詞	1冊	花売之縁など組踊の台本の写し
8	〃	沖縄縣明治13年租税一覧表	1枚	明治13年の租税一覧表
9	〃	(書類表題なし) 明治15年	1冊	明治15年意見書、各間切吏員の新旧比較説明書などを含む
10	〃	東京勤学人名	1枚	第1回県費留学生5名の氏名一覧
11	〃	16年1月諸課長より事書紙面	1冊	県の諸課長より上杉県令宛の書面
12	〃	国頭所轄間切略図	1枚	国頭地域の間切の略図(距離も示す)
13	〃	国頭地方大概表	1枚	国頭地域の租税などの統計一覧表
14	〃	規則書1条~4条、裁判事務の事	1枚	施政を行う上での規則や裁判事務を記述
15	〃	夫役錢ノ内從来日用錢一一上申	1枚	夫役錢の内日用錢という税錢を免除する上申書
16	〃	那覇八景・和芳韻	2綴	琉球の漢詩の写し
17	書簡	沖縄縣令上杉茂憲宛書簡	50通	上杉県令宛の書簡。『沖縄県史 近代4』所収
		《差出名》 土方久光 渡辺洪基 西村捨三 立花種恭 2 鍋島直彬 4 杉浦 詮 岩城隆邦 岩村通俊 3 桜井 勉 九条道孝 池田成章 古海長義 芹澤政温 4 下条親英 岩井忠直 南部信民 4 織田信親 4 松平□正 津軽承叙 吉井信慶 渡辺千秋 万里小路通房 東久世通精 上杉斉憲 5 上杉勝賢 松平定敬 2 松平忠禮 解説不明氏名 4		

〈その他〉

18	書簡	書簡類	9通	上杉茂憲から松平忠敬他への書簡。『沖縄県史 近代4』所収
		政禮公宛上杉茂憲書簡 松平忠敬宛上杉茂憲書簡 上杉・池田宛忠順書簡 畠山宛池田書簡		上杉勝賢宛上杉茂憲書簡 岩村検査院長宛上杉茂憲書簡 池田成章宛中条政恒書簡 2 中条書記官宛西村捨三書簡
19	文書	建議書類	一	宮嶋誠一郎他による上杉茂憲宛の建議書類。〃 所収
20	"	上杉敬心公記・敬心公記付録	一	茂憲公の年代記
21	"	清風吟句集	1冊	茂憲公の俳句集
22	"	茂憲公詩集	1冊	茂憲公の詩集
23	書跡	茂憲公御書	1点	茂憲公による書。軸物
24	遺品	茂憲公勲章・勲記	8点	茂憲公の勲二等瑞宝章他の勲章と勲記
25	"	茂憲公宣旨叙位	5点	茂憲公の従四位他の宣旨叙位
26	"	遺品茂憲公御官服	1式	茂憲公の御官服
27	"	令夫人正装礼	1式	茂憲公婦人の正装服
28	"	印章類	一	茂憲公の用いた印章
29	"	茂憲公関係写真	5点	茂憲公や家族の写真

2. 米沢市立上杉博物館

30	書跡	七言絶句（上杉茂憲）	1点	茂憲公による書。軸物。
31	"	寄せ書き（〃）	1点	茂憲公他の寄せ書き。軸物。
32	写真	肖像画（上杉斉憲・茂憲、	1点	原写真を複製したもの。軸物。

3. 米沢市立図書館

33	文書	告諭案（米沢藩知事）	1冊	廃藩置県に関わる旧藩主への諭辞書類。1871
34	"	上杉茂憲公小伝	1冊	米沢郷土館 1930
35	"	茂憲公御年譜中書	1冊	杉原謙による茂憲公年譜作成の記録。1931
36	"	〃 修譜写真誌	1冊	〃 "
37	"	〃 御年譜資料	1冊	〃 "
38	"	〃 御事歴の一班	1冊	〃 "
39	"	〃 御年譜編輯之記	1冊	〃 "
40	"	〃 御年譜初稿（47冊）	47冊	〃 "

4. 山形県立図書館

41	文書	池田成章著『過越し方の記』	7冊	県令の書記官を務めた池田による記録（在任中を含む）。
----	----	---------------	----	----------------------------

おわりに

沖縄と米沢とのかかわりは第二代沖縄県令上杉茂憲以外にもある。米沢市立図書館では米沢市史編纂室の青木昭博氏の御教示もあり以下のようなことも明らかになってきた。

沖縄では戦前首里城正殿の保存に尽力したことで知られる伊東忠太は米沢出身であった。建築家・工学博士である伊東忠太〔1867～1954〕は、米沢市座頭町に生まれた。大正12年7月に、鎌倉芳太郎とともに来県し20日間滞在した。その間、墳墓・橋梁・社寺・城・民家などを建築学的に調査し、それまで顧みられることのなかった琉球の建築・文化を紹介した『琉球紀行』を著した。取り壊し寸前であった首里城正殿が、1925年に旧「古社寺保存法」によって国宝に指定されたのも伊藤の働きによるもので、その功績は高く評価される。

沖縄県立第二高等女学校校長を務めた千喜良英之助も米沢市芳泉町生まれである。第十七・十九代の米沢興譲館高校校長、米沢女子短期大学初代学長を務め、昭和7年に沖縄県女子師範学校教諭兼舎監に任命され、同10年には沖縄県立第二高等女学校校長兼教諭となった。そして昭和16年に米沢興譲館高校校長に転任するまでの約6年間沖縄県の女子教育に尽力した。

また、日本民芸協会の田中俊雄〔1914～1953〕は米沢市御小者町の機業の長男として生まれた。1937年に柳宗悦の主宰する日本民芸協会に入り、織物の美学について研究する。沖縄の織物・染色について興味を持ち、1939年3月から翌年の8月にかけて日本民芸協会のメンバーらとともに3回にわたって沖縄を訪れた。滞在日数は1年をこえ、その間沖縄本島をはじめ久米島、宮古島、石垣島、与那国島の各島をまわり織物の調査を行った。彼が収集した沖縄の織・染めの膨大な資料は現在米沢に残され、田中駒蔵氏が所蔵・管理しているという。

このように米沢と沖縄を結ぶ人的な交流があり、上杉家所蔵の資料に加えて、上述のような資料が揃うならば展示会の企画も考えられる。

最後に、上杉家資料の調査では上杉管理事務所の上杉虎雄所長が一日がかりの調査に立ち合っていただき御礼の申し上げようがございません。また、米沢市立上杉博物館では、木村琢美館長、学芸員の角屋由美子氏と星努氏、米沢市立図書館では志賀信彦館長、米沢市史編纂委員の小野榮氏、同編纂室の青木昭博氏にいろいろとご教示頂き大変お世話になりました。ここに記して深謝申し上げます。

<脚注>

- (1) 『上杉家御年譜 二十 茂憲公 (2)』、p 587
- (2) 同書、p 604
- (3) 同書、p 605
- (4) 中山盛茂「上杉茂憲」『琉球史辞典』など他
- (5) 『上杉家御年譜 二十 茂憲公 (2)』、p 694
- (6) 池田成章「過ぎ越方の記」『那霸市史 資料篇第二巻中の四』、p 645
- (7) 琉球政府『沖縄県史 20 沖縄県統計集成』に掲載された沖縄県統計書
- (8) 『上杉家御年譜 二十 茂憲公 (2)』、p 678
- (9) 同書、p 679

<参考文献>

- 琉球政府 『沖縄県史 11 上杉県令関係日誌』 1965年
- 沖縄県教育委員会 『沖縄県史料 上杉県令沖縄関係資料 近代4』 1983年
- 米沢温故会編 『上杉家御年譜 二十 茂憲公 (2)』 1988年 原書房
- 金城 正篤 「上杉茂憲」『沖縄大百科事典』 1983年 沖縄タイムス社
- 中山 盛茂 「上杉茂憲」『琉球史辞典』 1969年
- 辺土名朝有 「上杉茂憲」『沖縄県史 沖縄近代史辞典』 1977年
- 仲地 哲夫 「池田成章」『沖縄県史 沖縄近代史辞典』 1977年
- 池田 成章 「過ぎ越方の記」『那霸市史 資料篇第二巻中の四』 1971年
- 米沢市教育委員会 『上杉鷹山公とその時代』 1993年 米沢上杉文化振興財団(米沢市立上杉博物館)
- 琉球政府 『沖縄県史 20 沖縄県統計集成』 1965年
- 琉球政府 『沖縄県史 21 旧慣調査資料』 1968年

津和野旧藩家の琉球楽器について

比嘉悦子

(琉球大学非常勤講師)

The Uza-gaku Instruments of Tsuwano Feudal Clan, Shimane Prefecture

Etsuko HIGA

(Division of the College of Law and Letters, University of the Ryukyus)

The uza-gaku ("seated music") is a chamber orchestra of Chinese instruments and was performed at the Ryukyuan court as well as at Edo Castle when the Ryukyuan tribute mission greeted the new Shogun in Edo. The tradition of uza-gaku died after the abolition of the Ryukyuan kingdom, however, the project of restoring this music began in 1993 under the sponsorship of Okinawa's prefectural government.

The existence of two collections of uza-gaku instruments -- one in the Nagoya Tokugawa Museum and another located in the Mito Tokugawa Museum--has been known, and the collection of 20 instruments of Nagoya was brought to and exhibited in the Okinawa Prefectural Museum in November, 1993. However, there is one more set of uza-gaku instruments which was sold to the prefectural museum in 1987. This set, including 18 instruments, is said to have been kept in the Tsuwano feudal family of Shimane Prefecture. This paper examines the Tsuwano instruments in comparison with the other two collections.

はじめに

平成4年11月に首里城が復元されて以来、首里城に関する研究がさまざまな分野で手懸けられるようになってきた。音楽を研究する者の一人として、首里城で演奏されていた三絃楽、儀礼の音楽、そして路次楽、御座樂等への興味はつきないが、平成5年度より沖

縄県観光文化局文化振興課において御座楽の復元を目指す御座楽復元研究会が設置され、その研究会の下で沖縄県立博物館所蔵の津和野旧藩家琉球楽器を調査する機会を得た。

調査は平成5年9月27日と12月6日の2回、いずれも県立博物館内において行なわれた。第1回目の9月27日は、筆者を含む御座楽復元研究会の5人のメンバーで琉球三線1丁（久場春殿型）を除く17点の中国系楽器を対象に行なった。第2回目は、沖縄県立芸術大学で催された第44回東洋音楽学会大会（12月3、4日）に出席のため来県されていた前東洋音楽学会会長で『古代シルクロードの音楽』（1982年、講談社）の著者であられる岸辺成雄氏と東洋音楽学会員数名（中国音楽研究に携わる人々）に当時県立博物館で催されていた「芸能関係資料企画展」で展示されていた10点ほどの津和野旧藩家琉球楽器（琵琶、胡弓、揚琴、七絃琴、哨吶、横笛、八角弦など）を見てもらい、それぞれの意見を出してもらうというものであった。

御座楽関係の楽器は旧琉球王家尚家には残っておらず、現在確認されているのは尾張徳川家の20点、水戸徳川家の22点、そして津和野旧藩家に伝わったといわれる県立博物館所蔵の18点のみである。しかし津和野旧藩家の琉球楽器については疑問点が残されており、このレポートでは琉球王府における中国系音楽の概要と御座楽の楽器、そして2回の調査によって得られた津和野旧藩家琉球楽器に関する見解を中間報告の形で述べてみたい。

琉球王府における中国系音楽

琉球王府の宮廷においては三線が保護され、冊封使節や薩摩の役人たちをもてなすための舞踊、音曲が宮廷楽として発展し今日に伝承されてきた。しかしそれ以外にも御座楽や路次楽と呼ばれる中国系の音楽が演奏されていたことはあまり知られていない。1650年、向象賢が編纂した『中山世鑑』に「洪武二十五年壬申、大明皇帝、賜閩人三十六姓、為紀綱之役。今ノ久米村ハ、其後胤也。我朝、大明ノ礼樂ヲ用ル事モ、是始」とあり、1392年（洪武25）、大明皇帝が閩人三十六姓を琉球に賜った時から、琉球王朝でも明国の礼楽が始まるとある。また『琉球国由来記』（1713年）卷四の「楽器」の項には「当國楽、察度王尚巴志王之世間、自中国伝受來乎、不可考。有座樂〈是為太平樂。奏于座中故、亦曰座樂〉、大樂、笙家來赤頭樂、路次樂等也」とあり、「琉球の国楽は、察度や尚巴志王の時代に中国から伝えられたのかどうかはっきりしないが、座樂、大樂、笙家來赤頭樂、路次樂がある」としている。国楽として座樂（=御座樂）、路次樂、そしてその他の礼楽が存在したことが伺える。大樂や笙家來赤頭樂については今だその音楽がどのようなものであったのか資料も乏しく、王朝末期まで伝承されていたのかどうかも解らない点があって、

明治生まれの古老たちの口からは聞かれることもなかった。しかし、御座楽や路次楽については山内盛彬（1890～1986）著の『琉球王朝古謡秘曲の研究』にその楽譜の断片も残っていて、廃藩置県直前まで王府で演奏されていたことが確認できる。

「路次楽」は道中樂の一種で国王の行幸や江戸下り、冊封使行列などに伴って演奏された。銅角、喇叭、哨吶、銅鑼、両班、鼓などの中国系吹奏楽器による鼓笛隊のようなもので、演奏の様子は江戸上りや冊封使行列絵巻などから伺い知ることができる。現在でも哨吶と諦め太鼓を中心とした路次楽が一部の村の民俗芸能として伝承されており、首里では阿波連本勇氏（1935年生まれ）を中心とする沖縄県民俗芸能路次楽保存会によって復元、伝承されている。

一方「御座楽」は明朝、清朝の宮廷樂に影響を受けたものと思われる中国樂器の編成による室内樂である。主に冊封使歛待の席や謝恩使、慶賀使として江戸に上った使者たちによって江戸城や薩摩屋敷で演奏された。御座楽の演目、演奏形態、樂器の種類などについては、『通航一覧』や江戸上り絵巻、その他本土側の江戸上り関係資料から得ることができるが、御座楽は路次楽と異なって、樂童子と呼ばれる身分の高い首里王府高官の子息たちによって演奏されていた。『通航一覧』による記録では、承応2年（1653）の江戸上りの時から江戸城内において御座楽が演奏されるようになり、文化3年（1806）の江戸上りまでの奏楽の次第が残されている。天保13年（1842）の江戸上りに関しては、水戸徳川家の彰考館文庫に所蔵されている『琉球人江戸着行列図』（天保13年11月8日）や岩瀬文庫蔵の『琉楽帖』に樂師、樂童子の名簿や奏楽の次第が記録されていてその年も御座楽が江戸城において演奏されたことが解るが、嘉永3年（1850）の最後の江戸上りに関する奏楽の次第の記録は今のところ見当らない。

江戸上りにおける御座楽の演奏とその樂器について

『通航一覧』によると、承応2年の江戸上りの奏楽では太鼓、どら、二つかね、ひちりき（哨吶）、はんしやう（横笛）などの樂器で「太平樂」、「萬歳樂」、「難來樂」の3曲を演奏したことが記されている。また、享保3年（1718）の記録には奏楽の次第が〈樂〉、〈唱曲〉、〈琉歌〉の項目に分けられ、〈樂〉は哨吶、横笛、鼓（小銅鑼、新心）、銅鑼、三金、三板の樂器構成で「萬年春」、「賀聖明」、「樂清朝」、「鳳凰吟」、「慶皇都」の5曲が演奏されている。〈唱曲〉は歌入りの樂曲と思われるが、明曲と清曲の区別がされており、明曲として「日麗中天」、「春色嬌」、「詩歌事」、清曲として「乾道泰」と「春霞鶯」が演奏されている。〈唱曲〉の樂器編成は琵琶や胡弓、そして三弦や四弦の弦樂器に、管、三金、拍板などが加わり、弦樂器中心の音楽であったことがわかる。明曲と清曲の間には樂

器編成上の区別は明確でない。〈楽〉と〈唱曲〉に演奏される楽曲は全て中国の音曲で、それに使用された楽器も中国楽器であったことは歴然としている。しかし、最後に一曲だけ琉楽の演奏が許された。それが〈琉歌〉であるが、新井白石の『琉球来聘日記抄』による天和2年（1682）に記録された歌詞をみてみると、それが現在の「かぎやで風節（御前風節）」の歌詞と一致する。

琵琶、胡弓、月琴、揚琴、三絃、四弦、長線の弦楽器類、笛、哨吶の管楽器類、そして拍板や鼓、銅鑼などの打楽器類の20数点が一回の江戸上りに持参されたものと思われるが、それらの楽器は尚家には残っておらず、現存するのは尾張徳川家の20点、水戸徳川家の22点、そして昭和62年4月に沖縄県立博物館に移管された島根県津和野旧藩家の琉球楽器18点のみである。その中でも、寛政8年（1796）の江戸上りの時に献上されたと思われる尾張徳川家の琉球楽器20点は現在名古屋市の徳川美術館に保存されており、平成4年10月27日から12月20日まで開催された復帰20周年記念特別展「琉球王国」では県立博物館でも展示された。これらの琉球楽器については名古屋徳川美術館長であられる徳川義宣氏自身が書かれた「琉球王府式楽とその楽器について」（京都国立近代美術館編『沖縄の工芸』、1975年）や「琉球王朝とその式楽」（彦根博物館編『琉球王朝の美』、1993年）などの論文に詳しく説明されていてその全容をつかむことができる。

水戸の徳川家に保存されている琉球楽器はまだ一般展示がされていないため、楽器そのものを見る機会を得ないが、水戸徳川美術館編纂の『水戸徳川家名宝展』（1973年）に出展された尾張徳川家の琉球楽器の解説を徳川義宣氏が書いておられて、その中で尾張徳川家と水戸徳川家の琉球楽器を一点ずつ寸法を示しながら比較し、紹介されている。同解説によると、尾張家には琉球人に描かせたという奥書のある『琉球楽器図巻』があり、奏楽曲名とその構成楽器および片仮名つきの曲詞が記録されている『琉球楽演奏記録』と『御小納戸日記』があるという。また、今のところ水戸家の琉球楽器はいつの時代に水戸家へ献上されたものなのか知られていないが、水戸家の楽器には片仮名つきの名札があり、当家の『御道具御入記』にも記載されているとのことである。

津和野旧藩家の琉球楽器について

尾張徳川家の琉球楽器と水戸徳川家の琉球楽器に続いて出現したのが津和野旧藩家の琉球楽器である。この楽器は宮崎県の骨董品屋「志野」より持ち込まれ、県立博物館は島根県の津和野旧藩家に伝わったといわれる18点の楽器を昭和62年4月14日に購入した。当時、国際交流基金研究員として沖縄に滞在していた福建師範大学の民族音楽研究家、玉耀華氏はその当日の4月14日と4月21日の2日間でこれらの楽器を調査し、氏の著書『琉

球・中国音楽比較論』の中で詳細に報告しておられる。表1は、先述の『水戸徳川家名宝展』の解説にある尾張徳川家と水戸徳川家所蔵の琉球楽器の比較リストを参考に津和野旧藩家の琉球楽器を合わせて比較してみたものである。

表1 楽器の比較

	尾張徳川家の楽器	水戸徳川家の楽器	津和野旧藩家の楽器
I. 哨吶	長さ：45.3 口径：11.2	長さ：46.3 口径：11.2	長さ：46.0 口径：13.0
II. 鼓	台高72.7 台幅56.3 径34.0	台高72.7 台高56.3 径33.4	なし
III. 小銅鑼	径：16.0	径：22.0	なし
IV. 鍉子	総長：44.8 鐘径：10.9	総長：42.5 鐘長：9.3	なし
V. 銅鑼	台高81.1 台幅97.6 径34.5	台高81.1 台高97.6 径？	なし
VI. 三枚／三板	長さ：8.5	長さ：8.5	(拍板) 長さ：6.3
VII. 新心	直径：16.0 中径：7.0	(ロンツウ) 直径：16.8 中径：6.5	なし
VIII. 銅拍子	なし	直径：23.0 中径：13.0	なし
IX. 両班／挿板	長さ：27.5	長さ：27.5	なし
X. 橫笛	長さ：70.3	長さ：69.9	長さ：65.0
XI. 琵琶	胴棹：80.0 胴張：23.3	胴棹：82.9 胴張：28.0	胴棹：81.0 胴張：25.5(木澁あり)
XII. 揚琴	幅94.9 奥行27.3 高さ6.4 (夜雨琴)	? (破損)	(1)幅77.5 奥行28.5 高さ10.5 (2)幅68.0 奥行25.0 高さ3.5
XIII. 提箏	総長：60.0	総長：55.0	なし
XIV. 月琴	総長：83.0 胴径：40.8	総長：95.5 胴径：42.5	(1)総長：67.0 胴径：40.8 (2)総長：64.5 胴径：35.5 (3)総長：68.0 胴径：36.5 (4)総長：67.0 胴径：36.0 (5)総長：63.5 胴径：37.0
XV. 胡琴	総長：84.5	総長：78.2	なし
XVI. 二絃／二胡	総長：91.5 胴径：8.0	総長：91.5 胴径：8.9	総長：80.0 胴径：10.0(*六角胴)
XVII. 四線	総長：102.5	総長：101.0	総長：99.0 (八角絃)
XVIII. 管(堅笛)	総長：50.7	総長：51.5 (洞簫)	なし
XIX. 十二律	なし	横幅：35.2 縦：36.0 厚さ3.5	なし

XX. 長線	総長：112.5 胴径：30.0	なし	なし
XXI. 三絃	総長：101.5 棒長さ：83.2	総長：?(破損) 棒長さ：81.0	なし
XXII. 琉球三線	総長：79.5	総長：80.0 (2丁あり)	総長：79.0
XXIII. 七弦琴	なし	なし	総長：118.5
XXIV. 膜子弦	なし	なし	総長：86.0 胴径：11.0
XXV. 京胡	なし	なし	(1)総長：50.0 胴径：4.0 (2)総長：51.0 胴径：5.0

(単位はセンチメートル)

この比較表によってわからることは、尾張徳川家と水戸徳川家に献上された琉球楽器はその種類、また楽器そのものの大きさなどがよく近似しているということである。両家にはXIXとXXを除くIからXXIIまでの楽器がそれぞれに揃っており、VIIの銅拍子とXIXの十二律は尾張家には無く水戸家のみに、XXの長線は水戸家に無く尾張家のみに伝わっている。また水戸家には琉球三線が2丁も献上されている。両家に献上された琉球楽器は記録による他の江戸上り時の御座楽楽器とも対応、類似する。しかし、津和野旧藩家の琉球楽器はその楽器の種類や、大きさ(サイズ)、形の上から他の御座楽楽器の構成とは多少異っていると言わなければならない。『通航一覧』に出てくる御座楽の次第や使用された楽器の種類をみても、IからXXIIまでの楽器群は江戸上りで定例化していた御座楽の楽器といえる。

津和野旧藩家のみに伝わったとされるXXIIIの七弦琴は通常独奏楽器として演奏されることが多く、江戸上りの使者の中に七弦琴をたしなむものがいて江戸城内の奏楽とは関係なく持参したとも考えられるが、尚敬王の冊封(1719年)のために来琉した徐葆光の『中山伝言録』に「前使張学礼が命令して学ばしたという琴曲はすでに伝えられておらず、ただ琴譜のみが残っていた」ということが記載されており、その時国王は、再度那霸官毛光弼を従客の陳利衆の処に遣わして琴を習わしめ、琴を一具もらい受けている。しかしその時以来、琉球には七弦琴の伝承された記録は全くない。また津和野旧藩家の七弦琴の琴面の裏には、毛筆で〈張越製〉と製作者の名前のようなものが書かれているが、岸辺成雄氏やその他の中国音楽研究者たちの意見では、塗りの手法が比較的新しくて、清朝崩壊後に製作されたものと思われるとのことだった。

XXIVの膜子弦とXXVの京胡(2丁)も津和野旧藩家の琉球楽器だけに含まれるものであるが、これらの中国胡弓は劇音楽に用いられる楽器で、京胡は京劇の、膜子弦は台湾の歌仔戲などの主要楽器である。劇音楽の中での胡弓の使用頻度は高く、弓にまつやにを

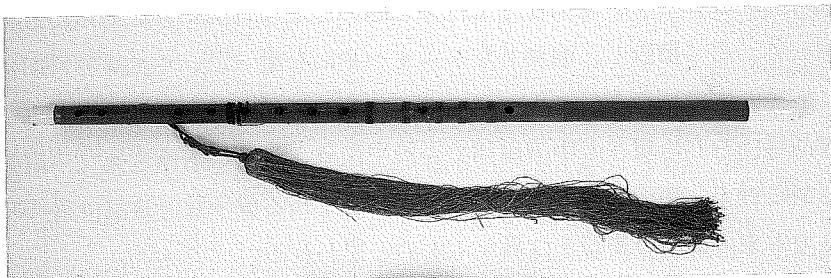
塗る時間ないということで、京胡などでは棹と胴のつなぎ目あたりにあらかじめまつやにをつけておいて、弓で擦弦し、演奏しながらまつやにを塗っていく。津和野旧藩家の京胡のひとつにも棹と胴のつなぎ目にまつやにをつけたものがあった。二絃とか二胡とよばれた御座楽の胡弓はむしろ現在の中国南部や台湾で伝承されている南音楽（＝南管楽）で使用される二胡に近く、津和野旧藩家の琉球楽器に含まれる殻子弦と京胡は後の時代に加えられたもので本来の御座楽楽器とは異なるものと思われる。

IからXXIIまでの楽器の中でも、津和野旧藩家の楽器にはIIの鼓、IIIの小銅鑼、IVの銚子、Vの銅鑼、VIIの初心、VIIIの銅拍子、IXの両班、XIIIの提箏、XVの胡琴、XVIIの豎笛、XIXの十二律、XXIの（中国）三弦が欠如している。逆に御座楽楽器と思われるのはIの哨吶、VIの三板（拍板）、Xの横笛、XIの琵琶、XIIの揚琴、XVIの月琴（5点）、XVIIの二胡、XVIIIの四線（八角弦）、XXIIの琉球三線の9種類の楽器である。

津和野旧藩家の琉球三線はすでに久場春殿型ということがわかつっていたため、9月と12月のいずれの調査でも調査対象にはしなかったが、二回の調査を通して得られた結論を先に言うと、島根県津和野旧藩家に伝わったといわれる琉球楽器のうち、そうであるだろうと断定できるのはXの横笛とXVIIの八角弦、そして久場春殿型の琉球三線の3点だけである。

津和野旧藩家の横笛は尾張家や水戸家に伝わる横笛にくらべて少し短いが、王耀華氏によると清代の『皇朝禮器図式』に見られる仲呂笛と類似しており、氏の著書『琉球・中国音楽比較論』に示された寸法比較図を見てもほぼ同じ型の笛であることがわかる。この笛は見た目にも古い竹製の笛で、第1から第4指孔にかけて裂け目ができていて現在は使用不能である。しかし第6指孔より少し端に寄った裏側の飾孔に掛けられた朱の飾り房は、徳川家の他の楽器にもつけられた朱色の飾り房と色、材質などが酷似して琉球的である。

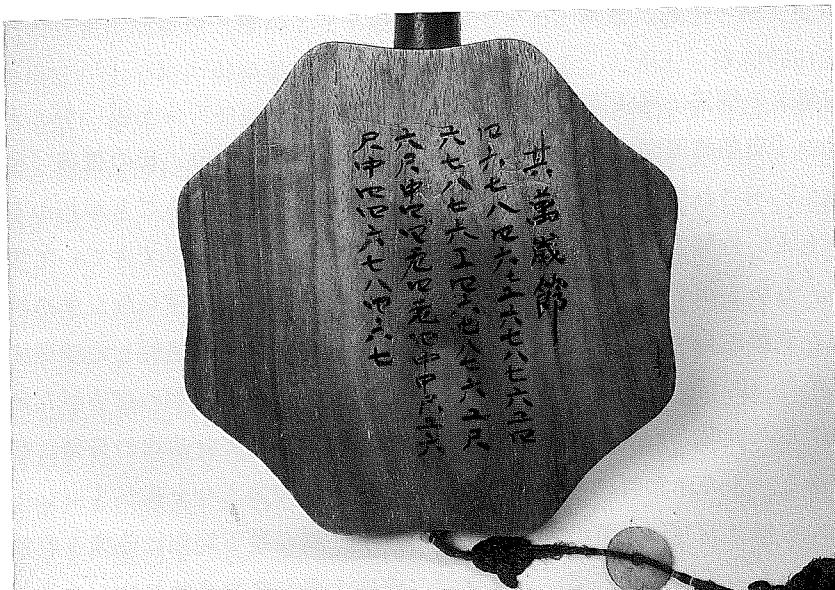
XVIIの八角琴（四線）は木肌をそのままに残した四弦楽器で、胴の部分が八角になっているところから八角琴とも呼ばれるという。王耀華氏の著書では清代の月琴に類似するということである。この津和野の八角琴は、尾張家保存の四線より全長が3センチほど短いが、構造的にも似ており、木肌の古さも感じられる。胴の最下端部に琉球王府独特の朱色の房もついている。そして胴の裏には墨字で、琉球古典音楽の楽曲のひとつである「其萬歳節」という題字と四行の工工四の楽譜が書き留められている（写真③参照）。書体も墨字も古く、少なくとも200年ほど前に琉球の使者が大和に持参した楽器であろうと思われる。



写真① 津和野旧藩家の横笛



写真② 津和野旧藩家の四線



写真③ 津和野旧藩家の四線（胴の裏面）

その他の楽器の問題点

上で論じた七弦琴、殻子弦、京胡、横笛、八角琴、そして久場春殿型の琉球三線以外の楽器については、それらが江戸上りの琉球の使者たちが使用した楽器と断定するにはいろいろ

いろいろな問題が残る。それぞれの楽器に対する疑問点と問題点を下に記すが、今後これらの楽器に関しては明朝、清朝時代の中国楽器との照合、漆や塗り、その他の材質の専門的鑑定を待つことにしたい。現在の時点では、これらの楽器が確かに津和野旧藩家から出たものであるかないのかも調査されておらず、尾張家や水戸家に残る『楽器図鑑』や『御道具御入記』にあたいする文書も出ていない。

I. 哨吶………①材質が全体的に新しい。

②尾張家、水戸家のものに比べてラッパの口径が大きく、吹き口も新しいタイプである。

IV. 拍板………①尾張家、水戸家の三板が全く同じ長さの寸法であるのに対して、津和(三板) 野旧藩家の楽器は2センチほど短い。

②水戸家のものに関してはよくわからないが、尾張家のものは三板と呼ばれていても5枚の拍板で、金粉を塗って美しく装飾が施されている。それに対して津和野旧藩家のものは、木肌のままの3枚の拍板である。

XI. 琵琶………①寸法の比較で見る限り、水戸家の琵琶は尾張家のものより少し小さく、津和野旧藩家の琵琶は両家のものの中間に位置する。いずれも清朝時代の琵琶であることが確認される。

②しかし、津和野旧藩家の琵琶には大和の筑前琵琶などで使用する木撥がついていて、琵琶の表面の中央、絃を演奏する処にその木撥があたったと思われる傷が確認される(よく演奏されたような傷である)。尾張家の琵琶にはこのような傷は無く、演奏は指の爪でなされたようでは撥はついていない。

③胴の裏面は黒漆の上に螺鈿が施されているが、いわゆる長崎螺鈿と称されるもので、着色された貝で花と蝶が描かれている。

④背の項には、漢文の対句「一撥白雲晩・四弦黃葉秋」と書かれている。

⑤楽器を入れる袋には、表面に「鳳調龍吟 辛亥歲吟 鈍佛」とあり、裏面には「裂帛 半月文弦出蕭面安金鵝居士錄」という漢文詩が書かれている。

XII. 揚琴………①津和野旧藩家には2台の揚琴が伝えられているが、大きさは尾張徳川家のものと比べると最大幅の横幅が約20センチ前後小さい。

②津和野(2)とされた揚琴はかなり古いものだと思われ、弦も細く、切れ

ているものが多い。また演奏者の便宜のためと思われるが、琴面の2本の弦柱に添って中国の工尺譜の譜字が書かれている赤色の細い紙が張ってある。琉球人が張ったことも十分考えられるが、中国でも未熟な演奏者がよくやる習慣なので今のところ何ともいえない。

③津和野(1)の揚琴はかなり問題のある楽器で、まず、蓋の上に「涼入堂林鴻年」という金の筆文字が記されていることだ。王府時代の金文字であれば沈金か箔絵の技法に依らなければならないと思うのだが、この楽器の蓋に施された金文字は近年のエナメル性インクによる筆書きのようで、最近になってから書き加えられたものではないかと思われる。

④またこの津和野(2)の揚琴の弦はギターのスチール弦で弦の留め方も津和野(1)の古いタイプと違ってギター弦の留め方がなされている。更に、琴面中央に紅型模様の布が張られているが、材質は新しく、改竄された可能性が強い。

X IV. 月琴……①津和野旧藩家の琉球楽器には5点の月琴があくまれている。いずれも四弦五品（弦柱＝フレットが五本）で構造的には同じだが、各部位の長さには多少の差異がある。5点の月琴に施された装飾、漢詩などについては王耀華氏の『琉球・中国音楽比較論』に説明されているので、ここでは省略する。

②しかし、尾張家と水戸家の月琴が総長83.0～95.5センチなのに対し津和野の月琴はいずれも63.5～68.0と短い。よって胴径も小さく、おしなべて小振りである。特徴的なのは棹の短いことで、このようなタイプの月琴は長崎を中心に伝承されている日本の明清楽で使用されている。

X V. 二胡……①水戸家の二胡は胴径が約1センチ長いが、尾張家と水戸家の二胡は総長が全く同じでほぼ同種の楽器とみなしていいとおもう。それに対し津和野旧藩家の二胡は、総長が約10センチ短く、胴径は1～2センチ長い。

②尾張家と水戸家の楽器の胴が樽型なのに対し津和野旧藩家のものは六角形である。更に尾張家の二胡の胴面の皮は美しい金粉が塗られているので牛皮のようななめらかな皮と思われるが、津和野旧藩家のものには蛇皮がはられている。

③尾張家の二胡の棹の先端は龍頭をかたどってあり金粉が塗られてい

る。そして胴の周りは黒漆地に箔絵が施されて、弓の棹は朱色である。一方、津和野旧藩家の二胡は糸巻きと弓の棹の部分が木肌で、他の部分は黒漆が塗られていて、現代中国でよく使用されている二胡に近い。

まとめ

以上、調査を通して津和野旧藩家の18点の楽器を尾張徳川家、水戸徳川家の琉球楽器と比較しながら点検してみたが、これらの楽器は今後更に詳しい調査や鑑定を待たなければ断定できない、問題の多い楽器であるという結論に達した。三線1丁を除く17点の中国楽器の中には、(1)果たして琉球の江戸上りの使者が実際に持つて行ったものなのかと疑問に思うもの、(2)江戸城で演奏された御座楽樂器と同種ではあっても尾張家や水戸家の樂器と同じ清朝代のものであるかどうかと思うもの、(3)年代的には清朝代であっても構造的、装飾的に多少の違いをみせるものなどがあつて一概に江戸上りの使者が津和野旧藩家に献上したものと断定するのにはあまりにも疑問な点が多すぎる。

現在の段階では、横笛と四線、そして琉球三線の3点の楽器により琉球的な要素が現われていて、この3点はおそらく琉球の使者によって大和へ持ち込まれた楽器であろうと判断する。しかし、横笛と四線に関してはさらに専門的な鑑定も必要であろう。また何故、津和野旧藩家にこのような楽器が残っていたのか、琉球の使者と津和野旧藩家の接触を裏づける歴史資料も皆無で、今後の調査・研究が待たれる状態である。

文献

新井白石『琉球來日記抄聘』

王耀華『琉球・中国音楽比較論』那覇出版社（1978年）

向象賢『中山世鑑』（1650年）

徐葆光『中山伝信録』（1719年）

徳川義宣「琉球王朝とその式楽」彦根博物館編『琉球王朝の美』（1993年）

徳川義宣「琉球王府式楽とその樂器について」京都国立近代美術館編『沖縄の工芸』
(1975年)

徳川義宣「154 琉球樂器」水戸徳川博物館編『水戸徳川名宝展』（1973年）

山内盛彬『琉球王朝古謡秘曲の研究』民俗芸能全集刊行会（1964年）

『通航一覧』

『琉球國由来記』（1713年）

『琉球人江戸着行列図』（1842年）

<短報>

最近沖縄で目撃及び保護された興味深い鳥類

嵩原建二

(沖縄県立博物館)

The Interesting Birds that were Observed and Given Medical Care Recently in the OKINAWA Islands (1993-1994).

Kenji TAKEHARA

(Okinawa Prefectural Museum)

はじめに

1993年の秋季から1994年の冬季・春季にかけて、県内各地で数少ないまれな冬鳥や迷鳥がしばしば目撲されている。また、県立博物館に持ち込まれる傷病鳥の中にもいくつかの記録的に興味深い鳥類が含まれている。

筆者はこうした鳥類を目撃及び保護する機会があり、また沖縄野鳥研究会や沖縄野鳥の会会員等によって野鳥情報や傷病鳥の記録が寄せられた中で、最近の沖縄における鳥類の記録としては興味深いと考えられる種を抜粋して、ここにまとめて報告する。なお、本報告における鳥類の配列や学名の扱いについては、日本鳥学会(1974)にしたがった。

本報告をまとめるにあたり、財団法人沖縄こどもの国の比嘉源和氏、金城輝雄氏、瀬嵩政志氏、福山悦子氏の各氏は鳥類の保護飼育や治療に直接あたり、また貴重な鳥類情報を提供していただいたので感謝申し上げる。また、日本鳥類保護連盟の柳澤紀夫氏、日本野鳥の会八重山支部の崎山陽一郎氏、沖縄野鳥の会の吉里伸氏と山城正邦氏、沖縄野鳥研究会の比嘉邦昭氏と大城亀信氏、沖縄昆虫同好会の佐藤文保氏、さらに林中拓也氏、又吉良雄氏、伊良波彌氏には鳥類情報を提供していただいた。また沖縄県立博物館の久貝勝盛氏、瀬名波任氏には調査に協力していただき、貴重な助言をいただいた。ここに記して感謝申し上げる。

興味深い鳥類の保護及び目撃記録の状況

1、フルマカモメ *Fulmarus glacialis rodgersii* Cassin

〈ミズナギドリ目ミズナギドリ科〉

1993年11月7日17時頃、沖縄島北部の金武町屋嘉において、道路脇にうずくまっているところを林中拓也氏によって保護された。その後沖縄野鳥の会を経由して、筆者よって11月8日に沖縄こどもの国に収容された（写真1）。同園で獣医や飼育担当者によって体力の回復が図られたが、治療のかいもなく1993年12月15日ころ死亡した。

本種の県内での記録は、嵩原（1990）によって、1987年1月4日に沖縄島北部の名護市伊差川で保護された記録が報告されている。したがって、今回の記録は2例目の記録であろう。

本種は千島・アリューシャン・ベーリング海域の寒流域に最も優占する海鳥であり、日本では三陸沖や銚子沖（まれ）まで南下するとされている（世界文化社、1984）。このことから、おそらく今回の記録が日本における最南限の記録であろう。

〈保護時の計測値〉

体長：43cm、尾長：14.2cm、翼長：31.0cm、開翼長：80cm、嘴峰：36.44mm

附蹠：53.41mm、体重：390g

2、コウノトリ *Ciconia ciconia boyciana* Swinhoe

〈コウノトリ目コウノトリ科〉

1993年11月に八重山諸島の与那国島で日本野鳥の会八重山支部の宮良全修氏によって11羽の飛来が確認されている（崎山氏私信）。県内では迷鳥として渡来し、ふつう1羽ないし2羽の確認が多いが、今回の11羽の群れでの渡来は興味深い観察記録と思われる。また、1994年2月には西表島で2羽、石垣島の名蔵、宮良などで4羽が観察されており（崎山氏私信）、合計17羽と例年にならない渡来数の多い年になっている。

本種は近年まで国内で繁殖していたが、1960年頃に絶滅し、現在では中国大陸産の個体がまれに渡来するとされている（世界文化社、1984）。県内にもこうして渡来した個体が、次頁にまとめたように比較的多く記録されている。

3、クロツラヘラサギ *Platalea minor* Temminck & Schlegel

〈コウノトリ目トキ科〉

宮古諸島の池間島で1993年11月27日に1羽確認されている（伊良波氏私信）。別に同年12月7日に那覇市の漫湖においても、比嘉邦昭氏らによって1羽確認されている。その後漫湖に飛來した個体は、1994年2月20日にも目撃されたので、およそ3ヶ月間越冬していたことになる（写真2）。

県内での分布については、日本鳥学会（1974）によると、南部琉球（石垣）とされて

いるが、近年では豊見城村瀬長島や漫湖の記録（沖縄野鳥研究会、1986）があり、また八重山野鳥の会（1983）によって、八重山諸島の石垣島（1976/5/5）、与那国島（1981/11）の記録、久貝ら（1981）によって、宮古島与那覇湾（1979/12/28）などの記録がみられる。

〈コウノトリの県内における目撃記録〉

報告者等	確認時期	確認場所	備考
高良ら（1969）	1967年1月	那覇市漫湖	
八重山野鳥の会（1983）	1974年1月19日	石垣島	
	1975年11月25日（越冬）	石垣島	
	1980年2月24日	与那国島	
	1980年5月	西表島	
	1981年11月29日から1982年3月	小浜島	
久貝ら（1981）	1979年12月28日	宮古諸島伊良部島	
嵩原（1990）	1981年12月19日	名護市三原で池長裕史氏目撃	
沖縄野鳥研究会（1993）	1987年2月15日	豊見城村漫湖	
沖縄野鳥研究会（1986）	1983年10月	糸満市西崎	
嵩原（1993）	1986年2月22日	大宜味村大保川河口	

4、コハクチョウ *Cygnus columbianus jankowskii* Alpheraky

〈ガンカモ目ガンカモ科〉

1993年12月1日の早朝、沖縄島南部の浦添市牧港漁港内において衰弱している個体が又吉良雄氏によって保護された。その後筆者の元に連絡が入り、同個体を受け取った後沖縄市にある「沖縄こどもの国」に保護・収容した。同園では獣医及び飼育係によって体力の回復が図られたが、エサを摂取することなく、3日後に弊死した。

その後間もなく、12月5日早朝に沖縄市にある瑞慶山ダムのダム湖内でコハクチョウ2個体の飛来が確認され（佐藤文保私信）、その日の午後2時頃には、沖縄こどもの国園内にある越来ダムに移動してきていることが確認されている（写真3）。2個体のうち1個体は亜成鳥だったので、おそらく親子であろう。

本種はユーラシア大陸北部で繁殖し、中国南部や日本（本州）で越冬するとされ、日本における越冬地の南限は島根県中海や宍道湖などとなっている（世界文化社、1984）。今回の渡来は、おそらく中国南部に渡る個体が琉球列島側に迷行してきたものと考えられる。

本種の県内におけるこれまでの記録は、1976年12月29日に名護市の柳ダムで観察記

録されている（友利、1977）。その他には1976年12月に石垣島で記録があり（八重山野鳥の会、1983）、また沖縄野鳥研究会（1986）によると伊是名島、北大東島、小浜島などの記録が報告されている。

〈弊死した個体の計測値〉

体長：111cm、尾長：17.8cm、翼長：48.8cm、開翼長：176cm

嘴峰：101.04mm、附蹠：101.35mm、体重：3.5kg（弊死時2.9kg）

5、ツクシガモ *Tadorna tadorna* (Linnaeus)

〈ガンカモ目ガンカモ科〉

1994年1月4日に具志川市塩屋の海岸で10羽渡来していることが、吉里伸氏によって観察されている（写真4）。本種はまれな冬鳥として渡来し、数は1羽から2羽の例が多い。10羽の例は興味深い記録である。なお、1月30日には11羽に増えていることが確認されている（吉里氏私信）。

県内では、八重山諸島の石垣で1975年12月（八重山野鳥の会、1983）、宮古諸島の池間島で1978年1月30日（久貝ら、1981）、沖縄本島では1968年12月から1969年1月30日にかけて那覇市の漫湖（高良ら、1969）、1985年1月に具志川市（沖縄野鳥研究会、1993）、名護市（友利、1977）などの記録がある。

6、オジロワシ *Haliaeetus albicilla albicilla* (Linnaeus)

〈ワシタカ目ワシタカ科〉

1993年12月29日に沖縄本島南部の糸満市報得川で、大城亀信氏によって観察されている。（1994年1月5日付け琉球新報夕刊）。その後もその地域周辺で越冬していることが確認され、1994年2月20日には糸満市西崎の北海岸で目撃された（写真5）。したがって、約2カ月近く同地域で越冬していたことになる。

県内では、古い記録として1884年4月に宮古島（久貝ら、1981）における記録があるが、近年では高良鉄夫ら（1969）によって、1968年1月18日に那覇市漫湖、同年10月29日に糸満の干潟、1969年1月15日に名護、同年2月7日に豊見城（原文は富城）、1962年1月2日に宮古島における観察記録が報告されている。また、これらの報告以外には1978年11月21日に西表島（八重山野鳥の会、1983）、1983年12月16日に与那城村屋慶名において観察記録がある（吉里氏私信）。

7、シベリアオオハシシギ *Limnodromus semipalmatus* (Blyth)

〈チドリ目シギ科〉

1993年9月27日沖縄島北部の宜野座村瀬原で、柳澤紀夫氏によって1羽確認されている（写真6）。

県内での記録は沖縄野鳥研究会（1986）によって、沖縄島中部の北谷町桑江海岸や八

重山諸島での記録がみられるが、県内では数少ない旅鳥及び迷鳥として渡来しているものと思われる。

8、リュウキュウオオコノハズク *Otus bakkamoena pryeri* (Gurney)

〈フクロウ目フクロウ科〉

1994年2月8日に沖縄島中部の北中城村安谷屋において、山城正邦氏によって弊死体が収得され、筆者に届けられた。観察の結果、足指に羽毛が見られないことから本種と判断された。本種は留鳥として県内各地に生息するが、森林地域が減少傾向のある沖縄島中部における記録としては興味深いものがある。

〈計測値〉

体長：27.0cm、尾長：10.56cm、翼長：18.76cm、開翼長：54.0cm

嘴峰：16.29mm、附蹠：43.66mm、体重：200g、備考：足指に羽毛なし。

参考文献

沖縄野鳥研究会. 1986. 沖縄県の野鳥、沖縄野鳥研究会. 265p.

沖縄野鳥研究会. 1993. 改訂沖縄県の野鳥、沖縄出版. 299p.

久貝勝盛・山本晃. 1981. 宮古島群島の鳥類目録、沖縄生物教育研究会誌17：15-30.

沖縄生物教育研究会.

日本鳥学会編. 1974. 日本鳥類目録改訂第5版. 学習研究社. 120p.

八重山野鳥の会. 1983. 八重山地方鳥類目録、p.28-38. 10周年記念誌、八重山野鳥の会.

世界文化社. 1984. 生物大図鑑、鳥類. 世界文化社. 399 p.

友利哲夫. 1977. 哺乳類・鳥類・昆虫類、p. 84-128. 名護市天然記念物調査シリーズ 第1集、名護市動物総合調査報告書、名護市教育委員会.

嵩原建二. 1990. 名護市鳥類目録、p.18-25. 名護やんばるの鳥、名護博物館.

嵩原建二. 1993. 沖縄島北部地域（国頭村・大宜味村・東村）の鳥類、p. 59-62. 特殊鳥類等生息環境調査報告書VI、沖縄県環境保健部自然保護課.

高良鉄夫・黒田長久. 1969. 琉球における未記録種および稀種、山階鳥研報：5-5、115-129.

〈図版〉



写真 1 : フルマカモメ (保護時撮影)
(1993/11/8)



写真 2 : クロツラヘラサギ
(1994/2/20・豊見城村漫湖)

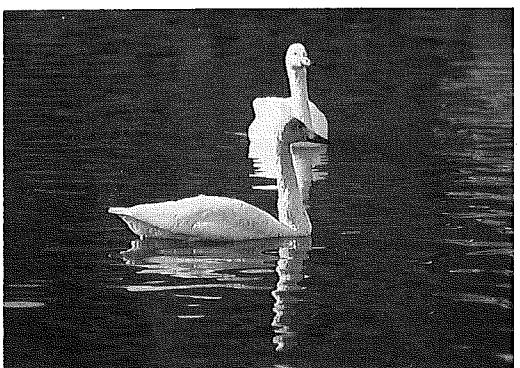


写真 3 : コハクチョウ
(1993/12/6・沖縄こどもの国)



写真 4 : ツクシガモ
(1994/1/4・撮影:吉里伸氏)

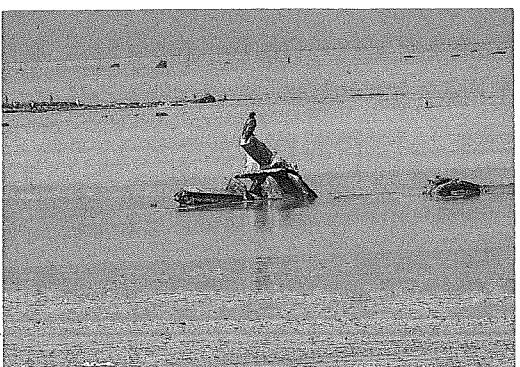


写真 5 : オジロワシ
(1994/2/20・糸満市西崎)



写真 6 : シベリアオオハシシギ
(1993/9/27・撮影:柳沢紀夫氏)

沖縄県立博物館

沖縄県立博物館紀要

第20号

1994年 3月30日 発行

編集・発行 沖縄県立博物館

〒903 那覇市首里大中町1-1

TEL (098) 884-2243

FAX (098) 886-4353

印 刷 株式会社 南西印刷

TEL (098) 884-4321

BULLETIN OF THE OKINAWA PREFECTURAL MUSEUM

No. 20

1994

CONTENTS

TOMA Shiichi : On the Ground Plan of the Gusuku, the Medieval Castles, in the Ryukyu Islands (2)	1
YONAMINE Ichiko and KINJO Takeko : A Study on the Children's Clothes and Talisman worn on the back in the Customary Upbringing of Okinawan Children	27
MAEDA Masayuki : Interpretation and Volunteer Guide	49
TAKEHARA Kenji : The Birds and Mammals of Isa, Oyama and Uchidomari, Ginowan City, in the Central Part of Okinawa-jima, Southwestern Islands of Japan	67
KUGAI Katsumori : The Relationship between Autumnal Migration of the Gray- Faced Buzzard-Eagle and the Native People of the Concentration Migratory Points	97
HAGIO Toshiaki : Report on the Materials of Mr. Mochinori UESUGI, the Second Okinawan Prefectural Governor	111
HIGA Etsuko : The Uza-gaku Instruments of Tsuwano Feudal Clan, Shimane Prefecture	129
Short Report	
TAKEHARA Kenji : The Interesting Birds that were Obserted or Given Medical Care Recently in the Okinawa Islands	141

OKINAWA PREFECTURAL MUSEUM